
鶴ヶ島市／日高市

柳戸／新山／向山／青棚

光山遺跡群

首都圏中央連絡自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告

—Ⅲ—

1995

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



梯戸遺跡



新山遺跡

序

首都圏の基幹道路は、産業の発展と自動車の増加に伴っていまや飽和状態に近付きつつあり、わか埼玉県もその例外ではありません。そこで東京から各地へ放射状に伸びる高速道路を環状に連絡することによって慢性的な交通渋滞を緩和し、東京近郊の都市を相互に連絡して地域の活性化を促進するために計画され、首都圏の広域多核都市複合体を形成し、これらの地域における交通の円滑化と、土地利用の適正な誘導を図るとともに、地域開発の基盤としての役割を果たすものです。

圏央道は、まず、埼玉県鶴ヶ島市から東京都青梅市までの区間で事業が着工されましたが、埼玉県内の建設予定路線地には埋蔵文化財包蔵地が数多く所在しております。そこで、これら埋蔵文化財の取り扱いについては関係機関と慎重に協議を重ねられてまいりましたが、路線決定にあたってどうしても避けられない遺跡については、建設省の依頼を受け、当事業団が発掘調査を実施し、記録保存の措置をとることになりました。

鶴ヶ島市内には荻葉台遺跡・脚折遺跡など奈良時代から平安時代の大集落があり、隣接する川越市も埋蔵文化財の多い地域であり、霞ヶ関遺跡をはじめとする奈良時代から平安時代の遺跡も数多く知られています。

路線内では鶴ヶ島市内で5遺跡、川越市内で2遺跡が該当し、発掘調査で貴重な成果を上げることができました。

本書はこの内、鶴ヶ島市柳戸遺跡・新山遺跡・向山遺跡・青柳遺跡、日高市光山遺跡群の発掘調査をまと

めたものであります。

これらの遺跡からは旧石器時代を中心に、縄文時代から近世までの多くの資料が出土しましたが、特に柳戸遺跡と新山遺跡から旧石器時代終末の細石器石器群を調査することができました。武蔵野台地では細石器の遺跡が少なく、この時期の遺跡が近接して見つかった例はきわめてまれです。石器に用いられた黒曜石をみますと、柳戸遺跡は信州地方、新山遺跡は伊豆地方から運ばれてきたことが推定され、この地域が古い時代から交通の要所であったことをうかがわせます。

また、柳戸遺跡では縄文時代草創期の降起線文系土器と有茎尖頭器が出土し、旧石器時代の終わりから縄文時代はじめにかけた遺跡として注目されます。

このような成果を盛った本書が、埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及・啓発及び教育機関などの参考資料として広く活用いただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力下さいました建設省大宮国道工事事務所、埼玉県土地開発公社圏央道事務所、鶴ヶ島市教育委員会、日高市教育委員会、並びに地元関係者各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成7年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 荒 井 桂

例 言

1 本書は、下記の遺跡の発掘調査報告書である。

柳戸遺跡 (YNGD)

所在地：鶴ヶ島市三ツ木201他

文化庁指示通知

平成3年7月8日付け 委保第5-877

平成3年7月8日付け 委保第5-878

平成4年7月10日付け 委保第5-791

平成6年1月26日付け 委保第5-1911

新山遺跡 (SNYM)

所在地：鶴ヶ島市三ツ木字新山1020他

文化庁指示通知

平成4年6月1日付け 委保第5-556

平成5年3月23日付け 委保第5-1453

向山遺跡 (MK1YM)

所在地：鶴ヶ島市三ツ木757-4他

文化庁指示通知

平成5年3月16日付け 委保第5-1524

青棚遺跡 (AODN)

所在地：鶴ヶ島市三ツ木字青棚760-1他

文化庁指示通知

平成6年4月15日付け 教文第2-7号

上猿ヶ谷戸遺跡 (光山遺跡群) (KZN2・3)

所在地：日高市高萩2082他

文化庁指示通知

平成5年6月8日付け 委保第5-547

2 発掘調査は、首都圏中央連絡自動車道の建設に伴う事前調査であり、埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課が調整し、建設省大宮国道工事事務所の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

3 発掘調査と整理報告書作成期間および担当者は下記のとおりである。

柳戸遺跡

平成3年1月4日～平成3年3月31日

井上尚明・石坂俊郎

平成3年4月1日～平成4年3月31日

馬橋泰雄・石坂俊郎

平成4年6月1日～平成4年9月30日

村田健二・佐藤康二

平成5年4月19日～平成5年12月24日

田中英司・上野真由美

新山遺跡

平成3年12月1日～平成4年3月31日

馬橋泰雄・石坂俊郎

平成4年6月1日～平成4年9月30日

村田健二・佐藤康二

向山遺跡

平成4年9月1日～平成4年11月30日

村田健二・石坂俊郎

青棚遺跡

平成6年4月1日～平成6年5月31日

鈴木秀雄・高崎光司

上猿ヶ谷戸遺跡 (光山遺跡群)

平成5年4月1日～平成5年12月3日

鈴木秀雄・栗岡 潤

整理・報告書作成

平成6年4月1日～平成7年3月31日

4 出土品の整理および図版の作成は井上尚明、縄文土器—金子直行、弥生土器—石坂俊郎、かわらけ—木戸春夫、他を西井幸雄が担当した。発掘調査時の写真撮影は各担当者が。遺物写真撮影は水村孝行と金子・西井が行った。巻頭カラー写真撮影は小川忠博氏に委託した。

5 柳戸遺跡の土壌分析は(株)パブリコ・サーヴェイ社。柳戸遺跡・新山遺跡の黒曜石の科学分析は(株)第四紀地質研究所に委託した。

6 本書の編集は資料部資料整理第二課の西井が担当した。

7 本書に掲載した資料は、平成7年度以降、埼玉県埋蔵文化財センターが管理保管する。

8 本書の作成にあたり、鶴ヶ島市教育委員会 安齋正人 宇田川 浩一 斉藤 稔 長崎潤一 南雲 卓 西川 制の各氏から御教示・御協力を賜った。

凡例

本書に掲載した遺構図、遺物実測図、遺物観察表の指示は以下のとおりである。

1. X・Yによる座標表示は、国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を示し、方位は、全て座標北を表す。
2. 掲載した遺跡に関し、埼玉県埋蔵文化財調査事業団年報(11～14)、現地説明会資料等に紹介されているが、内容・遺構番号等は本書が優先する。

2. 挿図の縮尺

遺構：全体図1/300、住居跡1/60、炉穴1/60
土塋1/60、集石土塋1/30

遺物：先土器石器4/5、縄文石器2/3、1/3
縄文拓本1/2、1/3、縄文土器1/6
須恵器・土師器1/4

3. 先土器時代石器分布図の記号

- * 細石核
- ▲ 細石刃
- 打面再生剥片
- △ 掻・削器
- 石核
- 剥片
- ・ 破片
- ◆ ナイフ形石器
- ▲ 敲石

4. 遺構の略号は

住居跡＝S J 掘立柱建物跡＝S B

土塋＝S K 炉穴＝F P 集石土塋＝S C

井戸＝S E 溝＝S D

5. 光山遺跡群の土器観察は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第137集「光山遺跡群」に準拠し、色調・含有物に関する略号は下記のとおりである。

色調 1＝褐色 2＝暗褐色 3＝赤褐色

4＝橙褐色 5＝灰色 6＝灰白色 7＝灰褐色

8＝青灰色 9＝灰黑色 10＝その他

含有物 A＝赤色粒子 B＝石英 C＝雲母

D＝黒褐色粒子 E＝白色粒子

F＝光沢のある黒色粒子 G＝自然軸

H＝白色針状物質 I＝その他

焼成 良好＝I 普通＝II 良くない＝III

目次

序		4. 平安時代の遺構と遺物	84
例言		5. その他の時代の遺構	87
凡例		VI 向山遺跡の調査	90
		1. 遺跡の概要	90
I 調査の概要	1	2. 縄文時代の遺構と遺物	91
1. 調査に至る経過	1	3. その他の時代の遺構	96
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	VII 青棚遺跡の調査	108
3. 発掘調査・報告書刊行事業の組織	3	1. 遺跡の概要	108
II 遺跡群の立地と環境	4	2. 縄文時代の遺物	108
III 遺跡群の概要	6	3. 周辺の石器	110
IV 柳戸遺跡の調査	10	VIII 光山遺跡群の調査	114
1. 遺跡の概要	10	1. 遺跡の概要	114
2. 先土器時代の遺構と遺物	14	2. 奈良時代の遺構と遺物	115
3. 縄文時代の遺構と遺物	28	IX 調査の成果	116
4. 弥生時代の遺構と遺物	57	1. 先土器時代	123
5. その他の時代の遺構と遺物	58	2. 縄文時代の出土土器について	136
V 新山遺跡の調査	68	付編	141
1. 遺跡の概要	68	a 土壌分析	141
2. 先土器時代の遺構と遺物	70	b 柳戸・新山遺跡出土石器の化学分析	154
3. 縄文時代の遺構と遺物	82		

挿 図 目 次

第1図 埼玉県の地形	4	第34図 出土石器 (4)	53
第2図 周辺の遺跡	5	第35図 出土石器 (5)	54
第3図 遺跡群の位置	7	第36図 第1号住居跡	57
【柳戸遺跡】		第37図 出土土器	57
第4図 調査区	10	第38図 土壌 (1)	59
第5図 基本土層	10	第39図 土壌 (2)	60
第6図 遺構全体図 (1)	11	第40図 土壌 (3)	61
第7図 遺構全体図 (2)	12・13	第41図 土壌 (4)	62
第8図 先土器時代遺物分布図	15	第42図 竪穴状遺構	63
第9図 石器集中 a	16	第43図 出土遺物	65
第10図 石器集中 b	17	【新山遺跡】	
第11図 石器集中 c	18	第44図 A区遺構全体図	68
第12図 石器実測図 (1)	20	第45図 B区遺構全体図	69
第13図 石器実測図 (2)	21	第46図 先土器時代調査範囲	70
第14図 石器実測図 (3)	22	第47図 先土器時代遺物分布図	71
第15図 石器実測図 (4)	23	第48図 石器集中 a	72
第16図 石器実測図 (5)	24	第49図 石器集中 b	73
第17図 石器接合図	24	第50図 石器集中 c	74
第18図 炉穴 (1)	29	第51図 石器実測図 (1)	75
第19図 炉穴 (2)	30	第52図 石器実測図 (2)	76
第20図 炉穴 (3)・焼土	31	第53図 石器実測図 (3)	77
第21図 土壌	32	第54図 石器実測図 (4)	78
第22図 出土土器 (1)	34	第55図 土壌	82
第23図 出土土器 (2)	36	第56図 集石土壌	83
第24図 出土土器 (3)	38	第57図 出土土器	83
第25図 出土土器 (4)	39	第58図 出土石器	83
第26図 出土土器 (5)	41	第59図 遺状遺構 (1)	84
第27図 出土土器 (6)	42	第60図 遺状遺構 (2) 及び出土土器	85
第28図 出土土器 (7)	43	第61図 遺状遺構断面図	86
第29図 出土土器 (8)	45	第62図 土壌 (1)	87
第30図 出土土器 (9)	46	第63図 土壌 (2)	88
第31図 出土石器 (1)	49	【向山遺跡】	
第32図 出土石器 (2)	51	第64図 遺構全体図	90
第33図 出土石器 (3)	52		

第65図	縄文時代の土壌	91
第66図	出土土器	94
第67図	出土石器	95
第68図	土壌の主軸方位	96
第69図	土壌 (1)	97
第70図	土壌 (2)	98
第71図	土壌 (3)	99
第72図	土壌 (4)	100
第73図	土壌 (5)	101
第74図	土壌 (6)	102
第75図	土壌 (7)	103
第76図	土壌 (8)	104
第77図	土壌 (9)	105

【青棚遺跡】

第78図	調査区	108
第79図	出土土器	109
第80図	出土石器	110
第81図	周辺の石器 (1)	110

第82図	周辺の石器 (2)	111
------	-----------	-----

【光山遺跡群】

第83図	光山遺跡群遺構分布図	114
第84図	35号住居跡	115
第85図	35号住居跡出土遺物	116
第86図	39号住居跡	117
第87図	39号住居跡カマド	118
第88図	39号住居跡出土遺物	119
第89図	56号住居跡	120
第90図	27号掘立柱建物跡	121
第91図	37号住居跡出土遺物	122
第92図	1号井戸出土土器	122
第93図	遺跡の立地	125
第94図	柳戸・新山遺跡出土の細石器	127
第95図	打面再生剥片	128
第96図	柳戸・新山遺跡出土の細石刃	131
第97図	細石刃の大きさ	132
第98図	出土土器集成図	137

表 目 次

第1表	発掘調査・整理経過表	2
-----	------------	---

第11表	土壌一覧	88
------	------	----

【柳戸遺跡】

第2表	新旧対象表	13
第3表	柳戸遺跡器種一覧	14
第4表	先土器石器一覧	25
第5表	縄文土器一覧	48
第6表	縄文石器一覧	55
第7表	土壌一覧	64

【向山遺跡】

第12表	縄文石器一覧	95
第13表	土壌一覧	105

【青棚遺跡】

第14表	石器一覧	111
------	------	-----

【新山遺跡】

第8表	新山遺跡器種一覧	71
第9表	先土器石器一覧	79
第10表	縄文石器一覧	83

図版目次

【柳戸遺跡】

- 図版1 遺跡全景
先土器石器集中
- 図版2 炉穴群a 炉穴群b 炉穴群d 炉穴群e
第46号土壇 第43号土壇 第52号土壇
- 図版3 第40号土壇 第41号土壇 第1号住居跡
第55号土壇 第62号土壇 第63号土壇
第36号土壇
第30・31号土壇
- 図版4 第17号土壇 第16号土壇 第1号井戸
第57号土壇 第51号土壇 溝 第1号方形竪穴
- 図版5 先土器石器(1)
先土器石器(2)
- 図版6 縄文石器(1)
縄文石器(2)
- 図版7 縄文石器(3)
縄文石器(4)
- 図版8 縄文土器(1)
縄文土器(2)
- 図版9 縄文土器(3)
縄文土器(4)
- 図版10 縄文土器(5)
縄文土器(6)

【新山遺跡】

- 図版11 遺跡全景
先土器石器集中
- 図版12 第15号土壇 第1号炉穴 第2号炉穴
第3号炉穴 第3号集石 第1号集石
第2号集石 第12号土壇
- 図版13 第1号土壇 第7号土壇 第8号土壇
第6号土壇 第11号土壇 第9号土壇
第10号土壇 第13号土壇
- 図版14 先土器石器(1)
先土器石器(2)

【向山遺跡】

- 図版15 遺跡全景 第89号土壇 第66号土壇
第2号土壇 第57号土壇
- 図版16 第1号井戸 第40号土壇 第48・49・50号土壇
第12・22号土壇 第70・80・87号土壇
第73・74号土壇 第81・82号土壇 第84号土壇
- 図版17 出土土器
出土石器

【青柳遺跡】

- 図版18 遺跡調査風景
縄文土器(1)
- 図版19 縄文土器(2)
縄文土器(3)
- 図版20 周辺の石器

【光山遺跡群】

- 図版21 遺跡全景 36号住居跡 39号住居跡
56号住居跡 27号竪立柱建物跡
- 図版22 出土土器

Ⅰ 調査の概要

1. 調査に至る経過

首都圏中央連絡自動車道は、東京都心から40～50kmに位置する中核都市を相互に連結するとともに、首都圏から放射状にのびる各高速道路（東名、中央、関越、東北、常磐、東関東）を連結し、地域間の交通の円滑化及び土地利用の適正な誘導を図り、諸都市の健全な発展を促進させる役割を果たすことを目的として計画された。県内では入間市の都県境から関越自動車道鶴ヶ島ジャンクションまでの延長19.8kmで事業が進められてきた。埼玉県としても県内の主要都市間を1時間以内で移動できる道路網の整備構想のもとに積極的に本事業の推進を図ってきたところである。

当事業にかかる埋蔵文化財包蔵地の取り扱い等について、文化財保護課では昭和62年度に関係市町村教育埋蔵文化財の所在

委員会の協力を得て実施した分布調査をはじめとし、事業の進捗状況に応じて関係者間で協議を重ねてきたところである。

建設省事業地については、平成元年7月24日付け大国土調第117号、平成2年3月30日付け大国土調第30号、平成3年6月21日付け大国土調二第5号で関東地方建設局大宮国道建設事務所長から埼玉県教育委員会教育長あて埋蔵文化財包蔵地の所在について照会があった。

文化財保護課では分布調査の結果等に基づき、それぞれ平成元年9月4日付け教文第703号、平成2年4月16日付け教文第37号、平成3年8月19日付け教文第397号で次の埋蔵文化財包蔵地の所在等について回答した。

所在地	遺 跡 名
日高市	谷津遺跡、西ノ久保遺跡、長山甲遺跡、上猿ヶ谷戸遺跡
川越市	光山遺跡、笹原遺跡
鶴ヶ島市	向山遺跡、横田遺跡、柳戸遺跡、青柳遺跡、新山遺跡、三ツ木遺跡、後A遺跡

上記の埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、事業の計画変更が不可能と判断されたので記録保存の措置を講ずることとし、発掘調査の実施について建設省関東地方建設局大宮国道事務所、文化財保護課、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団とで協議をした。そ

の結果、当事業団が発掘調査を実施することとなった。

各遺跡の文化財保護法第57条第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査届に対する文化庁長官の通知は、例言にある通りである。

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

首都圏中央連絡自動車道に関わる埋蔵文化財の発掘調査は、埼玉県では昭和63年度から日本道路公団施工地区から開始された。建設省施工地区は平成元年から平成6年度まで発掘調査が行われた。整理作業は平成4年度に日本道路公団地区、平成5年度に建設省施工地区の光山遺跡群の報告書が刊行された。

建設省施工地区鶴ヶ島市内の柳戸・新山・向山・青棚遺跡は、平成2年度に調査が始まり、用地買収などの関係で平成6年度まで断続的に続けられた。調査計画と工事・用地買収の進捗状況を整理するため、建設省と適宜協議をしつつ調査を進めた。各遺跡の調査期間は例言に述べたとおりであるが、以下に年度毎にその経過を概観する。

平成2年度 1月4日から柳戸遺跡の調査を開始する。調査可能な地域が分散しているため、A～D地点と呼称し調査を進めた。調査面積は5,000㎡で、主な遺構はD地点から先土器時代の細石器石器群の石器集中が検出された。3月にD地点の一部を残し、A～D地点の調査を終了した。

平成3年度 4月から柳戸遺跡の調査を継続し、E～G地点とD地点の一部を調査する。主な遺構・遺物はD地点の先土器時代の細石器石器群の石器集中、縄文時代の炉穴、Tピット、時期不詳の土壌、溝である。10月19日に柳戸遺跡の航空写真を撮影、3月にE～G地点の調査を終了した。調査面積は12,500㎡である。新山遺跡は12月1日より調査を開始した。調査区を第1表 発掘調査・整理経過表

A・Bの二つの地区に分けて進めた。A区から先土器時代の細石器石器群の石器集中、縄文時代の炉穴、時期不詳の土壌が検出された。B区では溝5条（道状遺構）と縄文時代のTピットが調査された。3月24日に新山遺跡の航空写真を撮影した。調査面積は10000㎡である。

平成4年度 6月1日から新山遺跡の調査を再開する。調査区は平成3年度に継続するもので、縄文時代の集石土壌と時期不詳の土壌が検出された。9月をもって調査を終了した。調査面積は4,500㎡である。6月1日から柳戸遺跡の調査を継続した。9月10日に航空写真を撮影した。調査面積は6,500㎡である。9月1日から向山遺跡の調査を開始した。主な遺構は縄文時代の土壌、時期不詳の土壌である。11月31日に調査を終了し、12月17日に航空写真を撮影した。調査面積は14,000㎡である。

平成5年度 4月19日から柳戸遺跡の調査を再開する。対象はJ・K地点である。調査面積は2,000㎡である。4月1日から上猿ヶ谷戸遺跡（光山遺跡群）の市道部分の調査を開始する。青棚遺跡の第1次調査を行い、縄文土器が出土した。

平成6年度 4月1日から青棚遺跡の調査を開始する。調査区は境川がひどく遺構は発見されなかった。

4月1日より整理報告書作成に入る。3月31日報告書を刊行する。

遺 跡 名	平成2年度	3	4	5	6
柳 戸	柳戸遺跡(調査区A～D)	柳戸遺跡(調査区E～G)	柳戸遺跡(調査区J・K)	柳戸遺跡(調査区L)	柳戸遺跡(調査区M)
新 山	新山遺跡(調査区A～B)	新山遺跡(調査区C～D)	新山遺跡(調査区E～F)	新山遺跡(調査区G～H)	新山遺跡(調査区I)
向 山	向山遺跡(調査区A～B)	向山遺跡(調査区C～D)	向山遺跡(調査区E～F)	向山遺跡(調査区G～H)	向山遺跡(調査区I)
青 棚	青棚遺跡(調査区A～B)	青棚遺跡(調査区C～D)	青棚遺跡(調査区E～F)	青棚遺跡(調査区G～H)	青棚遺跡(調査区I)
光 山	光山遺跡(調査区A～B)	光山遺跡(調査区C～D)	光山遺跡(調査区E～F)	光山遺跡(調査区G～H)	光山遺跡(調査区I)
整理報告書	柳戸遺跡(調査区A～D)	柳戸遺跡(調査区E～G)	柳戸遺跡(調査区J・K)	柳戸遺跡(調査区L)	柳戸遺跡(調査区M)

3. 発掘調査・報告書刊行事業の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

発掘調査（平成2年～6年）		主任	江田和美（H2～6）	整理報告書刊行（平成6年）	
理事長	荒井修二（H2～4）	主事	長滝美智子（H2～6）	理事長	荒井 桂
	荒井 桂（H5～6）		本庄朗人（H2）	副理事長	富田真也
副理事長	早川智明（H2～4）		斉藤勝秀（H2）	専務理事	板原嗣雄
	富田真也（H5～6）		福田昭美（H3～6）	常務理事 兼管理部長	加藤敏昭
専務理事	横川好富（H5）		腰塚雄二（H3～6）	理事	小川良祐
常務理事 兼管理部長	古市芳之（H2）		菊池 久（H3～6）	兼調査部長	
	倉持悦夫（H3・4）	調査部		管理部	
	柴崎光生（H5）	部長	吉川國夫	管理部長	加藤敏昭
	加藤敏昭（H6）		栗原文藏	庶務課長	及川孝之
理事 兼調査部長	吉川國男（H2）		中島利治	専門調査員 兼経理課長	関野栄一
	栗原文藏（H3・4）	副部長	小川良祐	主査	市川有三
	中島利治（H5）		塩野 博（H2）	主任	江田和美
	小川良祐（H6）		梅沢太久夫（H3・4）	主事	長滝美智子
管理部			高橋一夫（H5・6）		福田昭美
管理部長	古市芳之	第一課長	坂野和信（H2・3・6）		腰塚雄二
	倉持悦夫	第二課長	坂野和信（H4）		菊池 久
	柴崎光生	主査	大和 修（H5）	資料部	
	加藤敏昭		村田健二（H4）	資料部長	塩野 博
庶務課長	高田弘義（H2・3）	主任調査員	田中英司（H5）	副部長 兼資料整理 第一課長	谷井 彪
	萩原和夫（H4・5）		井上尚明（H2・3）	専門調査員 兼資料整理 第二課長	水村孝行
	及川孝之（H6）		鈴木秀雄（H5・6）	主任調査員	西井幸雄
経理課長	関野栄一（H2～6）		高崎光司（H6）		
主査	松本 晋（H2・3）		馬橋泰雄（H3）		
	賛田 清（H4・5）	調査員	石坂俊郎（H2～4）		
	市川有三（H6）		佐藤康二（H3・4）		
			栗岡 潤（H5）		
			上野真由美（H5）		

II 遺跡群の立地と環境

鶴ヶ島市は、武蔵野台地の東部に位置し、高麗川の作り上げた古い扇状地の扇央部にあたる。高麗川扇状地上の台地を、坂戸・鶴ヶ島台地と呼ぶ。

坂戸・鶴ヶ島台地は、西から東に向かって傾斜しており、遺跡の位置する地点は、標高40m前後である。鶴ヶ島市内には地下水を水源とする湧水が多く、幾つかの池がみられ、そこから流れ出る小河川が台地を切っている。遺跡群の横を流れる大谷川は、湧水を源とする池からの小河川で、下谷谷で他の河川と合流し、越辺川に注ぎ込んでいる。

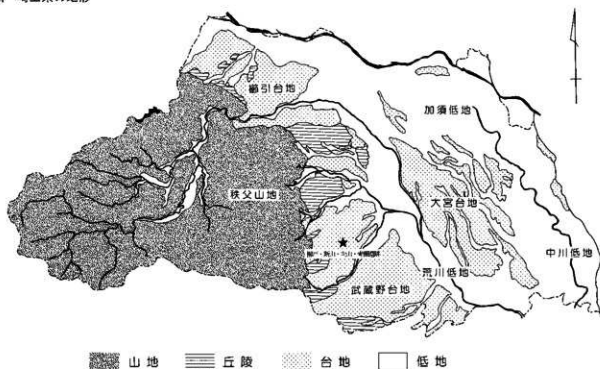
遺跡群は関越自動車道の西側に位置し、東部東上線の鶴ヶ島駅から約3km、若葉駅からは柳戸遺跡が2km、青柳遺跡で3.4kmである。

遺跡周辺の現在の景観は、比高差の少ない比較的水平な地形である。調査前の地目は柳戸遺跡が畑地、新山遺跡が山林、向山遺跡と青柳遺跡が畑地で一部山林となっていた。畑地部分では耕作によって遺構の遺存状況は極めて悪い状態であった。

鶴ヶ島市内及び周辺の遺跡を概観すると、市内の先土器時代の遺跡は、今までに7遺跡が確認されていたが、今回の調査によって柳戸遺跡、新山遺跡、横田遺跡（現在整理中）が加わり、10遺跡となった。また、川越市鶴ヶ丘C遺跡と狹山市西久保遺跡（現在整理中）からは砂川期の石器群が出土し、特に西久保遺跡で砂川期に特長的な綺麗なナイフ形石器がまとまっており、著明な砂川遺跡との距離を考え注目される。鶴ヶ丘E遺跡では砂川以降のナイフ形石器と掻器がまとまって出土している。細石器の遺跡では、柳戸遺跡、新山遺跡、横田遺跡と、日高市下向山遺跡と、所沢市中砂遺跡、清橋遺跡が挙げられ、当該期の資料的充実は見られるものがある。

次に、縄文時代を概観すると、草創期は柳戸遺跡、日高市向山遺跡が挙げられ、撚糸文系土器群は柳戸遺跡と川越市鶴ヶ丘C遺跡、押型文系土器群は柳戸遺跡、向山遺跡と日高市向山遺跡が注目される。

第1図 埼玉県の地形



第2図 周辺の遺跡



1. 柳戸遺跡 2. 横田遺跡 3. 向山遺跡 4. 青棚遺跡 5. 新山遺跡 6. 光山遺跡群
7. 下向原遺跡 8. 向山遺跡 9. 向原遺跡 10. 西久保遺跡 11. 鶴ヶ丘E遺跡
12. 鶴ヶ丘遺跡

III 遺跡群の概要

今回報告する遺跡は、柳戸遺跡、新山遺跡、向山遺跡、青柳遺跡と1994年度に刊行した光山遺跡群の市道部分である。

前者は大谷川に沿って、北から柳戸遺跡・横田遺跡(現在整理中)・向山遺跡・新山遺跡・青柳遺跡と並び、約1.5kmの範囲内に全ての遺跡が納まり、近接をしている。

柳戸遺跡

平成2年から平成5年にかけ、4回に分けて調査を行った。その為、遺構番号の呼称等に、不統一な部分があり、整理作業の段階で一部呼称の振り替えを行った。

先土器時代から近世まで多時期の遺構が検出されたが、各々の時代の内容は貧弱であった。

先土器時代は、細石器の石器集中3箇所が検出され、8点の細石核が出土したことは、特筆すべきであるが、石器の総数は少なく、器種組成は単純であった。

縄文時代の遺構は、炉穴群5箇所、炉跡3箇所、Tピットが検出された。遺物は、草創期の隆起線文系土器群と有茎尖頭器、早期押型文系土器群の比較的良好な資料、条痕文系土器群、小形の石鏃が多数出土している。

弥生時代は、竪穴住居跡1軒と櫛歯文を有する壺形土器の破片が出土している。

中・近世は土壌、竪穴状遺構、井戸が検出され、かわらけ、板碑、古銭が出土した。

新山遺跡

発掘調査は、一次調査によって、遺構が検出されない部分を範囲外とし、A・B区に分け、平成3年と4年にわたり実施した。

先土器時代の遺構は、A区から細石器の石器集中3箇所が検出された。細石核6点が出土したが、石器の点数、器種組成は柳戸遺跡同様、貧弱であった。縄文

時代の遺構は炉穴、集石土壌、Tピット等が若干検出されたが、遺物はほとんど検出されなかった。

B区から道状遺構が検出された、溝の覆土から9世紀後半の須恵器環1点が出土した。

向山遺跡

遺構は縄文時代のTピットと、近世以降の土壌が多数検出された。遺物は少なく、先土器時代の石器は、尖頭器と細石刃が数点出土し、近接する横田遺跡との関連が考えられそうである。縄文土器は押型文系土器群が若干出土した。

青柳遺跡

第一次調査で縄文中期の土器が出土したが、今回の調査では、遺構等は検出されなかった。

青柳遺跡は、先土器時代から縄文時代にかけての遺跡で、南雲氏によって表採資料が保管されている。遺物の採集地点は、調査範囲と少し離れ、中間に大谷川を挟む。今回の調査地点は遺跡の中心から外れる可能性が高い。

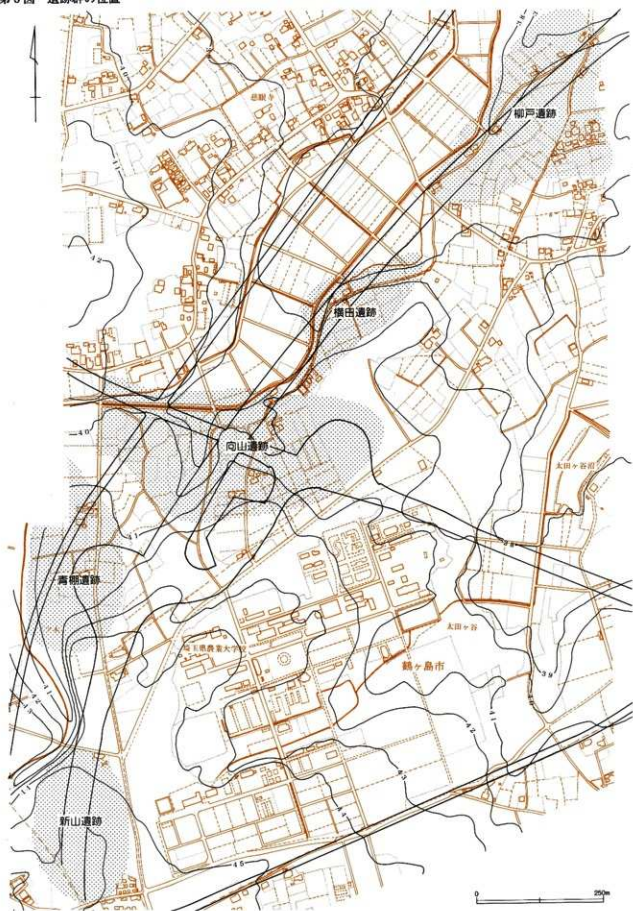
光山遺跡群

今回の報告は、1994年度刊行分『光山遺跡群』の市道部分に当たる。遺構は連続しており、新たに検出されたのは、竪穴住居跡1軒のみで、前回の調査で範囲外として残した竪穴住居跡2軒と獨立柱建物跡1棟の一部の調査である。

以上各遺跡の概要を述べた、次に遺跡群の特色について若干触れる。光山遺跡群を除いた各遺跡は、いづれも遺構の内容は貧弱で、住居跡等の生活の痕跡はほとんどみられない。鶴ヶ島市周辺の遺跡をみると、各時期とも集落跡は、台地の緑辺部、高麗川・小畔川の両岸に分布しており、本地域では、有望な縄文時代・古代の集落遺跡は望めそうにない。

しかし、先土器時代末期から縄文時代草創期・早期

第3図 遺跡群の位置



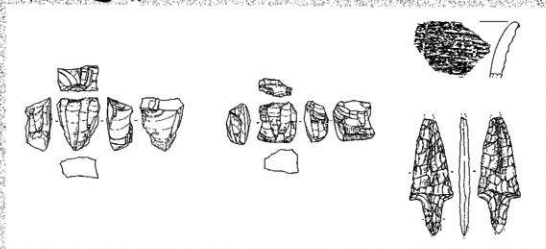
にかけては、大谷川の流域に、細石器、尖頭器を出土する遺跡が、約1.5kmの範囲に柳戸遺跡・横田遺跡・新山遺跡・青柳遺跡の4遺跡が並び、それぞれ良好な資料である。当該期の遺跡が、これほどの密度で分布する例は、関東地方でも希で、続く、縄文時代の古い段

階の遺跡も、柳戸遺跡、向山遺跡、日高市向山遺跡から隆起線文系土器群、押型文系土器群が出土している。本地域はこの時期に重要な意味をもっていたことが窺える。

参考文献

- 井上尚明 1994 『光山遺跡群』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第137集
岩瀬 譲 1985 『鶴ヶ丘(E区)』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第45集
岡本健一 1993 『谷津・二反田・下向山』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第131集
砂川遺跡調査団編 1974 『砂川遺跡』 所沢市教育委員会
田中正夫・西井幸雄 1994 『清橋遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第142集
谷井 彪・小久保 徹 1976 『鶴ヶ丘』 埼玉県遺跡発掘調査会報告書 第8集
鶴ヶ島町史編さん室 1991 『鶴ヶ島町史 原始・古代・中世編』 鶴ヶ島町
西井幸雄 1986 『中砂遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第60集

Yanagido
柳戸遺跡



IV 柳戸遺跡の調査

1. 遺跡の概要

柳戸遺跡の調査は、平成3年～平成5年の多年度にわたり、用地買収の関連で断続的となり、細かく地域区分（第4図）して実施した。そのため、遺構番号等複雑となり、整理の段階で番号の統一を行い、新旧対象表（第1表）として掲載した。また、遺物観察表には地区とグリッドを必要に応じて併記した。

調査面積は24,000㎡と広大で、先土器時代から近世までの遺物が出土しているが、遺構の内容は土壌が主体で、どの時期をとっても遺構・遺物の密度は低い。

先土器時代

D区を中心に細石器が検出されている。3つの石器集中が近接しており、細石核が複数出土している。また、細石刃は他の地区からも若干検出されている。

縄文時代

遺構はH区東端からD・F区にかけて炉穴が5群検出された。他はTピットが5基みられるが、まともではない。

遺物は、草創期の微隆起縄文系土器群と有基尖頭器がH区から、早期条痕文系土器群が比較的まとまっている以外は、前期・中期・後期の土器が散漫にみられる。また、石器は石鏃を中心にチャートの碎片が多数出土している。

弥生時代

A区で住居跡と思われる堅穴状の遺構が検出されている。遺構に伴う遺物は出土していないが、近接グリッドから弥生土器が1点出土しており、弥生時代の住居跡の可能性が指摘できる。

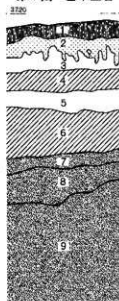
中・近世

楕円形・方形の土壌55基、井戸2基、堅穴状遺構3基と溝が検出されている。土壌は浅いものが多く、遺物を伴わないので、時期が判明したものはほとんどない。遺物は板碑、古銭、かわらけ等が出土している。

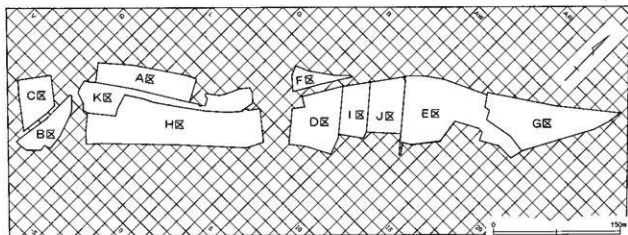
基本土層（第5図）

- 第1層 耕作土
- 第2層 ソフトローム
- 第3層 ハードローム
- 第4層 黒色帯（武蔵野台地の第1黒色帯に對比）
- 第5層 ハードローム
- 第6層 黒色帯（武蔵野台地の第2黒色帯に對比）
- 第7層 粘土層灰褐色砂混じり
- 第8層 粘土層灰褐色砂混じり
- 第9層 粘土層灰白色

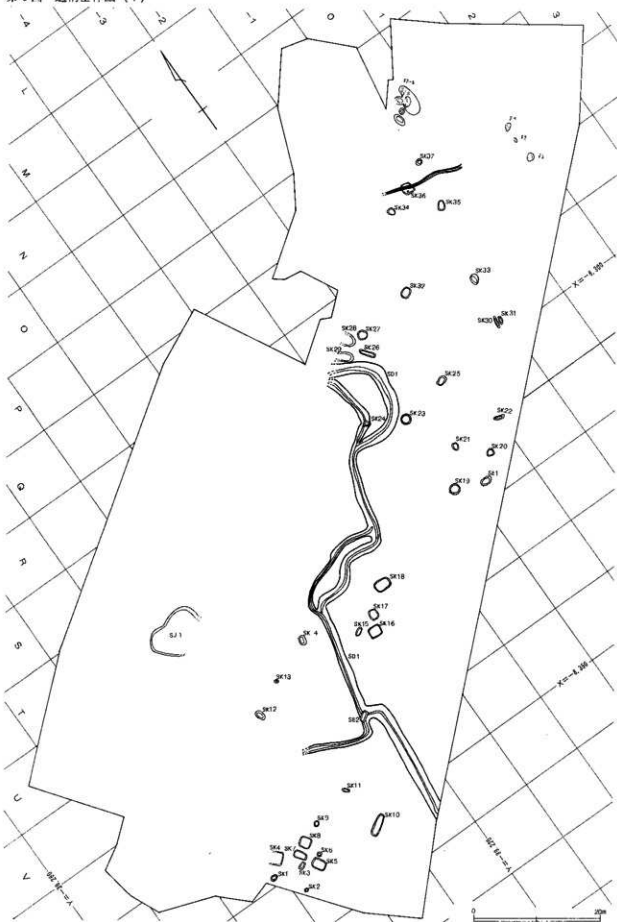
第5図 基本土層



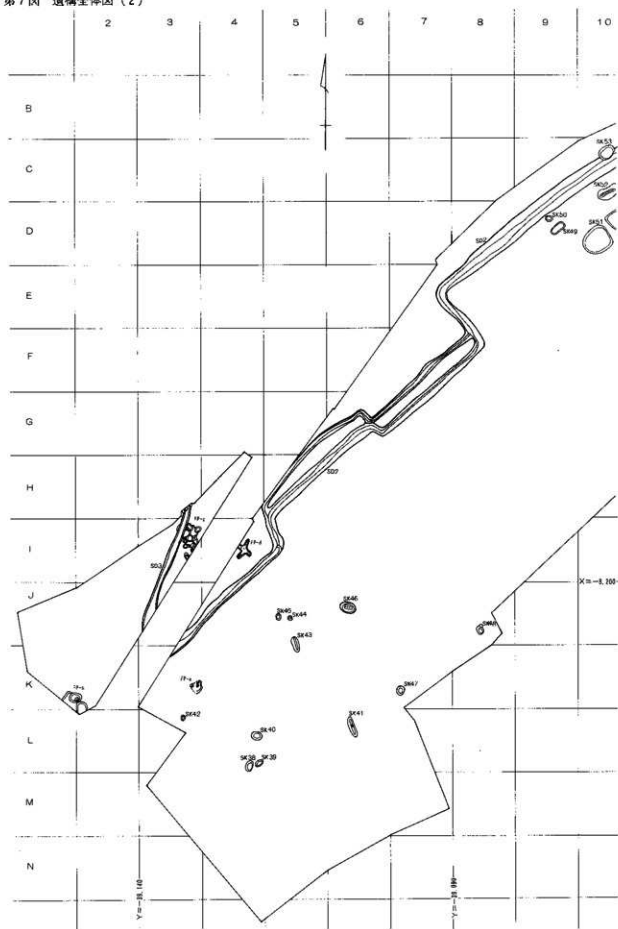
第4図 調査区

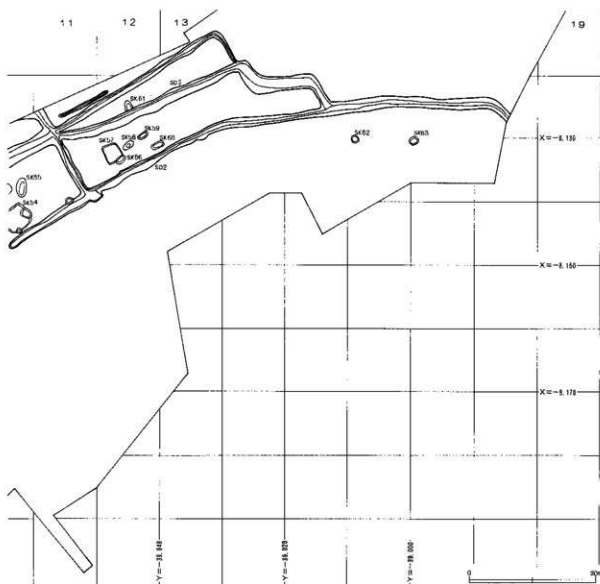


第6図 遺構全体図(1)



第7図 遺構全体図(2)





第2表 新旧対象表

新番号	旧番号	SK16	H区SK16	SK32	H区SK32	SK48	I区SK3
SK1	H区SK1	SK17	H区SK17	SK33	H区SK35	SK49	E区SK12
SK2	H区SK2	SK18	H区SK18	SK34	H区SK44	SK50	E区SK13
SK3	H区SK3	SK19	H区SK22	SK35	H区SK33	SK51	E区SK11
SK4	H区SK5	SK20	H区SK28	SK36	H区SK36	SK52	E区SK10
SK5	H区SK9	SK21	H区SK23	SK37	H区SK40	SK53	E区SK5
SK6	H区SK10	SK22	H区SK42	SK38	D区SK8	SK54	E区SK22
SK7	H区SK7	SK23	H区SK24	SK39	D区SK7	SK55	E区SK4
SK8	H区SK8	SK24	H区ST01	SK40	D区SK6	SK56	E区SK15
SK9	H区SK11	SK25	H区SK29	SK41	D区SK2	SK57	E区SK20
SK10	H区SK14	SK26	H区SK25	SK42	D区SK1	SK58	E区SK16
SK11	H区SK12	SK27	H区SK26	SK43	D区SK1	SK59	E区SK17
SK12	H区SK19	SK28	H区SK31	SK44	D区SK5	SK60	E区SK18
SK13	H区SK41	SK29	H区SK30	SK45	D区SK4	SK61	E区SK19
SK14	H区SK21	SK30	H区SK38	SK46	I区SK1	SK62	E区SK7
SK15	H区SK15	SK31	H区SK39	SK47	I区SK2	SK63	E区SK8

2. 先土器時代の遺構と遺物

先土器時代の遺物は、主にM-4・N-4グリッドを中心に3箇所の石器集中から検出された。石器集中は20mの範囲内で近接しており、石器群の内容に違いはみられず、一つの集中としても捉えられる。しかし、石器の分布に濃淡の違いがあり、幾つかのまとまりとして捉えられ、中心的部分がみられることから、a～cの英数の小文字によって表示した。

石器集中a（第9図）

M-5・L-5グリッドに位置する。石器総数は16点で、内訳は細石核1点、細石刃3点、剥片1点、砕片11点である。遺物の分布は約2mの範囲にまとまり、細石核が集中の西側、剥片が南西側に若干離れて出上し、集中部は細石刃と砕片で構成される。

細石核が石器集中cの細石刃と接合する。

石器集中b（第10図）

M-4・N-4・M-5・N-5グリッドに位置する。石器点数は80点と、柳戸遺跡の中心的な石器集中である。石器の内訳は細石核5点、細石刃25点、掻・削器1点、打面再生剥片1点、剥片10点、砕片38点と比較的豊富である。また、打面再生剥片と細石核が接合する。

遺物は南北8m、東西6.7mの帯状に比較的に分布している。細石核を中心に北側に細石刃、南側に砕片が分布する傾向がみられる。

石器集中c（第11図）

N-3・N-4グリッドに位置する。石器の総数は20点で、内訳は細石刃7点、剥片2点、砕片11点で細石核は含まれない。細石刃は石器集中aの細石核と接合する。

遺物は東西10.6m、南北7mと広い範囲に散漫に分布し、石器集中a・bと比較して中心部をもたない。

第3表 柳戸遺跡器種一覧

	細石核	細石刃	打面再生剥片	掻・削器	石核	剥片	砕片	原石	合計
石器集中a	1	3	0	0	0	1	11	0	16
石器集中b	5	25	1	1	0	10	38	0	80
石器集中c	0	7	0	0	0	2	11	0	20
その他	2	6	0	0	1	14	15	1	39
合計	8	41	1	1	1	27	75	1	155

石器（第12～17図）

細石核（第12図）

細石核は石器集中bの5点を中心に、グリッド出土を入れたと、8点検出された。石材は全て透明度の高い黒曜石を用いている。

1 石器集中b出土。作業面は正方形に近く、4条の槌状剥離面が観察される。打面は正面方向からの1回の剥離面で作られ、細かい打面調整剥離がみられる。側面及び裏面の剥離面は、打面方向からの剥離で、打点が残っていることから、細石刃作出作業がかなり進

行した残核であることが窺える。底面には原石面を残している。

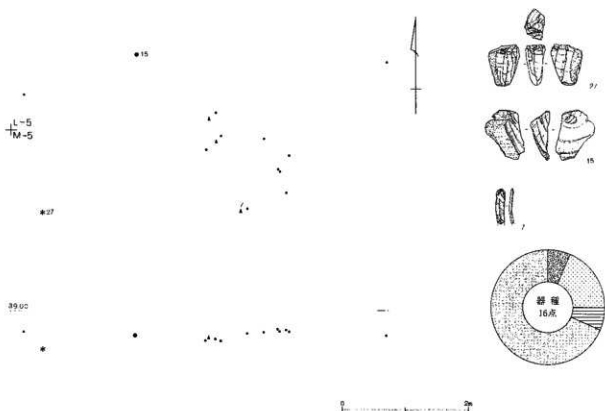
2 石器集中b出土。作業面は正方形に近く、3条の槌状剥離面が観察できる。打面は作業面方向からの1回の剥離面によって作られ、調整剥離がみられる。作業面と打面以外は原石面をそのまま残しており、小形の角礫を素材としていることが窺える。

3 D区出土。作業面は逆三角形を呈し、4条の槌状剥離面が観察できる。打面は右側に作業面方向から

第 8 図 先土器時代遺物分布図



第9図 石器集中a



の剥離面を残し、左側縁からの平坦剥離によって、僅かに鋭角にしており、打面調整も若干みられる。側面は打面方向からの剥離で構成している。打面と側面の切り合いは、打面の方が後で、現状までの過程で打面再生が行われていることが窺える。裏面の剥離面は打点から近く凹面であるため、作業の進行過程で分割等の薄化整形をした可能性がある、また、右側面に裏面からの細かい剥離が施されており、その周辺にパンチ痕が観察できる。底面に原石面を残す。

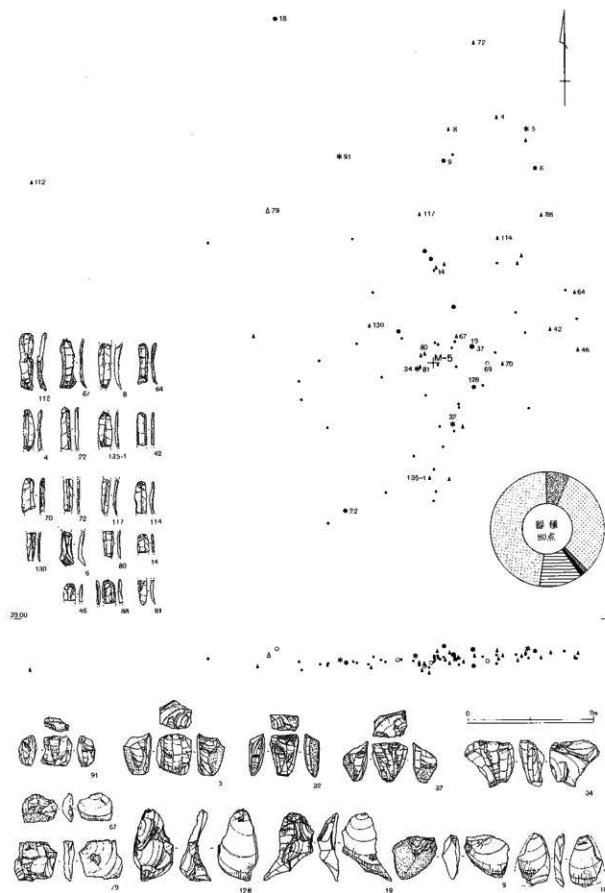
4 石器集中b出土。作業面は下端が若干平まる長方形をしており、5条の槓状剥離面が観察できる。打面は正面左側からの1回の剥離によって作られ、打面調整剥離が若干みられる。各面は裏面に剥離面、右側面に原石面、左側面に折断面がみられ、剥片を折断して形状を整えたものを石核素材に用いていることが窺える。

5 石器集中b出土。他の細石核と比較して透明度が低く不純物の混じる黒曜石である。作業面は逆三角形状となり、剥離角は他の細石核と比較して鋭角である。作業面には3～4条の槓状剥離面が観察できる。打面は打面再生剥片(9)を剥離した後に、若干の調整剥離が施されている。側面は打面方向からの剥離面で構成され、その打点は、打面によって切られている。また、打面再生剥片との新旧関係においても側面の方が先行しており、複数回にわたる打面再生または、打面調整が行われていると思われる。

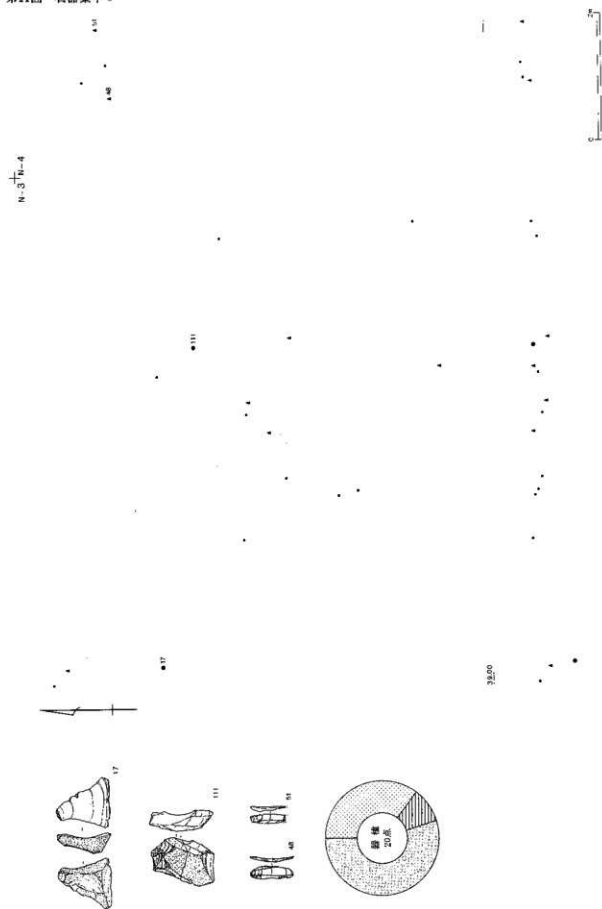
石核の素材は裏面・右側面下半部に原石面を残すことから、小形角礫であることが窺える。

6 石器集中a出土。1～5の細石核が素材を横に用いているのに対し、本資料は打面が縦長となる。作業面は正面から両側面にわたり、右側面の3条の槓状剥離が占く、左側面から両面に数条の槓状剥離がみられ

第10図 石器集中b



第11図 石器集中c



る。打面との新田関係では、ほとんどの面の打点が打面調整によって除去されている。正面に細石刃8が接合しており、それを見ると細石核の正面の幅いっぱいに使っていることがわかる。打面は右側縁方向からの剥離の後に調整剥離が人念に施している。

裏面に原石面を残しおり、石核素材は小形の角礫であることが窺える。

7 D区出土。作業面は、下か僅かに窄まる長方形を呈しており、最後の細石刃は中央で、細石核の正面幅いっぱいを取っている。作業面にみられる櫛状剥離面は最終剥離面の両側に痕跡を残している。打面は右側縦方向からの一枚の剥離によって作られている。右側面の櫛状剥離面は、打面によって打点が除去されている。左側面は原石面を残している。裏面の剥離面から厚手の剥片を石核素材に用いたと思われるが、現状で剥片剥離作業がかなり進行しており、素材の復元は難しい。

8 石器集中b出土。1~7の細石核が形状が整っているのに対し、不整形である。正面にみられる櫛状剥離面から一応細石核として扱う。作業面の打点は打面によってほとんど切られているが、正面右側縁から2条めの剥離面は、打面調整剥離によって作られた面からの剥離である。残核はほぼ使用不可能の状況で廃棄されたものと思われる。

細石刃 (第15図24~51)

細石核が8点とまとまっている割りに、細石刃は42点と少ない。また、完形のものは少なく、(26~28)は形が整っているが、(24・25)は正面に原石面を残すなど良好なものではない。

打面再生剥片 (第12図9)

正面に打点と共通する方向からの剥離面が複数観察できる。下半部に原石面を残し、両側縁に石核の側面を僅かに残している。打面再生剥片に細石核の作業面をほとんど留めず、僅かに打面部にみられるだけである。細石核5と接合する

撓器 (第12図10)

打面をやや右側縁に置くと、平面形が正方形になり、その下端の側縁に、比較的しっかりした刃部加工が施されている。打面を基準に置くと削器、平面を方形に置くとも撓器と呼べそうである。ここでは、一応撓器として捉えておく。

正面の剥離面は、中央部が打面左側縁(図では上面)からの剥離により、両側は多方向からの剥離面で構成されている。

剥片 (第12~13図11~18・20~23)

剥片は表面に原石面を残さない11・12と、原石面を残す13~18に大きく分けられる。

11は正面の剥離面の打撃方向は一定しておらず、規格性に乏しい。中央稜線からの稜上剥離がみられ、横断面が三角形なることから、稜付き石刃の可能性がある。右側縁の一部に二次加工が施されており、削器的に用いられたと思われる。

12は剥片先端部に向かって湾曲し、“し”字状になっている。左側縁は正面方向からの剥離によって面が構成され、正面は左側縁を打面とした横広で鱗状の剥離面が連続してみられ、石核作業面の再生剥片の可能性がある。右側縁の一部に二次加工が施されており、削器的に用いられたと思われる。

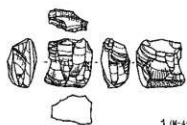
13~18は正面に原石面を残すもので、細石核の製作過程での石核調整剥片と思われる。

23は石器集中b、22はグリッド出土の接合資料である。非常に透明度の高い黒曜石も用いており、23の打面は原石面、22は線状打面である。

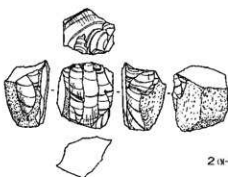
石核 (第13図19)

角礫を分割した後に、分割面を作業面としている。打面は原石の平坦面をそのまま用いており、規格的な剥片が剥離されているようではない。また、右側縁の剥離は深く挟れており、石核調整の初期段階の可能性もある。右側面及び裏面に剥片が接合する。出土地点が、石器集中と大きく離れており、同一時期の確認は

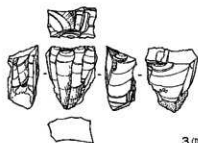
第12図 石器実測図(1)



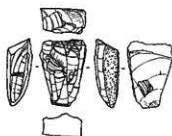
1 (M-4-91)



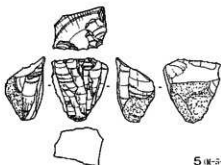
2 (M-5-2)



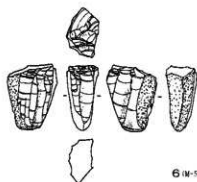
3 (M-5)



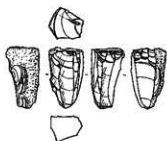
4 (M-5-32)



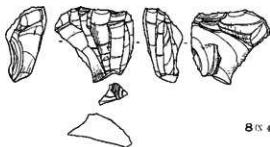
5 (M-5-37)



6 (M-5-27)



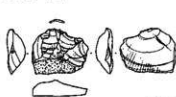
7 (M-5)



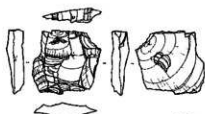
8 (M-5-4-34)



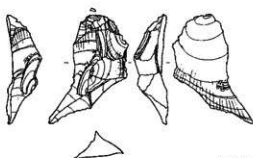
第13図 石器実測図(2)



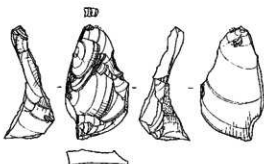
9 (H-5-69)



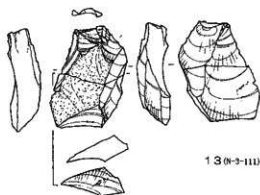
10 (H-4-79)



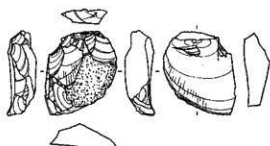
11 (H-5-19)



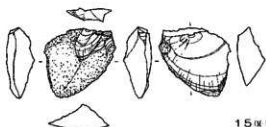
12 (H-5-128)



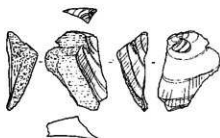
13 (H-3-111)



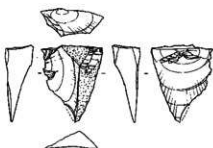
14 (H-5)



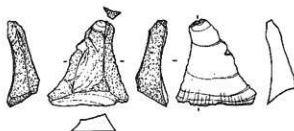
15 (H-5-9)



16 (L-5-15)



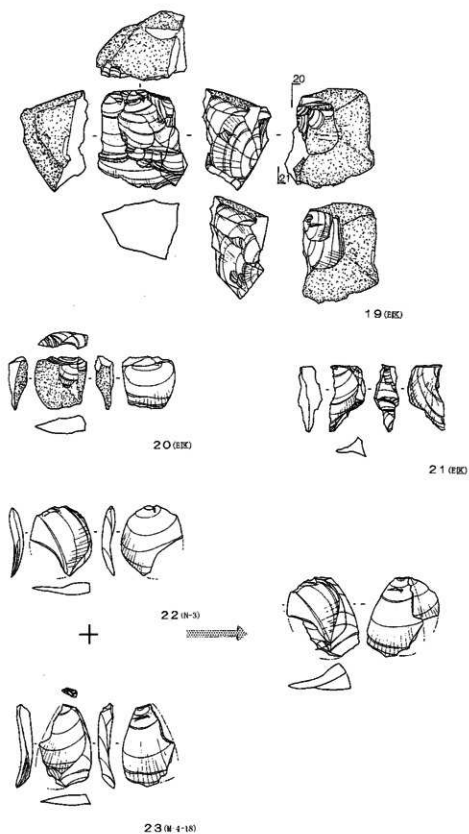
17 (C-49)



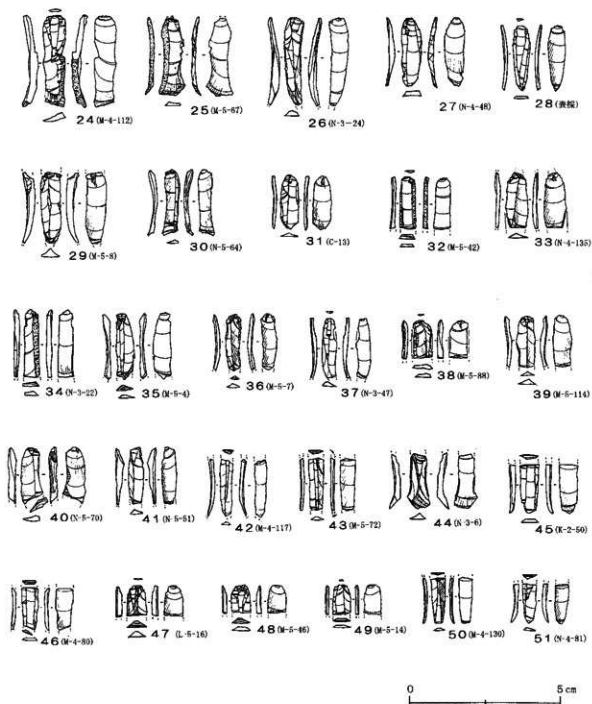
18 (X-3-17)



第14図 石器実測図(3)



第15図 石器実測図(4)



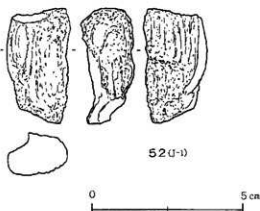
ないが、石材が共通する点と、本資料を素材に細石核を作り、残核となったと想定した場合、大きなに非常に近いものになると思われる。

原石 (第16図52)

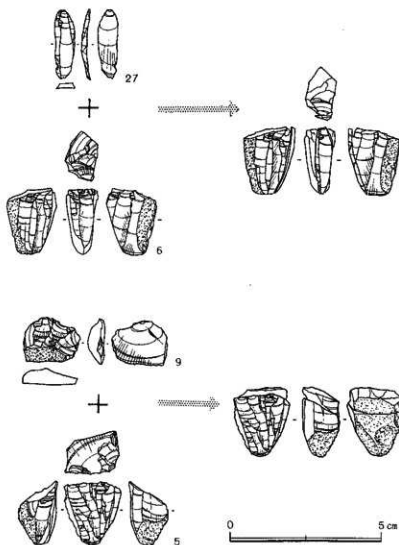
石器集中より離れたグリッドより検出された。本石

器の周辺からは、縄文時代の遺物が多く出土しており、先土器時代の所産か問題はある。しかし、縄文時代の石器のほとんどがチャートを用いており、細石核の素材の原石が、小形の角礫であることから、細石器に伴う可能性がある。

第16図 石器実測図(5)



第17図 石器接合図



接合資料(第17図)

○石核(6)・細石刃(27)の接合

接合は、石器集中aと石器集中cの間で行われ、接合距離は13.9mである。

細石核の作業面は、正面と両側面にわたっており、剥離面の切り合いから、細石刃作出過程に二つの段階がみられる。右側面の3条の稜状剥離面の打点は、打面調整によって除去され、正面・左側面の剥離面とは打撃方向が若干異なり、初期段階の作業面と考えられる。次ぎの段階は、右側面を裏面とし、左側面を作業面としたと考えられ、一連の最終段階で正面を作業面に細石刃を剥離したと想定できる。尚、右側面を底面に置くとは横断面は蒲鉾状で安定する。

○細石核(5)・打面再生剥片(9)の接合

接合は石器集中c内で行われ、距離は0.7mと接近している。

細石核の現状は、作業面が逆三角形状となるもので、剥離角が他の細石核と比べると鋭角となる。打面は正面右側からの一枚の剥離によって平坦面が作られ、打面調整が僅かにみられる。

打面再生剥片(9)と接合した状態の細石核をみると、打面と作業面の剥離角は直角に近く、他の細石核とはほとんど同じになる。また、接合した状態で、作業面の長さにより変化がみられない。打面再生による作業面の縮小を極力少なくする方法として、作業面から裏面方向に傾斜して剥離を行った可能性が高い。換言すれば、作業面がこれ以上短くなると、細石核として役に立たなくなってしまうかもしれない。因みに細石核の長さは(1)の1.6cm以外は、2~2.5cmと近い数値を示しており、細石刃は完形のもので一回り長いもの(24~26)と、近い長さのもの(27・28)がみられる。細石刃作出作業の最終段階の細石核の姿がここにみられるようである。

打面は作業面方向からの打面調整剥離が入

第4表 先土器石器一覧

番号	グリップ	集中	北-南	西-東	標高	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
3	L-5	a	948	20	38.67	砕片	黒曜石	(1.10)	0.70	0.10	0.06	
15	L-5	a	886	199	38.62	剥片	黒曜石	2.60	2.10	1.10	3.45	第13図16
16	L-5	a	986	314	38.59	細石刀	黒曜石	1.00	0.65	0.20	0.14	第15図47: 頭部
17	L-5	a	976	324	38.55	砕片	黒曜石	(1.15)	0.65	0.15	0.12	
22	L-5	a	900	594	38.61	砕片	黒曜石	1.30	0.70	0.25	0.18	
18	M-4	b	458	753	38.55	剥片	黒曜石	2.80	1.75	0.55	1.70	第14図23
74	M-4	b	963	950	38.38	砕片	黒曜石	(0.90)	1.20	0.30	0.30	
75	M-4	b	952	944	38.38	剥片	黒曜石	2.40	0.80	0.65	0.78	
79	M-4	b	758	740	38.45	撚器	黒曜石	2.10	2.30	0.60	2.50	第13図10
80	M-4	b	987	985	38.36	細石刀	黒曜石	1.40	0.60	0.20	0.12	第15図46: 中間部
84	M-4	b	890	905	38.42	砕片	黒曜石	0.65	1.35	0.20	0.21	
91	M-4	b	673	852	38.42	細石核	黒曜石	1.60	1.60	1.00	2.87	第12図1
97	M-4	b	811	644	38.39	砕片	黒曜石	0.50	0.40	0.05	0.02	
100	M-4	b	959	720	38.32	細石刀	黒曜石	0.70	0.70	0.15	0.09	頭部
102	M-4	b	998	820	38.31	砕片	黒曜石	(0.95)	0.70	0.10	0.03	
104	M-4	b	971	879	38.33	砕片	黒曜石	(1.30)	1.00	0.60	0.56	
108	M-4	b	804	873	38.35	砕片	黒曜石	0.70	0.25	0.10	0.01	
112	M-4	b	714	363	38.26	細石刀	黒曜石	3.00	0.75	0.50	0.53	第15図24: 完形
117	M-4	b	766	977	38.34	細石刀	黒曜石	1.90	0.50	0.20	0.12	第15図42: 中間部
119	M-4	b	823	986	38.29	剥片	黒曜石	1.40	1.20	0.30	0.42	
120	M-4	b	836	996	38.34	剥片	黒曜石	1.50	1.70	0.45	1.06	
126	M-4	b	989	981	38.27	細石刀	黒曜石	1.00	0.40	0.15	0.04	尾部
130	M-4	b	942	899	38.30	細石刀	黒曜石	1.50	0.50	0.15	0.08	第15図50: 中間部
4	M-5	b	612	100	38.51	細石刀	黒曜石	2.15	0.60	0.25	0.29	第15図35: 中間部
5	M-5	b	630	147	38.52	細石核	黒曜石	2.20	1.90	1.50	5.82	
6	M-5	b	692	162	38.50	剥片	黒曜石	2.25	(1.70)	0.40	1.29	
7	M-5	a	134	365	38.67	細石刀	黒曜石	1.85	0.50	0.25	0.16	第15図36: 中間部
8	M-5	a	130	375	38.65	砕片	黒曜石	0.85	0.55	0.10	0.03	
8	M-5	b	631	25	38.48	細石刀	黒曜石	2.30	0.65	0.35	0.42	第15図29: 中間部
9	M-5	a	66	423	38.72	砕片	黒曜石	0.50	0.50	0.10	0.02	
9	M-5	b	680	18	38.58	剥片	黒曜石	2.30	2.40	0.95	3.43	第13図15
10	M-5	a	46	440	38.68	砕片	黒曜石	(0.45)	(0.45)	0.10	0.02	
11	M-5	a	70	426	38.68	砕片	黒曜石	0.45	0.55	0.15	0.03	
13	M-5	a	104	437	38.70	砕片	黒曜石	0.55	0.30	0.05	0.02	
14	M-5	b	851	5	38.49	細石刀	黒曜石	1.00	0.60	0.10	0.07	第15図49: 頭部
18	M-5	a	24	326	38.53	細石刀	黒曜石	0.90	0.45	0.10	0.05	中間部
19	M-5	a	14	333	38.54	砕片	黒曜石	(1.00)	0.90	0.30	0.20	
19	M-5	b	976	62	38.53	剥片	黒曜石	3.60	2.70	1.30	3.81	第13図11
20	M-5	b	886	209	38.50	砕片	黒曜石	1.20	1.45	0.30	0.28	
23	M-5	a	35	309	38.54	砕片	黒曜石	1.60	0.90	0.30	0.37	
27	M-5	a	134	50	38.41	細石核	黒曜石	2.20	1.10	1.60	3.83	第12図6
36	M-5	b	971	8	38.44	砕片	黒曜石	0.95	0.70	0.20	0.09	
37	M-5	b	974	62	38.53	細石核	黒曜石	2.10	1.90	1.30	4.12	第12図5
38	M-5	b	985	100	38.44	砕片	黒曜石	0.60	1.35	0.30	0.17	
41	M-5	b	953	147	38.45	砕片	黒曜石	1.05	1.45	0.20	0.24	
42	M-5	b	947	185	38.49	細石刀	黒曜石	1.70	0.55	0.20	0.17	第15図32: 中間部
44	M-5	b	921	131	38.45	砕片	黒曜石	1.05	0.55	0.10	0.07	
46	M-5	b	979	229	38.47	細石刀	黒曜石	0.90	0.65	0.20	0.11	第15図48: 頭部
54	M-5	b	911	33	38.45	剥片	黒曜石	1.30	1.60	0.50	0.76	
59	M-5	b	648	146	38.49	細石刀	黒曜石	0.70	0.50	0.15	0.05	中間部
64	M-5	b	890	223	38.42	細石刀	黒曜石	2.20	0.60	0.25	0.17	第15図30: 完形
65	M-5	b	969	4	38.37	砕片	黒曜石	(1.05)	1.30	0.35	0.37	
66	M-5	b	967	35	38.39	砕片	黒曜石	(1.00)	0.30	0.10	0.03	
67	M-5	b	959	38	38.40	細石刀	黒曜石	2.10	0.90	0.30	0.31	第15図25: 完形
72	M-5	b	495	64	38.42	細石刀	黒曜石	1.70	0.50	0.15	0.13	第13図43: 中間部

番号	グリッド	集中	北-南	西-東	標高	器種	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
73	M-5	b	855	2	38.42	砕片	黒曜石	(1.75)	0.75	0.20	0.22	
88	M-5	b	766	170	38.41	細石刃	黒曜石	1.25	0.65	0.20	0.15	第15図38: 頭部
89	M-5	b	831	139	38.43	細石刃	黒曜石	0.50	0.50	0.15	0.02	中間部
90	M-5	b	671	32	38.46	砕片	黒曜石	(0.60)	(1.80)	0.35	0.41	
107	M-5	b	844	18	38.37	細石刃	黒曜石	1.20	0.50	0.20	0.12	中間部
114	M-5	b	803	102	38.38	細石刃	黒曜石	1.70	0.60	0.20	0.17	第15図39: 中間部
123	M-5	b	843	101	38.31	砕片	黒曜石	(1.25)	0.40	0.25	0.09	
124	M-5	b	843	133	38.36	細石刃	黒曜石	1.45	0.60	0.15	0.13	中間部
133	M-5	b	931	228	38.39	砕片	黒曜石	(1.40)	0.45	0.25	0.11	
2	N-3	c	49	197	38.28	砕片	黒曜石	1.20	0.80	0.15	0.11	
6	N-3	c	71	220	38.12	細石刃	黒曜石	1.80	0.75	0.40	0.25	第15図44: 中間部
17	N-3	c	220	224	37.77	剥片	黒曜石	2.80	2.70	1.05	4.15	第13図18
22	N-3	c	360	640	38.13	細石刃	黒曜石	2.20	0.55	0.20	0.26	第15図34: 中間部
23	N-3	c	357	620	38.19	砕片	黒曜石	0.65	0.55	0.10	0.16	
24	N-3	c	392	592	38.33	細石刃	黒曜石	2.90	0.70	0.40	0.33	第15図26: 完形
25	N-3	c	350	424	38.37	砕片	黒曜石	0.90	1.60	0.50	0.57	
29	N-3	c	418	520	38.21	砕片	黒曜石	0.65	0.50	0.10	0.04	
30	N-3	c	426	740	38.09	細石刃	黒曜石	1.35	0.40	0.20	0.07	中間部
43	N-3	c	530	500	38.27	砕片	黒曜石	0.40	0.20	0.05	0.01	
44	N-3	c	500	492	38.32	砕片	黒曜石	1.30	0.90	0.25	0.25	
47	N-3	c	660	694	38.31	細石刃	黒曜石	2.00	0.50	0.20	0.12	第15図37: 中間部
58	N-3	c	622	922	38.31	砕片	黒曜石	0.70	1.50	0.25	0.25	
109	N-3	c	218	684	38.24	砕片	黒曜石	1.04	0.85	0.20	0.13	
110	N-3	c	318	898	38.23	砕片	黒曜石	0.50	0.30	0.15	0.02	
111	N-3	c	276	728	38.31	剥片	黒曜石	3.35	2.60	1.15	2.68	第15図13(3.87E)
—	N-3	—	—	—	—	剥片	黒曜石	2.35	2.10	0.45	1.29	第14図22
21	N-4	b	253	834	38.31	砕片	黒曜石	1.85	0.95	0.65	0.81	
22	N-4	b	234	862	38.32	剥片	黒曜石	1.90	1.55	0.50	0.98	
34	N-4	b	11	973	38.43	細石核	黒曜石	2.50	2.60	1.30	6.06	第12図8
47	N-4	c	108	146	38.46	砕片	黒曜石	1.80	0.70	0.20	0.17	
48	N-4	c	150	139	38.35	細石刃	黒曜石	2.23	0.65	0.30	0.24	第15図27: 完形
49	N-4	c	145	174	38.48	砕片	黒曜石	(0.95)	1.20	0.30	0.34	
51	N-4	c	130	230	38.45	細石刃	黒曜石	1.85	0.50	0.20	0.18	第15図41: 中間部
60	N-4	b	206	925	38.33	砕片	黒曜石	1.05	0.60	0.10	0.06	
77	N-4	b	23	918	38.36	砕片	黒曜石	1.45	1.20	0.35	0.49	
81	N-4	b	6	978	38.39	細石刃	黒曜石	1.30	0.50	0.20	0.09	第15図51: 尾部
101	N-4	b	30	788	38.34	砕片	黒曜石	0.30	0.20	0.05	0.01	
113	N-4	b	148	969	38.34	砕片	黒曜石	1.35	0.65	0.20	0.15	
129	N-4	b	51	987	38.28	砕片	黒曜石	1.00	0.95	0.20	0.14	
132	N-4	b	103	833	38.28	砕片	黒曜石	1.80	0.85	0.40	0.62	
134	N-4	b	59	792	38.22	砕片	黒曜石	(0.85)	0.50	0.15	0.07	
135-1	N-4	b	182	994	38.24	細石刃	黒曜石	1.85	0.70	0.20	0.23	第15図33: 中間部
135-2	N-4	b	182	994	38.24	砕片	黒曜石	(0.70)	0.50	0.20	0.04	
24	N-5	b	218	1	38.34	砕片	黒曜石	(1.00)	0.60	0.10	0.04	
25	N-5	b	204	5	38.41	砕片	黒曜石	1.45	0.85	0.20	0.18	
26	N-5	b	168	1	38.41	砕片	黒曜石	1.85	0.50	0.55	0.49	
28	N-5	b	132	17	38.42	砕片	黒曜石	2.10	1.60	0.75	0.60	
29	N-5	b	108	34	38.37	砕片	黒曜石	(1.60)	0.70	0.20	0.19	
30	N-5	b	102	11	38.38	砕片	黒曜石	(0.90)	0.50	0.05	0.02	
32	N-5	b	97	32	38.45	細石核	黒曜石	2.20	1.55	0.85	3.01	第12図4
33	N-5	b	72	42	38.41	砕片	黒曜石	1.10	0.50	0.10	0.05	
35	N-5	b	2	8	38.41	砕片	黒曜石	(0.95)	0.50	0.40	0.19	
39	N-5	b	37	79	38.43	砕片	黒曜石	(0.80)	0.25	0.10	0.01	
40	N-5	b	73	152	38.41	砕片	黒曜石	(0.85)	0.55	0.20	0.09	
68	N-5	b	7	37	38.38	砕片	黒曜石	1.05	0.75	0.20	0.14	
69	N-5	b	0	87	38.37	打面再生剥片	黒曜石	1.50	1.90	0.60	1.50	第13図9
70	N-5	b	2	110	38.43	細石刃	黒曜石	1.85	0.90	0.30	0.31	第15図40: 中間部

番号	グリッド	集中	北-南	西-東	標高	器種	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
82	N-5	b	66	41	38.30	砕片	黒曜石	1.35	(1.00)	0.25	0.15	
83	N-5	b	101	47	38.34	細石刀	黒曜石	0.65	0.60	0.15	0.06	頭部
94	N-5	b	183	26	38.32	細石刀	黒曜石	1.85	0.60	0.20	0.17	中間部
128	N-5	b	39	65	38.29	剥片	黒曜石	3.80	2.10	1.70	6.67	第13図12
2	M-5	a	19	401	38.67	砕片	黒曜石	(0.55)	0.60	0.10	0.03	
-	D区	-	-	-	-	剥片	黒曜石	2.75	2.40	0.95	5.80	第13図14
-	D区	-	-	-	-	細石刀	黒曜石	1.10	0.45	0.10	0.04	尾部
-	D区	-	-	-	-	細石核	黒曜石	2.00	1.20	1.10	2.51	第12図7
-	D区	-	-	-	-	細石核	黒曜石	2.10	1.70	1.00	3.79	第12図3
-	C-12	-	-	-	-	石核	黒曜石	3.30	2.65	1.95	16.70	第14図19
-	C-13	-	-	-	-	細石刀	黒曜石	1.80	0.60	0.15	0.15	第15図31：完形
-	C-13	-	-	-	-	剥片	黒曜石	2.25	0.95	0.35	0.30	
-	C-17	-	-	-	-	剥片	黒曜石	2.40	1.60	0.65	2.18	
-	C-22	-	-	-	-	砕片	黒曜石	(1.80)	(1.15)	0.20	0.23	
-	C-27	-	-	-	-	砕片	黒曜石	1.05	0.45	0.20	0.09	
-	C-40	-	-	-	-	砕片	黒曜石	0.45	1.15	0.30	0.38	
-	C-49	-	-	-	-	剥片	黒曜石	2.50	2.10	0.95	2.53	第13図17
-	C-5	-	-	-	-	砕片	黒曜石	0.80	1.50	0.35	0.30	
-	C-6	-	-	-	-	剥片	黒曜石	2.10	1.45	1.10	2.10	
-	E区	-	-	-	-	剥片	黒曜石	2.20	1.25	0.80	1.16	第14図21
-	C-B	-	-	-	-	細石刀	黒曜石	1.20	0.65	0.20	0.13	完形
-	D-32	-	-	-	-	細石刀	黒曜石	1.20	0.40	0.15	0.08	中間部
-	J-1	-	-	-	-	剥片	黒曜石	2.10	0.95	0.45	0.53	
-	J-1	-	-	-	-	砕片	黒曜石	0.80	0.30	0.40	0.10	
-	J-1	-	-	-	-	原石	黒曜石	3.80	2.10	1.75	14.71	第16図52
-	J-1	-	-	-	-	砕片	黒曜石	1.20	0.90	0.25	0.26	
-	J-1	-	-	-	-	砕片	黒曜石	0.40	0.40	0.10	0.01	
-	J-2	-	-	-	-	砕片	黒曜石	0.70	1.35	1.20	0.13	
-	K-1	-	-	-	-	砕片	黒曜石	1.45	1.10	0.35	0.52	
-	K-1	-	-	-	-	砕片	黒曜石	(1.65)	0.70	0.20	0.08	
-	K-1	-	-	-	-	剥片	黒曜石	1.20	2.40	0.75	1.65	
-	K-1	-	-	-	-	剥片	黒曜石	2.00	1.30	1.55	1.24	
-	K-1	-	-	-	-	砕片	黒曜石	1.95	1.60	0.30	0.76	
-	K-2	-	-	-	-	砕片	黒曜石	0.60	0.20	0.20	0.04	
-	K-2	-	-	-	-	細石刀	黒曜石	1.65	0.65	0.20	0.21	第15図45：中間部
-	K-3-3	-	-	-	-	砕片	黒曜石	1.80	0.65	0.10	0.09	
-	E区	-	-	-	-	剥片	黒曜石	1.75	1.75	0.65	1.82	第14図20
-	表採	-	-	-	-	剥片	黒曜石	2.35	1.80	0.80	1.75	
-	表採	-	-	-	-	細石刀	黒曜石	2.15	0.60	0.20	0.15	第15図28：完形
-	表採	-	-	-	-	剥片	黒曜石	(1.70)	1.75	0.20	0.76	
-	E区	-	-	-	-	剥片	黒曜石	(1.30)	2.40	0.70	2.51	
-	表採	-	-	-	-	砕片	黒曜石	1.55	0.70	0.15	0.09	

念に施されており、打面作出の際の剥離面は右側に僅かに観察できる程度になっている。この段階を打面の最終状況とみるならば、他の細石核はこの段階には到達する前に、何等かの理由で、作業を止め廃棄された

ものかもしれない。

両側面の剥離面は、接合した状態でも打点はみられず、接合時点以前に、打面再生又は打面調整が入念に施され、高さが減少していたことが窺える。

3. 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、炉穴と土壇いわゆるTピットである。

炉穴は、I-P・0～4列グリッドの約40mの範囲に、a～eの5群検出された。遺構の依存状態は、現在の耕作（トレンチャー）によってかなりの部分が破壊されている。遺構に伴う遺物はほとんどみられず、時期を確定する資料は無かった。

Tピットは、D区から3基、E区から1基検出された。D区の第41・43号土壇の主軸は共通している。

炉穴群a（第18図）

P-0・0-0グリッドに位置する。平面プランが長楕円形の3基と、円形の小形のもの1基が、近接及び重複している。規模は長軸が4.0m、3.3m、2.3mと0.9m、短軸は1.5m、1.2m、0.9mと0.9m、深さは0.5m、0.3m、0.3mと0.3mで、主軸はN-5°-E、N-23°-W、N-21°-Wである。

炉穴群b（第18図）

K-1・2グリッドに位置する。3基の炉穴が重複している。一部が調査範囲外になるため、平面プランが明かなものは1基で、円形を呈している。焼土の分布が複雑である。

炉穴群c（第19図）

H-3・I-3グリッドに位置する。多くの炉穴が重複し、近接して3基の炉穴の下底部がみられる。西側部分を3号溝によって破壊されている。耕作による擾乱が激しく、遺構の依存状態は極めて悪いため、切り合っている炉穴の実数は不明である。

炉穴群d（第20図）

I-4グリッドに位置する。4基の炉穴が十字状に重複し、それぞれの先端に焼土がみられる。平面プランは楕円形で、規模は長軸3.7m、短軸2.8m、深さ

0.2～0.4mである。

炉穴群e（第20図）

K-3グリッドに位置する。3基の炉穴が重複している。西側部分は耕作の為に削平され、底面の焼土部分のみ検出された。平面プランは不定形で長軸1.9m、短軸1.5mである。

第1・2・3号焼土（第20図）

Q-1グリッドに3基、並んで検出された。検出面を僅かに窪ませ、焼土が充填されていた。炉穴の分布範囲と近接している。

第48号土壇（第21図）

J-6グリッドに位置する。平面プランは楕円形を呈し、底面にピットが3本、等間隔に並ぶ。長軸2.5m、短軸1.9m、深さ0.6mで、主軸はN-47°-Eである。

第52号土壇（第21図）

D-9グリッドに位置する。平面プランは不定形の楕円形で、中央部に溝状の深い部分がみられ、遺構埋没の過程で周辺が崩落したものと思われる。長軸3.5m、短軸1.9m、深さ0.9mで、主軸はN-23°-Eである。

第41号土壇（第21図）

L-6グリッドに位置する。平面プランは細長い楕円形で底部の中央にピットが1本ある。長軸3.4m、短軸1.1m、深さ0.7mで、主軸はN-19°-Wである。

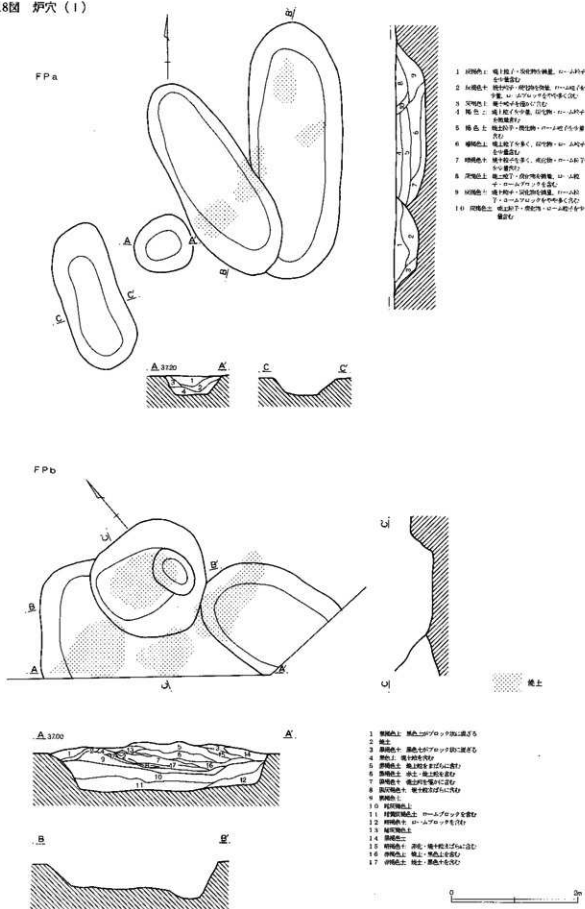
第43号土壇（第21図）

J-5グリッドに位置する。平面プランは細長い楕円形である。長軸2.4m、短軸1.0m、深さ0.7mで、主軸はN-17°-Wである。

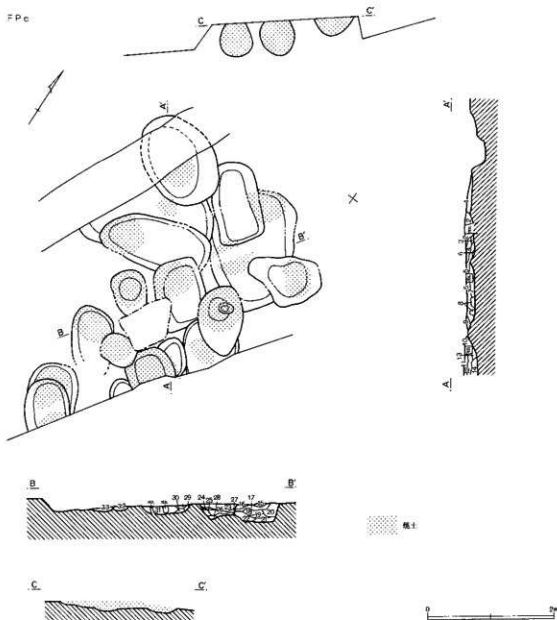
第46号土壇（第21図）

L-4グリッドに位置する。平面プランは円形に近い。長軸1.6m、短軸1.3m、深さ0.7mで、主軸はN-89°-Wである。

第18図 炉穴(1)

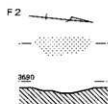
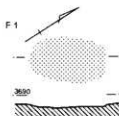
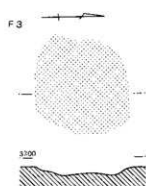
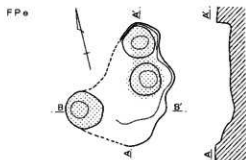
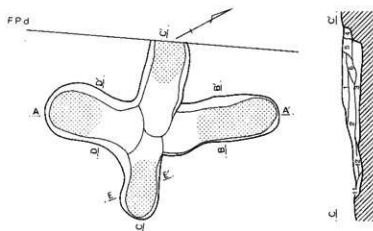


第19図 炉穴(2)



- | | |
|-----------|-----------------|
| 1 炉穴内上 | 18 炉穴内上 |
| 2 炉穴内上 | 19 ロームブロックと炉穴内上 |
| 3 炉穴内上 | 20 炉穴内上 焼土跡 |
| 4 炉穴内上 | 21 焼土跡 |
| 5 炉穴内上 | 22 焼土跡 |
| 6 ロームブロック | 23 焼土跡 |
| 7 炉穴内上 | 24 ロームブロック |
| 8 炉穴内上 | 25 ロームブロック |
| 9 炉穴内上 | 26 焼土跡 |
| 10 炉穴内上 | 27 焼土跡 |
| 11 炉穴内上 | 28 ロームブロック |
| 12 炉穴内上 | 29 焼土跡 |
| 13 炉穴内上 | 30 焼土跡 |
| 14 炉穴内上 | 31 焼土跡 |
| 15 炉穴内上 | 32 ロームブロック |
| 16 炉穴内上 | 33 焼土跡 |
| 17 炉穴内上 | |

第20図 炉穴(3)・焼土



- 1 焼土 色土 ローム状・ロームブロック・焼土層下を穿つ
- 2 焼土 色土 焼土層下を穿つ・焼土層下のローム状土を穿つ
- 3 焼土 色土 ロームブロック・ローム状土を穿つ
- 4 焼土 色土 ローム状土・焼土層下を穿つ
- 5 焼土 色土 ローム状土・焼土層下を穿つ
- 6 焼土 色土 焼土層下・ローム状土・ロームブロックを穿つ
- 7 焼土 色土 焼土層下・ローム状土・ロームブロックを穿つ
- 8 焼土 色土 焼土層下・ローム状土・ロームブロックを穿つ
- 9 焼土 色土 ロームブロック・焼土層下・焼土層下を穿つ
- 10 焼土 色土 焼土層下・ローム状土を穿つ
- 11 焼土 色土 焼土層下・ローム状土・ロームブロックを穿つ
- 12 焼土 色土 焼土層下・ローム状土・ロームブロックを穿つ
- 13 焼土 色土 焼土層下・ローム状土を穿つ
- 14 焼土 色土 焼土層下・ローム状土を穿つ
- 15 焼土 色土 焼土層下・ローム状土を穿つ
- 16 焼土 色土 ロームブロックを穿つ・焼土層下・ローム状土を穿つ
- 17 焼土 色土 焼土層下・ローム状土・ロームブロックを穿つ
- 18 焼土 色土 ローム状土を穿つ
- 19 焼土 色土 ローム状土を穿つ
- 20 焼土 色土 ロームブロック・焼土層下を穿つ

0 2m

出土土器 (第22~30図)

御戸遺跡からは、縄文時代各時期の土器群が出土している。特に、草創期の隆起線文系土器群を始めとし、早期の土器群が充実している。

第I群土器 (1、2)

草創期の隆起線文系土器群を一括する。1は口唇直下の破片と思われ、破片上部に外傾の強い部分が認められる。やや厚手ではあるが、胴部にかけて薄くなる傾向にある。モチーフは2条の細隆起線文を横位に配し、やや間隔を開けて縦位に細隆起線文を垂下している。破片内では、2条の細隆起線文が確認される。いずれの細隆起線文上にも、加飾は施されない。胎土は細砂粒を多く含むが緻密で、非常に堅緻である。

2は口縁部がやや開く器形を呈し、口縁部に微隆起線文を配するものである。口唇外端部には、緩い波状を呈する細隆起線文を1条貼付し、以下5~6条の微隆起線文を横位に施文する。この微隆起線文は、一見器壁のなぞり上げ手法の成形に見えるが、極く細い細隆起線の貼付を施したのちに、その裾の部分に強いナデ整形を施して成形されていることが観察される。微隆起線文は、部分的に剥落していたり、途切れていることが観察される。口縁部裏面には輪轡痕と指頭の整形痕が僅かに残るが、その上に軽いナデ整形が施される。胎土は粘土質で、少量の小礫と砂粒を含む。焼成はあまり良くなく、色調は灰褐色を呈する。

第II群土器 (3~44)

早期初頭の燃糸文系土器群を一括する。

第1類 (1)

胴部と口唇部に施文するものを一括する。1は1点のみ検出されたが、口唇部がやや肥厚して外反する器形を呈し、口唇部上面に横位、口縁部に縦位の絡条体条線文を施す。胴部施文の後、口縁部を整形してから口唇部施文を施している。砂粒を多く含むが、緻密な胎土で、焼成良く堅緻な土器である。色調は暗赤褐色を呈する。井草II式に比定される。

第2類 (4~36)

胴部のみに施文する夏島式を一括する。地文には燃

糸文と縄文が施される。

a種 (4~30、36) 燃糸文を施すものを一括する。

4は口唇部があまり肥厚しない角頭状を呈し、外折する器形を呈する。燃糸文は口唇部直下からやや斜位に施文されるが、最後に口唇下の外折部に燃糸原体を強く圧痕する。原体は太い燃糸Rである。裏面には指頭整形痕が残り、赤褐色を呈する。

5は口唇部が先細りするが4と同様に強く外折し、口唇部下に燃糸系原体を圧痕する。地文は燃糸Rで、口唇部下に圧痕した後、やや斜位に施文する。胎土に小礫、砂粒を多く含む、暗赤褐色を呈する。

6~28は細かい燃糸Rを密に施す胴部破片であり、殆どが同一個体と思われる。13、15、20、24等には横位の沈線文状の傷が見られる。明橙褐色を呈し、胎土に砂粒、白色粒下を多く含む。29、30はやや太い燃糸Rを斜位に施文する。

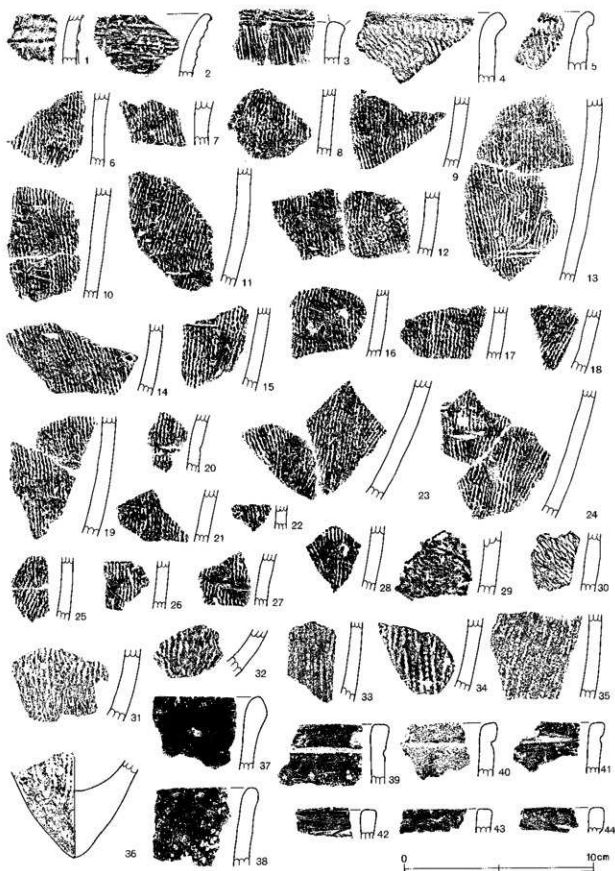
31、32は底部付近の破片で、やや太い燃糸Rを縦位に施文する。36は底部で、細い燃糸Rを密に施文する。底部は厚く、36mmを測る。

b種 (33~35) 縄文施文のものを一括する。33は細かな縄文RLを施し、胎土に砂粒と白色粒子を含む堅緻な土器である。34は節の大きい縄文RLを器面に浅く施文するため、糸間がやや開いている。砂粒をあまり含まず、白色粒子を多く含む。35は固く燃ったやや太めの原体を、器面に浅く施文するため糸間がやや開く。原体は縄文RLで、胎土に砂粒を多く含むが、堅緻な土器である。

第3類 (37、38)

胴部にのみ施文する稲荷古式を一括するが、本遺跡では無文土器のみが検出されている。37は口唇部が肥厚して、若干内彎気味に開く器形を呈する。口唇外端部に強い横ナデ状の整形を施し、口唇下の緩い折れ部に横位のナデ整形を施す。稲荷古式でも新しい特徴を示す。器面は良く研磨され、胎土は非常に緻密である。明橙褐色を呈する。38は丸頭状で肥厚しない口唇部が、緩く開く器形を呈する。内外面に指頭整形痕が残るが、外面は縦位のナデ整形が施される。砂粒を多く含むが

第22图 出土土器 (1)



緻密な胎土で、暗赤褐色を呈する。

第4類 (39~44)

口縁部に横位の沈線文を施す無文土器の東山式を一括する。39は若干肥厚する角頭状の口唇部が¹やや開きながら立つ器形を呈し、口唇下約12mmの部位に角状の沈線文を施文する。内外面とも丁寧な横位のナデ整形が施される。砂粒をあまり含まず非常に緻密な胎土で、明赤褐色を呈する。40は若干内削状の口唇部が²内嚢気味に立つ器形を呈し、口唇下約10mmの部位に挟る様な断面三角形の沈線文を巡らす。砂粒、白色粒子を多く含むが堅緻な土器で、明褐色を呈する。41は口唇下約7mmの部位に浅い凹線状の沈線文を巡らす。42は角頭状の口唇部が³やや肥厚し、緩く外反する器形を呈する。口唇下約10mmの沈線文は難足し状に施文される。43、44はいずれも角頭状の口唇部を呈するが、沈線文の部分で割れている。

第III群土器 (45~93)

早期前葉の押型文系土器群を一括する。

第1類 (45~93)

山形押型文土器を一括する。

a種 (45、52~55、58、59) 山形押型文をやや間隔を開けて帯状に施文するものを一括する。原体は比較的短いものが使用される。45は唯一口縁部の裏面施文があるもので、口唇部上にも施文する。押型文は口唇部内外面に横位1帯、以下縦位にやや間隔を開けて施文するが、表面では縦位施文後、口縁部の横位施文を施す。この山形押型文の原体は、長さ約17mm、径5mm弱を測り、4条の山形文を刻むものである。口縁部から胴部にかけての破片がなく、文様構成が不明であるが、横位1帯構成と思われる。52、59は同一個体である。片岩類の小礫を多く含む、雲母を少量含む。色調は暗赤褐色を呈する。

53は4条の山形文を刻むが、山形が緩い。口縁部の外反が強いので、原体の端部のみ圧痕される。54、55は明瞭に無文部を残し、4条の山形文を刻むものである。55は原体長約17を測る。58は原体端部が不明瞭なため山形文の条数を決めかねるが、5条まで観察され

る。原体長は22mm以上である。

b種 (46~51、56、57、60~93) 山形押型文を密に施文するものを一括する。原体はやや長いものが使用される。本種では口縁部の裏面施文は行われない。口縁部に1帯横位施文し、以下縦位に密接施文する構成を呈する。何れも口縁部が緩く外反する器形を呈し、口唇部上に押型文を施文する点はa種に類似する。a種との相違は原体の長さと、口縁部裏面施文の有無である。

46は口縁部施文の幅が26mmを測り、2回施文の可能性もあるが不明瞭であり、1回施文であるとするかになり長い原体となる。47は25mm、48は24mm、49は25mm、50は26mmと何れも25mm前後を測り、この種の原体は比較的に長い原体を使用することが特徴となっている。従って、胴部破片では器壁の曲面に対して、原体幅全てを圧痕することは困難なことである。そのため圧痕が重複して施文されることとなり、原体の末端を観察することが難しくなる。a種に比べて器壁がやや厚くなり、雲母を含むものの、片岩類の小礫を含む割合が少なくなる。

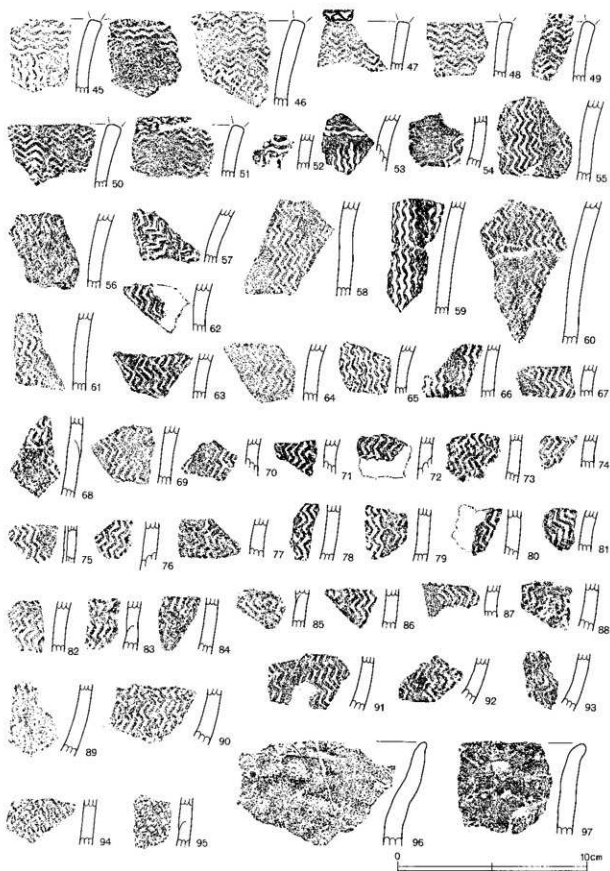
第2類 (94)

ネガティブな斜格子目押型文を施文するものである。1点のみの出土で、破片も小さく、全体構成及び原体幅等は不明である。格子目文と言うよりも、長方形の圧痕が、縄文の条と節の関係の様に整然と並んでいる。破片は縦位の施文の上に、横位の施文が重複しており、拓本では不鮮明であるが切り合い関係は明瞭である。全体構成は不明であるが、帯状施文されている可能性が高い。胎土は細砂粒を多く含むが緻密で、雲母を含まない。裏面は丁寧に整形されており、黒褐色を呈する。

第3類 (95)

押型文系土器群に伴う縄文施文土器である。1点のみ検出された。単節RLを横位施文するもので、口縁部付近の破片である。捻糸土器に近い様な強い撚りを加えた縄文で、器面にやや浅く施文されている。胎土は砂粒、白色粒子を多く含む、雲母を若干含む。94

第23图 出土土器 (2)



に類似した胎土である。内外面とも良く整形されており、暗赤褐色を呈する。

第4類 (96、97)

押型文系土器群ではないが、都合で早期の無文土器をこの類に一括する。時期的には不明瞭であり、型式表象は異なるが、平板式段階に比定される可能性がある。96は口縁部がやや内彎気味に開く器形を呈する。口唇部は先細り状となり、胎土に多量の片岩類の小礫を含む。97は口唇部がやや外傾して立つ器形を呈し、胎土に小礫、砂粒を多く含む。外面は整形されているが、内面は荒れており、指頭整形痕が残る。あるいは摺系土器に含まれる可能性もある。

第IV群土器 (98～129)

早期中葉の貝殻沈線文系土器群を一括する。全体構成を把握できる破片がないため、文様要素と、文様構成から以下の様に分類される。

第1類 (98、101～106、109～111、126)

細沈線文と刺突文が複合されるものを一括する。98は緩い波状縁を呈し、外削状の口唇部に刻みを施している。やや強く外反する器形を呈し、3本の細沈線文と縦長の刺突文列が組合わさって、文様帯を区画している。101は口唇部がやや平坦となるが、口唇直下に縦長の刺突文列を施し、間隔の開いた沈線文で口縁部を区画している。内外面とも丁寧な整形を施す。暗赤褐色を呈し、白色粒子を多く含む。

102～104は同一個体で、細沈線文に挟まれた刺突文帯で横帯に多段区画し、区画内を縦位、斜位の集合沈線文で三角形を基調とした細区画を施し、縦長の刺突文を充填施文する構成を採る。文様帯を区画する集合細沈線文は4本を基本とする。胎土に砂粒と白色粒子を多く含む、内面に縦位の削り状の強い整形を施している。105、106は同一個体で、構成は102～104と同様であるが、区画の集合沈線文の本数が多く、太い。また、充填刺突文も爪形状の連続刺突文状となる。

109～111は文様帯の横帯区画要素として、縦長の刺突文列を施文するものである。109は刺突文の上に細沈線文を、下に貝殻腹縁文を施文する。110は刺突文の

上に山形の沈線文を伴い、111は109と同一個体で、刺突文の下に貝殻腹縁文を施文する。126は貝殻腹縁文のみ施文するものであるが、胎土等から109と同一個体と思われる。何れも胎土は緻密で、内面に強い整形痕を持ち、赤褐色を呈する。

第2類 (107)

文様帯を多段に分割し、集合沈線文で鋸歯状文を構成するものである。107は1点のみの出土であるが、集合沈線文で粗く横帯区画し、2段構成の鋸歯状文を描くものと思われる。細砂粒を多く含むが緻密で、堅緻な土器である。表面を丁寧に整形し、裏面に縦位の強いケズリ状の整形を施す。色調は赤褐色を呈する。

第3類 (99、100、108、112～124)

集合細沈線文のみで文様を構成するものを一括する。99、100は外削状の口唇部が外反する器形を呈し、口唇下から縦位の集合沈線文が垂下して口縁部文様帯を構成する。108も同様な破片である。

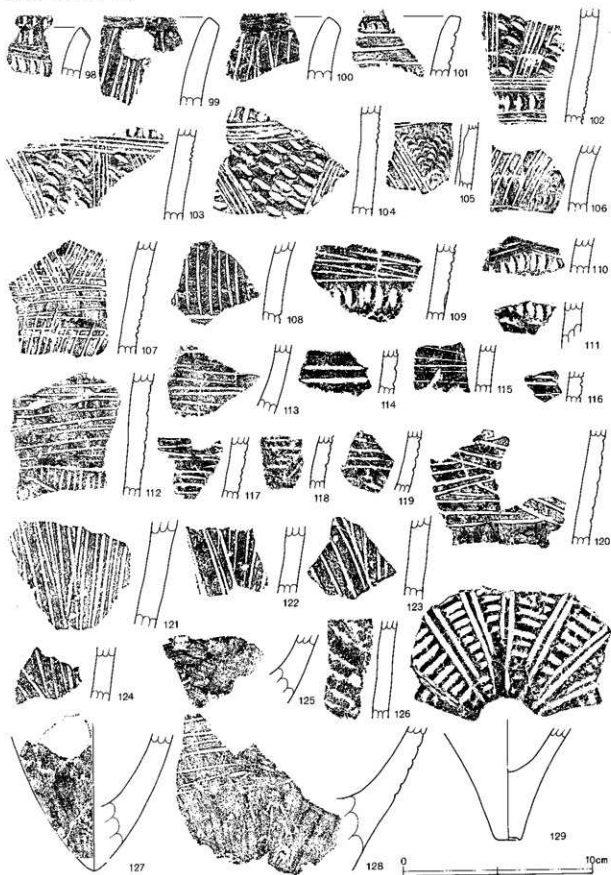
112はやや間隔の開いた平行沈線文帯の下に区画文様帯を持つもので、斜位の細沈線文区画内に集合沈線文を充填施文する。113～117、119は平行沈線文のみ施文されている破片である。119は3～4本単位の集合沈線文を交互に入り組ませて施文するもので、文様帯の下端部分にあたる。121～124は胴部下半から底部付近にかての破片で、集合細沈線文を縦位、斜位に垂下させるものである。何れも器面をよく研磨した後細沈線文を施文するもので、内面には縦位の強い削り状の整形痕が観察される。胎土に砂粒を多く含むが緻密で、赤褐色を呈する堅緻な土器群である。

128、125は同一個体の底部破片であり、縦位の強い整形の上に横位の細沈線文を施文する。127はやや薄くて天狗の鼻状にはならない尖底を呈し、文様は見られない。小礫、砂粒を多く含む、強い削り状の整形痕が見られる。

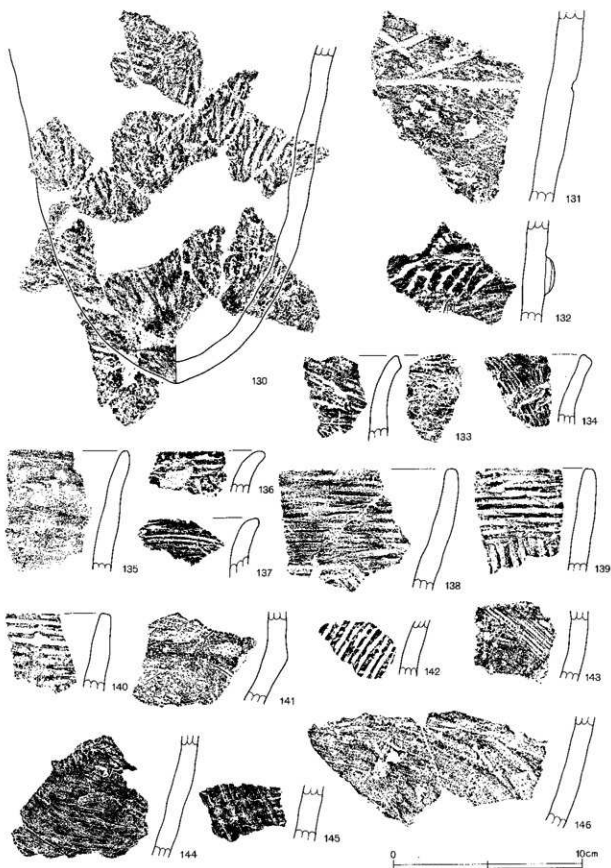
第4類 (129)

太沈線文のみを使用する土器群で、129は天狗の鼻状に突き出した尖底を呈する。文様は底部まで2本対の太沈線文を垂下して分割し、同種の沈線文を横位に

第24图 出土土器 (3)



第25図 出土土器 (4)



充填施文する。沈線文は半截竹管状工具で施文されており、横位沈線文の描出開始部分に工具の形状が明瞭に残る。砂粒、白色粒子を多く含む緻密な胎土で、暗赤褐色を呈する。

第V群土器 (130~164)

条痕文系土器群の中でも、早期末葉の土器群を一括する。

第1類 (131)

やや太い沈線文で、粗い斜格子目文を施文するものである。胎土に若干繊維と、多量の小礫、砂粒を含み、器壁が1cm以上の厚手を呈する。擦痕状の粗い整形が施され、太い凹線状の沈線文で格子目文を描く。器形の変化等なく、所属時期は不明瞭であるが、茅山上層式期に比定されると思われる。

第2類 (132)

絡条体瓦痕文を施文するものである。132は1点のみの出土であるが、口縁部を太い隆帯文で区画し、隆帯上に斜位の絡条体土痕文を施す。口縁部にはやや太めの絡条体土痕文を鋸歯状の構成に施文する。胎土には繊維を多く含み、比較的純粋な粘土を使用している。表面とも擦痕状の整形が施されている。第1類と同様に茅山上層式期に比定されるものと思われる。

第3類 (130、133~164)

条痕文のみ施文し、文様持たない無文土器を一括する。130は唯一器形を復元できる大型破片であり、現存高19cmを測る。外面に明瞭な条痕文整形が施されており、裏面には指頭整形痕が残る。明赤褐色を呈し、胎土に繊維を多く含み、小礫、砂粒を多く含む。

133、134は外削状の口唇部が強く外反する器形を呈し、口唇上に指頭で揃む様な押正が施されている。内外面とも条痕文整形を施すが、133は粗く、134は細かい整形を施す。何れも繊維を多く含み、暗赤褐色を呈する。

135は先細りする口唇部が緩く開く器形を呈し、内外面ともに擦痕状の整形を施す。繊維を多く含み、淡赤褐色を呈する。136、137は先細りする口唇部が強く外反する器形を呈し、条痕文整形が明瞭に施される。

繊維を多く含み、暗赤褐色を呈する。138、139は同一個体で、若干内彎する口縁部が開く器形を呈する。条痕文は口縁部で横位の文様帯状に施文し、以下斜位から縦位へと施文する。繊維を少量含み、焼きが堅く、淡赤褐色を呈する。140は口唇部を角頭状に整形し、口縁部に横位の条痕文を施文する。裏面は擦痕状の整形となる。繊維をあまり含まず堅緻で、暗赤褐色を呈する。141は屈曲部の破片で、内外面とも擦痕文整形を施す。繊維を少量含み、橙褐色を呈する。142は条痕文を深く明瞭に施文するもので、モチーフ状に施文している可能性がある。

144~146は擦痕状整形の土器で、147~164は条痕文整形の破片である。何れも繊維を多めに含み、暗赤褐色から橙褐色を呈する。147~153は同一個体と思われる、外面には条痕文を、内面には擦痕文を施し、胎土に繊維と小礫を多く含む。

第VI群土器 (165~186)

花積下層式を中心とした、早期末から前期初頭の土器群を一括する。

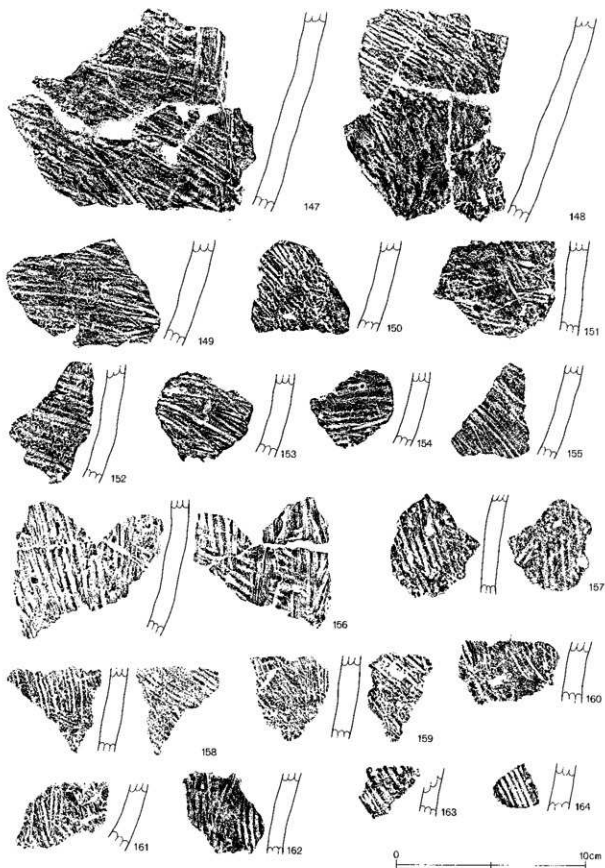
第1類 (165~175)

擦痕文、条痕文整形を施す土器群を一括する。第V群土器とは明瞭に区分しかねるが、本群の方が繊維を多く含み、純粋な粘土を使用するため、質感が軽く、比較的容易に区分できる。165~170は条痕文というよりも軽いナデ状の整形を施し、灰褐色を呈する。171~174は条痕文を施すが、浅い施文となる。175は平底の底部であり、繊維を多量に含み、底部にも条痕文を施文する。

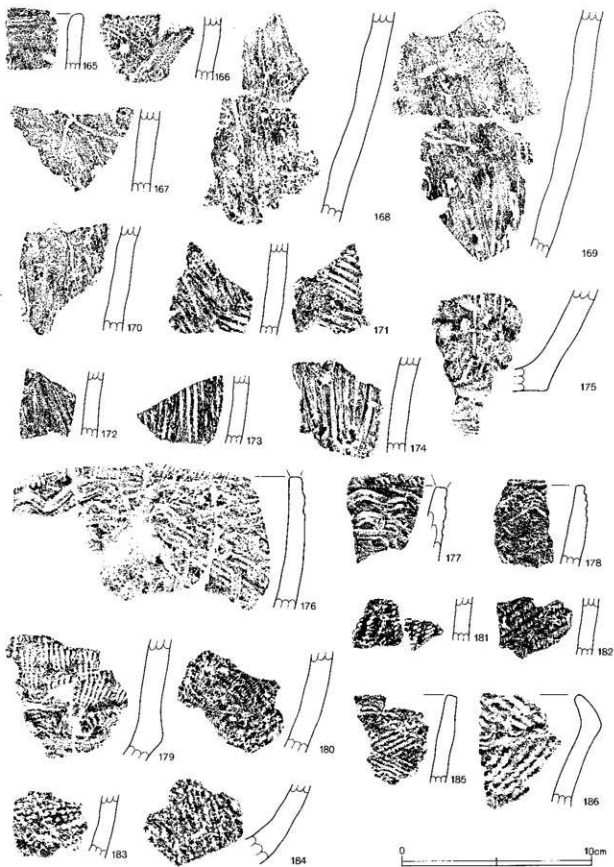
第2類 (176~178)

沈線文で波状文を描く下吉井式を一括する。波状文の構成やその崩れから、花積下層式段階の下吉井式であることは明らかである。176は角頭状の口唇部がやや内彎気味に開く器形を呈し、幅広の角状沈線文で2段の波状文を浅く描いている。口縁部文様帯の区画線は不明瞭で、部分的に波状文が縦位に垂下する。口唇部には貝殻背土痕文が施され、地文には粗い条痕文が施される。繊維を多く含み、橙褐色を呈する。177は幅

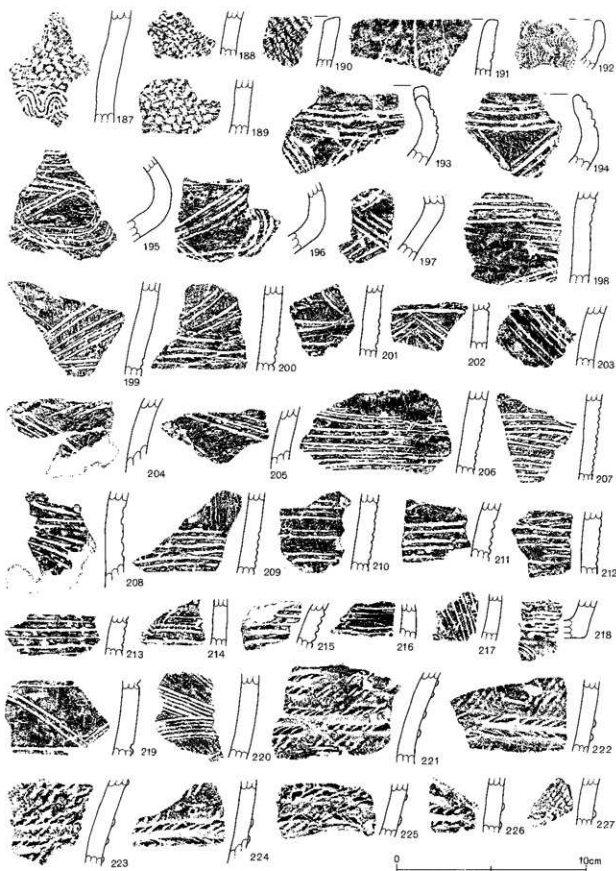
第26図 出土土器 (5)



第27图 出土土器 (6)



第28図 出土土器 (7)



狭に口縁部を区画し、2段の波状沈線文を施文する。口唇部には貝殻背片文を施文する。178は先細りする角頭状の口唇部がやや内凹気味に開く器形を呈し、口縁部に2段の波状沈線文を施文する。口縁部の区画線はなく、器面には擦痕状の整形が施される。繊維を多く含み、焼成の悪い土器で、橙褐色を呈する。

第3類 (179)

貝殻背片文を施す土器である。179は胴部の屈曲部分で、屈曲部より上の文様帯に相当する部分に貝殻背片文を施文するものである。繊維を多く含み、純粋な粘土に近い胎上で、灰褐色を呈する土器である。表面には粗い条状文が、表面には擦痕状の整形が施されている。

第4類 (180~186)

縄文を施文するものを一括する。181は0段多条縄文単節RLの施文方向を変えて、縦位に鋭角な羽状縄文を施文するものである。繊維を多く含み、赤褐色を呈する。早期終末に比定される可能性がある。

180は0段多条縄文の細かな単節RLとLRを使用して、羽状縄文を施文するものである。繊維を多く含み、灰褐色を呈する軽い土器である。182は無節縄文L、183は複節縄文LRを施文する。何れも繊維を多く含み、花積下層式に比定されよう。

185は角頭状口縁が開く器形を呈し、細かな単節LRとRLの羽状縄文を施文するもので、裏面になて整形が施される。186は口縁部が「く」字状に屈曲し、単節RLとLRによる羽状縄文が施文される。明らかな花積下層式土器である。184は底部付近の破片で、尖底になる可能性がある。不明瞭であるが、単節RLが貝殻背片文が施文される。

第VII群土器 (187~250)

前期の上器群を一括する。

第1類 (187~190、250)

繊維土器の関山II式を一括する。187は組紐縄文を施文するもので、187は櫛歯状工具によるコンパス文を施文する。190は内削状の口唇部を呈し、0段多条縄文RLを施文する。250は単節RLを施文する。何

れも繊維を多く含み、内面には丁寧な整形が施される。

第2類 (191、192、219、220)

諸磯a式を一括する。191は内削状の口唇部が開く深鉢形土器で、口縁部に2条の細い爪形文を巡らして文様帯を区画している。192は手握のミニチュア土器で、胴部に2段の爪形文を巡らしている。爪形文は細くて密に施文されるもので、西日本系のイメージを受ける。

219は細い平行沈線文で文様帯を横帯区画し、同種の沈線文を鋸歯状に施文するものである。220は櫛歯状工具によるレンズ状のモチーフが施文されており、肋骨文系のモチーフが想起される。

第3類 (193~218、221~228)

諸磯b式を一括する。

a種 (193~218、228) 沈線文系の土器群を一括する。193~218はキャリパー形の深鉢形土器で、口縁部と頸部と胴部を水平の集合沈線文で区画し、渦巻文や鋸歯状文を施文するものである。228は胴部的大型破片で、櫛歯状の条線文が横位に多段にわたって施文されている。半截竹管状の平行沈線文や単独の沈線文を施文するものは古段階から中段階に、櫛歯状の条線文を施文するものは新しい傾向にあり、新段階に比定されよう。

b種 (221~227) 浮線文系の土器群を一括する。何れも地文に縄文を施文し、浮線文を施文するが、221~226は地文にLRを施文した後、浮線文を貼付し、斜位の刻を施している。222と224の刻みは異方向に施される。227はRL地文を施文した後、浮線文を施文し、浮線文上にも縄文を転がしている。

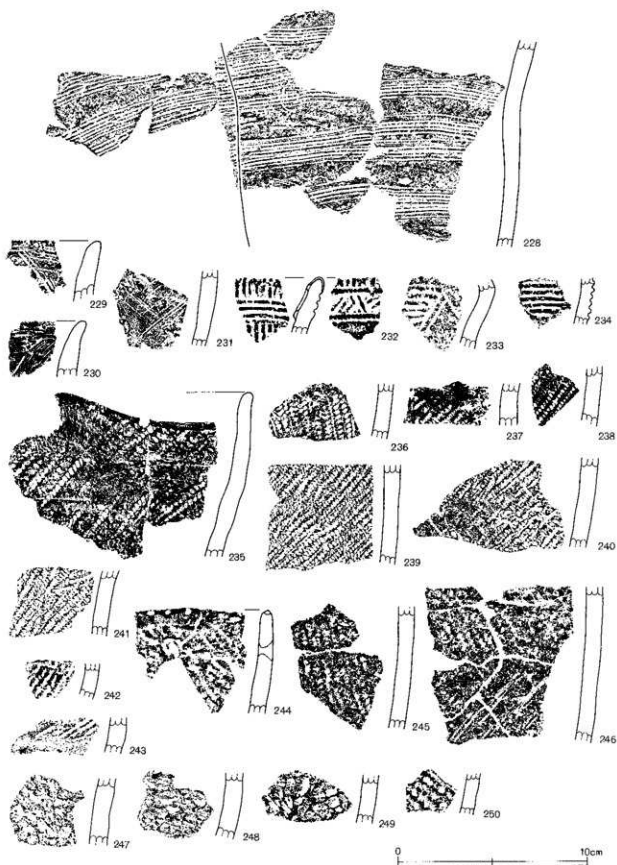
第4種 (143、229~231)

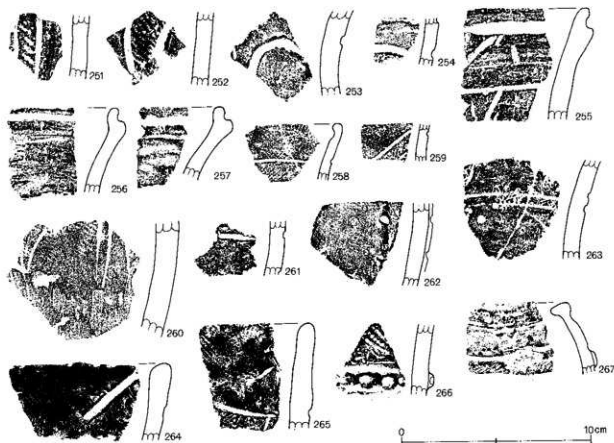
条線文を施文するものを一括する。明瞭な型式学的表象を持たないため帰属時期が不明であるが、諸磯c式段階に比定されるものと思われるものである。何れも条線文を斜格子目状に施文するもので、229、230は口縁部破片である。口縁部を区画した後に、斜格子目状に条線文を施文する。

第5種 (118、232~234)

前期終末の十三菩提式を一括する。232は半截竹管

第29図 出土土器 (8)





状の深い平行沈線文と、ソーメン状の貼付文で施文されるものである。口縁部が大きく開き、丸頭状の口唇部をソーメン状の貼付文がくるむ。口縁部裏面は結節状の貼付文を2条巡らして区画した内部に、左下がりの沈線文を施し、その上に右下がりのソーメン状貼付文を施文している。非常に手の込んだ破片であるが、他の破片は232と同様に、半截竹管状工具による深い平行沈線文が施文されている。平行沈線文間は竹管の内面状に丸くなるのが特徴的である。

第6種 (235~249)

縄文のみ施文される土器群を一括する。235は波状口縁を呈し、やや内彎する口縁部が開く器形を呈し、単節LRが緩く回転施文される。条間が開くため、付加条縄文の可能性もあるが、不明瞭である。236は付加条縄文で、RLにLを第1種巻きしたものである。両者とも諸磯a式に伴うものと思われる。237~243は強く撚った単節LRが施文されるもので、諸磯a~b式

に特徴的な縄文である。

244~246は同一個体であり、緩く開く口唇部の内外端に整形を施して口唇部がやや尖る。口唇部上には刻みが施されている。口縁部から胴上半部には単節RLの斜縄文が施され、下半部に粗い条痕の擦痕が施されている。胎土は砂粒を多く含み、白色粒子が目立つ。前期終末の所産の可能性が高い。

247~249は大粒の粗い縄文が施されており、原体は不明瞭であるが、LRの可能性が高い。繊維にあまり撚りをかけずに、撚り込んでいるため、繊維質のみが明瞭である。その特徴からすると、諸磯式に伴うことも考えられる。また、その節の大きさから後期の可能性もある。胎土は砂粒を多く含み、前期的である。

第VII群土器 (251~267)

中・後期の土器群を一括する。

第1類 (251)

中期の土器群である。1点のみの出土であるが、磨

消懸垂文を持つ加曾利E式で、III式に比定される。

第2類 (252～254)

後期初頭の称名寺式土器である。何れも太い丸状の沈線文で描出されており、252は縄文が充填施文される。他は沈線文のみ施文されている破片である。

第3類 (255～265)

後期前葉の堀之内式土器を一括する。いずれも堀之内II式段階と思われ、255～257は口縁部無文帯が外反するもので、口唇部に沈線文が巡る。258、259は同一個体で、磨消縄文の施される小形の深鉢形土器である。260は胴部の張る器形を呈し、垂下する沈線文区画内に

縄文を施文する。261は垂下する細い隆帯上に部分的に刻が入る。263は平行沈線文で文様帯が区画される。264、265は時期不明であるが、胎土が後期的な破片である。口縁部に沈線文がみられる。

第4類 (266)

後期中葉の加曾利B式である。1点の出土であるが、横位の隆帯上に押圧状の刻を施す。

第5類 (267)

後期後葉の安行1式土器である。内脣する器形を呈し、縦位の貼付文が剝落している。帯縄文にはLRを施文する。注口土器の可能性が高い。

第5表 縄文土器一覧

番号	グリッド	番号	グリッド	番号	グリッド	番号	グリッド	番号	グリッド	番号	グリッド
1	H区 O-0	46	F区 J-2	92	F区 K-1	137	F区 J-1	183	H区 O-1	229	E区
2	H区 P-0	47	F区 K-1	93	F区 K-2	138	H区 P-1	184	H区 O-0	230	E区 表探
3	F区 J-2	48	F区 J-2	94	F区 K-2	139	H区 P-0	185	H区 F-1	231	H区 U(-5)
4	D区	49	F区 J-2	95	F区 K-1	140	H区 P-0	186	D区	232	F区 K-1
5	F区 J-1	50	F区 J-1	96	B区 : A区 SJ-1.2	141	F区 J-1	187	H区 O-0	233	D区 K-3
6	F区 J-1	51	F区 J-1	97	H区 P-0	142	D区	188	H区 O-1	234	D区
7	F区 J-1	52	F区 J-2	98	F区 J-1	143	E区 SD2	189	H区 O-0	235	D2区 K-3
8	F区 J-1	53	F区 K-1	99	F区 J-2 : K-2	144	SD区 J-1	190	H区 P-1	236	D2区
9	F区 J-1	54	F区 K-2	100	F区 K-2	145	F区 J-1	191	不明	237	F区 SD-3
10	F区 J-1	55	F区 J-2	101	F区 K-2	146	F区 J-1	192	H区 V(-7)	238	A区
11	F区 J-1	56	F区 K-2	102	I区 1-5	147	F区 J-1	193	F区 K-1	239	A区
12	F区 J-1	57	F区 表探	103	J区	148	F区 J-1	194	F区 K-1	240	F区 SD-3
13	F区 J-1	58	F区 K-2	104	J区 一括 : H-9	149	F区 J-1	195	F区 J-1	241	A区
14	F区 J-1	59	F区 K-2	105	F区 J-1	150	F区 J-1	196	F区 K-1	242	H区 P-1
15	F区 J-1	60	F区 K-2	106	F区 J-1	151	F区 J-1	197	F区 K-1	243	H区 V(-3)
16	F区 J-1	61	F区 J-2	107	F区 J-1	152	F区 J-1	198	F区 K-1	244	F区 J-1
17	F区	62	F区 K-1	108	F区 K-1	153	F区 J-1	199	F区 K-1	245	F区 J-1
18	F区 J-1	63	F区 J-2	109	F区 J-1	154	F区 J-1	200	F区 K-1	246	I区 : A区:F区
19	F区 J-1	64	F区 K-1	110	F区 J-1	155	F区 J-1	201	F区 K-1	247	D2区 表土
20	F区 J-1	65	F区 J-1	111	F区 J-1	156	F区 J-1	202	F区 K-1	248	D2区 表土
21	F区 J-1	66	F区 J-2	112	D2区 L-3	157	H区 P-0	203	F区 K-1	249	D2区 表土
22	F区 J-1	67	F区 K-2	113	F区 J-1	158	H区 O-1	204	F区 K-1	250	D区
23	F区 J-1	68	F区 K-2	114	A区	159	H区 O-1	205	F区 K-1	251	A区
24	F区 J-1	69	F区 J-2	115	F区 外 : 表探	160	H区	206	F区 K-1	252	J区
25	F区 J-1	70	F区 J-2	116	F区 J-1	161	H区 O-1	207	H区 P-1	253	A区
26	F区 J-1	71	F区 K-2	117	F区 J-1	162	F区 J-2	208	F区 K-1	254	F区 J-1
27	F区 J-1	72	F区 K-1	118	D区 N-3	163	H区	209	F区 K-1	255	I区 SD-1
28	F区 J-1	73	F区 J-2	119	F区 K-1	164	F区 J-1	210	F区 K-1	256	D区
29	F区 J-1	74	F区 J-2	120	F区 J-1	165	表探	211	F区 K-1	257	D区
30	D区 L-6	75	F区 K-1	121	I区 G-6 SD2	166	H区 R(-1)	212	F区 K-1	258	D区 N-3
31	F区 J-1	76	F区 K-1	122	F区 K-2	167	F区 J-1	213	F区 K-1	259	D区 N-3
32	F区 J-1	77	F区 K-1	123	F区 J-1	168	F区 J-1	214	H区 P-1	260	I区 1-6 : SD-2
33	F区 J-1	78	F区 K-1	124	F区 K-2	169	F区 J-1	215	F区 K-1	261	F区 SD-3
34	F区 J-1	79	F区 J-2	125	H区 SD-2 : I区	170	E区 表探	216	H区 P-1	262	I区
35	F区 K-1	80	F区 K-1	126	F区 J-1	171	H区 P-0	217	H区 U(-6)	263	A区
36	D2区 K-4	81	F区 K-2	127	F区 J-2	172	F区 J-1	218	D区 PFe	264	J区
37	H区 P-1	82	F区 K-2	128	D2区 横乱	173	F区 J-2	219	F区 K-1	265	F区 SD-3
38	H区	83	F区 J-2	129	F区 J-1	174	H区 Q-0	220	F区 外 : 表探	266	F区 外 : 表探
39	H区 SD-1	84	F区 K-2	130	H区 P-0	175	表探	221	H区 P-1	267	H区 O-1
40	H区 V(-7)	85	F区 K-2	131	F区 SD-3	176	F区 J-1	222	H区 P-1		
41	H区 W(-7)	86	F区 J-2	132	A区	177	F区 J-1	223	H区 P-1		
42	H区 V(-7)	87	F区 K-2	133	H区 O-1	178	F区 J-1	224	H区 P-1		
43	H区 V(-6) SD-2	88	F区 J-2	134	D区	179	H区 O-1	225	H区 P-1		
44	H区 V(-4)	89	F区	135	F区 J-1	180	H区 P-0	226	H区 P-0		
45	F区 J-1	90	F区 K-2	136	F区 J-1	181	H区	227	H区		
		91	F区 K-1			182	D区	228	H区 U(-4)		

石器 (第31~35図)

尖頭器 (第31図1~3)

尖頭器は3点ともV-(4・3)グリッドから検出されている。形状・石材等が近似していることから、同一時期の可能性が高い。

1は上半部及び基端部を欠損する。外形は最大幅が基部中程に位置する大形の木葉形尖頭器である。調整加工は風化が進んでいるため、細部の観察は不可能であるが、横断面は薄手のレンズ状で、裏面側が平坦に作られている。

2は側縁の一部に発掘の際の欠損がみられるが、ほぼ完形である。外形は基部中程に最大幅が位置する中形の木葉形尖頭器である。素材は裏面中央部に残っている、素材剥片の主要剥離面によって、横長剥片を用いていたことが窺える。調整加工は正面が両側縁からの面的剥離で、中央部に稜線を作るが、あまりしつかり

りしたラインではない。裏面は両側面からの剥離がそれほど深くまで入らず、中央に残る第一次剥離面を活かすように平坦に仕上げている。そのため横断面形状は1と同じ様に凸レンズ状になっている。

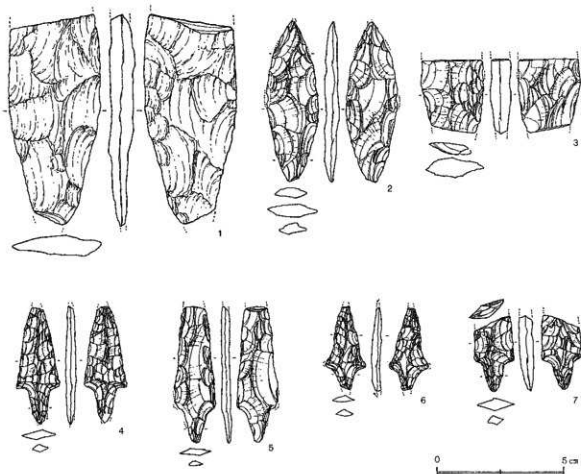
3は上半部及び下半部を欠損するため全体の外形は不明であるが、1・2からみると中形木葉形の尖頭器になると思われる。調整加工は両面とも入念で、素材の面は残していない。横断面は1・2と比べ厚手で菱形となる。

有茎尖頭器 (第31図4~7)

有茎尖頭器はP・Q・T-(1・0・1)グリッドから出土し、尖頭器と比べると広い範囲からみつがっている。隆起線文系土器が近接グリッドから出土しており同一時期の可能性が高い。

4は先端部及び基端部を若干欠損する。形態は鎌身

第31図 出土石器 (1)



部の両側縁が僅かに外湾しており、基部は平基である。調整加工は両面とも入念に施され、表裏の中央に稜線が通り、横断面形は菱形になっている。

5は先端を欠損する。外形は1とはほぼ近似するが、調整加工はかなり粗雑である。

6は先端及び基端部を僅かに欠損する。鉄身部と基部は接触部付近で共に内湾、逆刺部が両側に向かって尖る様に仕上げ、外形は菱形となる。調整加工は細かく入念に施され、正面の稜線は鉄身部中央に通っており、基部は左側に偏っている。裏面は正面ほど明確な稜線はみられず、どちらかと言えば平坦に仕上げている。横断面形は裏面が平坦で薄手凸レンズ状となっている。

7は上半部を大きく欠損する。現況から1に近い形態と思われる。調整加工は両面とも入念に横断面形は菱形となる。

石鏃 (第32・33図8～61)

石鏃の出土点数は多く、図示したものは、53点である。分布はH区が中心で、全体の8割を占めている。縄文土器は複数時期がみられ、石鏃の所属時期を限定するのは難しい。

石鏃は平面形状によって、平基無茎のもの(8～24)をa類、凹基無茎のもの(25～44)をb類、小形のものとして(45～56)をc類、有茎のもの(57～61)をd類と大別し説明を行う。

a類 (第32図8～24)

8・9・10は同じグリッドからの出土で、外形は正三角形に近く、調整加工は入念に施されている。非常に厚手に仕上げられている点で、他の石鏃と区別できる。

10・12～17は外形は幅広く正三角形に近い。調整加工は比較的丁寧で、12の裏面に第一次剝離面を残す以外は、全面に調整剝離が施されている。横断面をみると、上記の石鏃と比べ薄手に仕上げられている。

18・19は外形は鉄身部が長く、二等辺三角形状である。2点とも調整加工は丁寧で、横断面形は薄手で、菱形状になっている。

20は上半部を欠損するため、形状は不明である。

21～24は平面形状が左右非対称となるものを一括した。上記石鏃と比較して小形である。22は素材剥片の一部に裏面から、細かい剝離を施し先端部を作り出し、基部は折断するように直線に仕上げている。23は左側縁から先端部に、裏面からの細かい剝離が施され、形状を整えている。縦断面をみると先端部から基部に向けて厚手になっている。

b類 (第32図25～44)

ここで一括した石鏃は、外形にバラエティーに富んでいる。

25～29は基部の挟りが比較的浅いものを一括した。外形は二等辺三角形となる。26と28は裏面の中央部に素材剥片の主要剝離面を残し調整加工は周縁的で、平坦に仕上げられており、横断面形は薄手の凸レンズ状になっている。

30～39は基部の挟りがしっかりしているものを一括した。30・31・34は外形が正三角形に近く、調整加工は丁寧で、34の裏面中央に第一次剝離面の残す他は、調整加工が全面に施されている。

33・35・36・38・39は外形が二等辺三角形となる。36・38・39は上記石鏃より一回り小形である。調整加工は全体に丁寧である。

40・41は基部の挟りが深く鉄身部の半分近くが脚部となっている。調整加工は丁寧で、特に脚部を意識した加工が施されている。

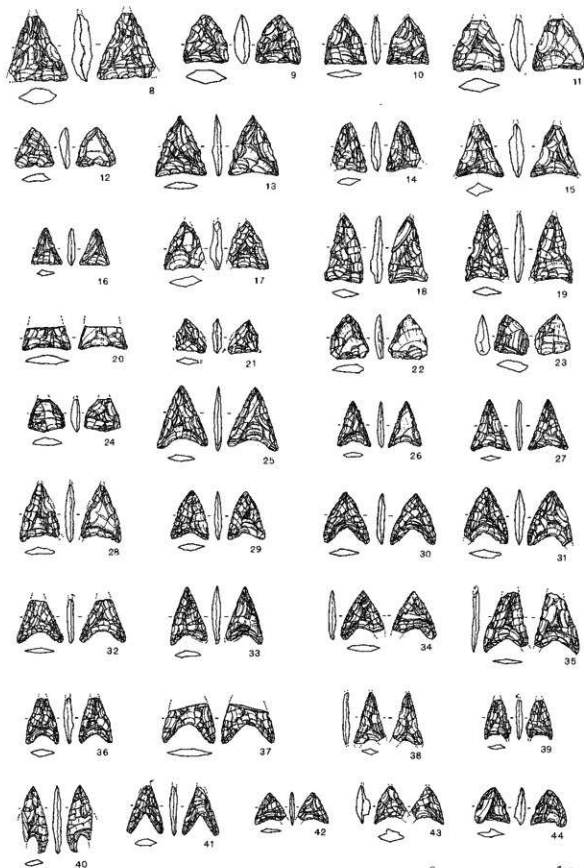
42～44は小形のものを一括した。基部の挟りは浅く、長さや幅の値がほぼ等しい、正三角形状を呈している。43は正面中央の瘤状の膨らみを取ることができないままにしている。42の調整加工は丁寧であるが、43・44の加工は粗雑である。

c類 (第33図45～56)

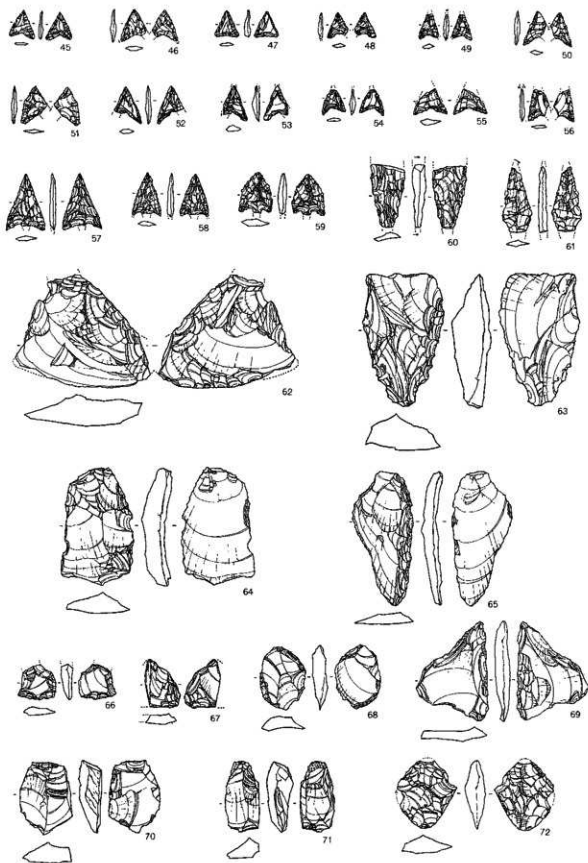
1～1.5cm以下と非常に小形のものを一括した。基部の形状は平基無茎と凹基無茎のものがみられる。

47は外形が正三角形で、基部は平基に整えており、両面の中央部に第一次剝離面を残し、周縁に調整加工を丁寧に施している。

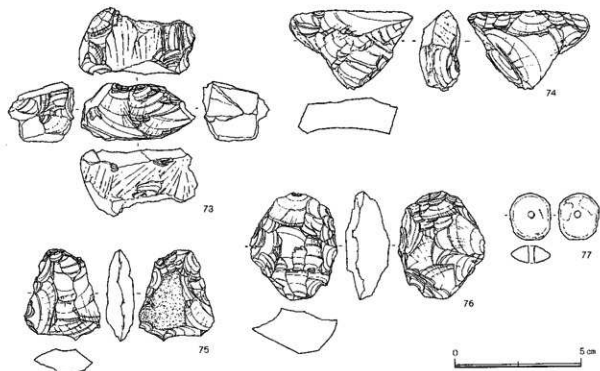
第32図 出土石器(2)



第33图 出土石器(3)



第34図 出土石器(4)



45・46・48・49は基部の挟りの浅いもので、45・46・48の外形は正三角形に近い。45・46は裏面中央に素材の第一次剥離面を残し、周縁加工を施している。48・49は両面に両側縁からの剥離加工で横断面が菱形になっている。

50～56は基部の挟りが比較的深くまで入っている。脚部を欠損するものが多いが、外形は長さとの数値に近い正三角形を呈するものが多い。調整加工は周縁的に脚部を意識しての加工が施されている。

d類 (第33図57～61)

有茎の石鏃を一括したが、点数のわりに外形はバラエティーに富んでいる。調整加工は全体に丁寧で、横断面形状が菱形になるものが多い。

57は鏃身部が正三角形に近く先端が尖鋭となっている。基部は欠損しているが、基部が僅かに内湾し逆刺部が尖っており、小形の基部が着くものと思われる。

58は鏃身部が二等辺三角形形状となる。基部は57と同じく逆刺部が下に向かい尖っている。基部は欠損している。

59は鏃身部中程で屈曲し五角形となっている。基部

は凹基有茎で逆刺はしっかりしている。基部は先端を欠損している。

60は基部の一部と思われる。

61先端及び基部を欠損する。57～59とは異なり外形は基部が大きく菱形になる。

削器 (第33図62～69・72)

62はつまみ部を欠損する石匙と考えられる。横広剥片を素材とし、打面付近の厚い部分を整えるように両面からの剥離加工が施され、つまみ部を作り出している。刃部は素材の縁辺をあまりいじらず正面から裏面に向かって一部加工が施されている。

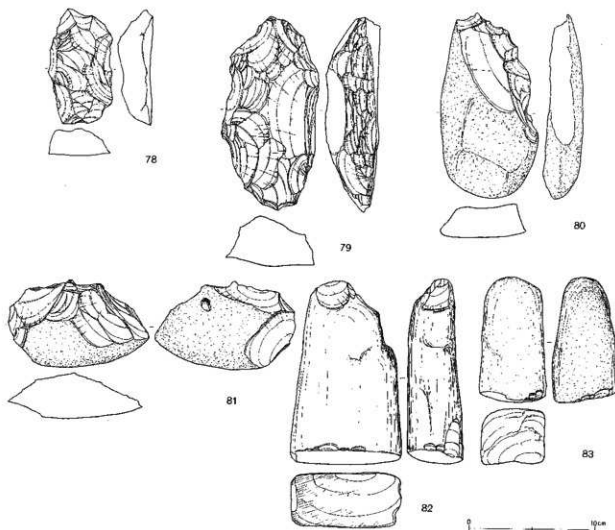
63は横長剥片を素材とし、素材側縁に刃部加工を施している。

64は縦長剥片を素材とし、右側縁に粗い刃部加工を施している。

65は打面を残す縦長剥片を素材に用いて、右側縁に裏面から正面方向の丁寧な刃部加工が施されている。

66は上部で括れ、石匙になる可能性もあるが、丁度その部分で欠損している。横長剥片を素材とし、底辺

第35図 出土石器 (5)



に両面からの刃部加工が施されている。

67は左半分を欠損する。右側縁に粗い刃部加工が施されている。

68は横広剥片を素材に用いて、左側縁下部に刃部加工が施されている。

69は横長の不定形の剥片で、右側縁に粗い刃部加工が施されている。

72は、他の削器がチャートを用いているのに対し、黒曜石製である。外形は両端が僅かに尖り菱形に近い楕円形である。調整加工は両面とも、全面に施され、他の削器とかなり異なっている。

楔形石器 (第33図70・71)

70は縦長剥片を長軸に用いており、打面は除去され

ている。

71は縦長剥片を長軸に用いており、打面側の原石面が潰れている。

石核 (第34図73~76)

73は節理の多いチャートを、節理面で分割し楔子状にしている。作業面は正面に固定しており、打面は節理の平坦面を利用している。

74は厚手の剥片を素材とし、正面の上部の剥離面を打面に鱗状の小形剥片を連続して剥離している。

75は裏面に原石面を残し、正面の長軸にあわせて縦長剥片を剥離している。

76は裏面が求心的剥離によってレンズ状に作られ、正面は両端から縦長の剥片を取ろうとする意図が窺え

第6表 石器一覧表

番号	出土地点	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
第31図-1	H区V-(4)	尖頭器	8.30	3.70	1.00	35.63	ホルンフェルス	
	2 H区V-(3)	尖頭器	6.30	2.10	0.60	7.85	安山岩	
	3 H区V-(4)	尖頭器	2.90	2.50	0.90	7.62	安山岩	
	4 H区T-0	有茎尖頭器	4.70	1.70	0.50	2.79	チャート	
	5 H区Q-(1)	有茎尖頭器	5.40	1.70	0.40	3.90	ホルンフェルス	
	6 H区P-0	有茎尖頭器	3.30	1.60	0.40	1.68	チャート	
	7 H区P-1	有茎尖頭器	3.00	1.60	0.60	2.55	チャート	
第32図-8	H区V-(7)	石鏃	2.60	2.30	0.70	4.00	チャート	
	9 H区V-(7)	石鏃	1.90	1.80	0.60	2.06	チャート	
	10 H区U-(7)	石鏃	1.90	1.70	0.40	1.10	チャート	
	11 H区V-(7)	石鏃	2.00	2.10	0.60	2.16	チャート	
	12 H区V-(6)	石鏃	1.60	1.60	0.40	0.88	チャート	
	13 H区SK22	石鏃	2.40	2.00	0.40	1.38	チャート	
	14 H区V-(7)	石鏃	1.90	1.40	0.40	1.76	チャート	
	15 A区	石鏃	2.10	1.90	0.60	1.45	チャート	
	16 H区V-(7)	石鏃	1.40	1.20	0.30	0.41	チャート	
	17 A区	石鏃	1.90	1.60	0.50	1.19	チャート	
	18 F区J-1	石鏃	2.70	1.60	0.50	1.34	チャート	
	19 H区V-(7)	石鏃	2.70	1.70	0.40	1.64	チャート	
	20 H区U-(6)	石鏃	1.00	2.00	0.40	0.67	チャート	
	21 H区V-(6)	石鏃	1.30	1.20	0.30	0.44	黒曜石	
	22 A区	石鏃	1.80	1.60	0.40	1.01	チャート	
	23 H区V-(7)	石鏃	1.60	1.40	0.60	1.03	チャート	
	24 H区V-(7)	石鏃	1.30	1.40	0.35	0.65	安山岩	
	25 E区	石鏃	2.50	2.00	0.30	1.13	安山岩	
	26 H区X-(6)	石鏃	1.80	1.30	0.30	0.42	チャート	
	27 H区V-(6)	石鏃	2.00	1.60	0.20	0.59	チャート	
	28 H区V-(3)	石鏃	2.30	1.60	0.40	1.12	チャート	
	29 F区J-1	石鏃	1.90	1.50	0.30	0.72	チャート	
	30 H区O-0	石鏃	2.00	1.80	0.30	0.73	黒曜石	
	31 D区	石鏃	2.20	1.70	0.40	0.91	頁岩	
	32 H区U-(2)	石鏃	1.70	1.80	0.20	0.72	チャート	
	33 H区V-(7)	石鏃	2.30	1.50	0.40	0.84	黒曜石	
	34 I区H-6	石鏃	1.90	1.75	0.20	0.58	黒曜石	
	35 D区N-3	石鏃	2.40	1.70	0.30	1.03	頁岩	
	36 H区Q-0	石鏃	1.80	1.30	0.40	0.64	黒曜石	
	37 H区	石鏃	1.60	2.10	0.30	0.75	チャート	
	38 H区U-(6)	石鏃	2.10	1.30	0.30	0.51	チャート	
	39 H区V-(3)	石鏃	1.60	1.00	0.30	0.39	チャート	
	40 G区	石鏃	2.70	1.00	0.30	0.75	チャート	
	41 H区V-(7)	石鏃	1.90	1.40	0.30	0.49	黒曜石	
	42 A区	石鏃	1.20	1.20	0.20	0.23	チャート	
	43 H区W-(7)	石鏃	1.50	1.30	0.50	0.63	チャート	
第33図-44	44 H区W-(6)	石鏃	1.40	1.40	0.40	0.60	チャート	
	45 H区V-(4)	石鏃	1.10	1.00	0.20	0.15	チャート	
	46 A区V-7	石鏃	1.30	1.00	0.20	0.23	チャート	
	47 H区W-(6)	石鏃	1.00	1.00	0.20	0.17	チャート	
	48 H区V-(7)	石鏃	1.00	0.90	0.20	0.10	チャート	
	49 H区V-(6)	石鏃	1.00	0.80	0.20	0.12	チャート	
	50 H区V-(6)	石鏃	1.40	0.90	0.20	0.16	チャート	
	51 H区V-(6)	石鏃	1.50	1.10	0.20	0.25	チャート	
	52 H区V-(6)	石鏃	1.50	1.10	0.20	0.21	チャート	
	53 H区	石鏃	1.40	1.00	0.30	0.26	チャート	

番号	出土地点	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
54	H区V-(7)	石鏃	1.00	1.00	0.20	0.16	チャート	
55	H区V-(6)	石鏃	1.00	1.30	0.30	0.25	チャート	
56	H区W-(6)	石鏃	1.30	0.80	0.20	0.17	頁岩	
57	F区J-1	石鏃	2.20	1.60	0.30	0.71	チャート	
58	H区SK22	石鏃	1.70	1.20	0.30	0.39	黒曜石	
59	H区V-(7)	石鏃	1.60	1.30	0.30	0.57	黒曜石	
60	E区	石鏃	2.50	1.40	0.60	1.71	チャート	
61	表探	石鏃	2.60	1.20	0.30	0.91	チャート	
62	H区O-0	削器	4.50	5.40	1.20	26.42	チャート	
63	H区	削器	5.30	3.30	1.50	20.99	チャート	
64	A区	削器	4.60	2.90	1.20	5.13	チャート	
65	H区V-(7)	削器	5.30	2.50	0.80	6.75	チャート	
66	H区W-(6)	削器	1.40	1.50	0.50	0.96	チャート	
67	H区V-(6)	削器	1.90	1.40	0.45	1.06	チャート	
68	A区	削器	2.50	1.80	0.60	2.26	チャート	
69	D区	削器	3.90	2.85	0.60	5.44	チャート	
70	H区U-(7)	楔形石器	2.90	2.05	0.90	5.13	チャート	
71	H区	楔形石器	2.75	1.35	0.80	3.67	チャート	
72	H区	削器	2.70	2.40	0.90	3.56	黒曜石	
第34図-73	H区V-(6)	石核	2.25	4.60	2.60	30.78	チャート	
74	H区V-(6)	石核	3.15	4.85	1.65	18.60	チャート	
75	H区V-(5)	石核	3.60	3.00	1.10	11.38	チャート	
76	H区V-(6)	石核	4.30	3.50	1.75	24.13	チャート	
77	E区	有孔土製品	1.90	1.65	0.70	1.70	土製器	
第35図-78	D区	石斧	9.10	5.10	2.80	144.81	ホルンフェルス	
79	F区SD01	石斧	15.30	7.70	4.30	598.24	ホルンフェルス	
80	D区	礫器	14.70	7.80	3.10	438.59	ホルンフェルス	
81	F区K-1	礫器	6.90	11.20	3.50	297.32	ホルンフェルス	
82	F区	スタンプ形石器	14.60	8.90	4.60	876.47	砂岩	
83	F区J-1	スタンプ形石器	9.90	5.30	5.10	423.90	砂岩	

る。

よって刃縁を整えている。

有孔土製品 (第34図77)

77は算盤玉状の土製品で時期は不明である。

石斧 (第35図78・79)

78は裏面に原石面を残す片面加工の石斧で、平面の形状は長方形である。調整は両側縁から急角度の剥離が施され、横断面形状は台形状になっている。刃部の加工は粗雑である。

79は裏面に原石面を残す片面加工の石斧で、平面形状は両端が僅かに尖る長楕円形となっている。加工は正面中央部に素材獲得の為の分割と思われる平坦剥離がみられ、両側縁からの急角度で剥離加工が入念に施され、横断面形状は台形状になる。刃部は細かい剥離に

礫器 (第35図80・81)

80は楕円形の扁平礫を素材とし、右側縁に片面から鋸歯状の刃部を作っている。

81は楕円形の扁平礫を素材とし、長軸に片面から刃部を作っている、いわゆるチョッパー状の礫器である。

スタンプ形石器 (第35図82・83)

82は厚手の扁平礫を素材とし、基部には底面からの種状の剥離がみられる。底面に擦痕が観察できる。

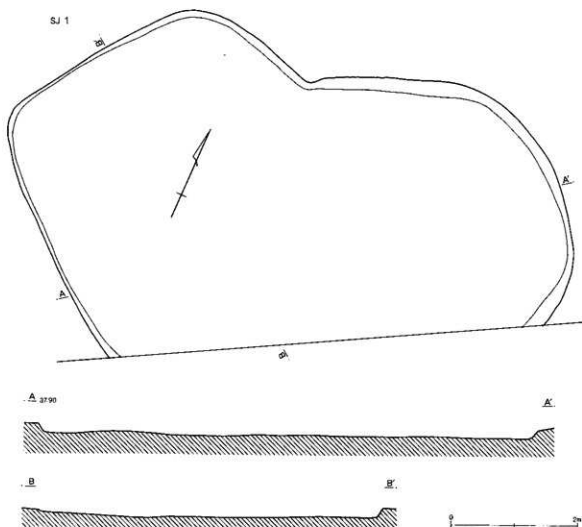
83は角柱状の棒状礫を素材としている。基部に加工は一切施されず、底面からの剥離面が僅かにみられるだけである。

4. 弥生時代の遺構と遺物

第1号住居跡（第36図）

A区のT-(-8)グリッドに位置する。遺構の遺存状況は、耕作によって極めて悪いため、層堆積状態の観察は不可能であった。また、東南部分に攪乱があるため、全体の形状は不明である。

平面プランから、住居または土塋等との切り合いの
第36図 第1号住居跡



第37図 出土土器



出土土器（第37図1）

1は弥生土器である。壺形土器頸部の破片だろう。頸部くびれ部分に櫛描横走文をもつ。外面はヨコハケの後タテミガキ、内面はヨコハケ後まばらなナナメミガキによって仕上げている。櫛描文は、器面の調整後に施文されている。後期に属すると思われるが、中期末に遡る可能性もあるだろう。

5. その他の時代の遺構と遺物

近世以降と思われる遺構は、土塋55基、竪穴状遺構3基、井戸2基、溝3条が検出された。

遺構の分布は、土塋がH区とE区に多く分布し、縄文時代の炉穴の分布とは若干異なっている。竪穴状遺構はE区にまとまり、井戸はH区から検出されている。

土塋 (第38～41図)

平面プランは、ほとんどのものが楕円形をしているが、長幅比と大きさから、幾つかに分けられる。

第49・53・55号土塋 比較的人形の土塋で、長軸は2mを上回る。平面プランは53号が円形に近く、49・55号は長楕円形である。断面形は53・55号の底面がU字状、49号が平坦である。

第1～3・6・9・13・39・44・45・47・50・62・63 小形で平面プランは円形に近い。規模は長径1m未満である。掘り込みは浅く、底面は平坦なものと、U字状をしているものがある。

第59・60・26号土塋 平面プランは長楕円形をしている。掘り込みは浅いがU字状に近く、底面は比較的平坦である。

第5・7・8・16・18・36号土塋 平面プランは正方形に近い。掘り込みは浅く、36号の底面は不安定であるが、それ以外はほぼ平坦である。

第24号土塋 平面プランは、ほぼ円形で掘り込みは深い。

竪穴状遺構 (第42図)

調査時の呼称は土塋で統一しているが、遺構の規模、平面プランから竪穴状遺構として分けて説明する。

第57号土塋 BC-12グリッドに位置する。平面プラン

は正方形に近く、東側コーナーに第56号土塋と切り合っている。掘り込みは浅く、底面は平坦である。主軸はN-30°-Eを指している。

第51号土塋 BD-10グリッドに位置する。平面プランは各コーナーが丸く円形に近い。掘り込みは若干深く、底面は平坦である。主軸はN-32°-Eを指している。

第54号土塋 BD-10グリッドに位置する。平面プランは北側が長く、南側が短い台形状をしている。南側と東側がピットに切られている。底面は若干の凸凹がみられるが、ほぼ平坦である。主軸はN-41°-Eを指している。

井戸 (第41図)

第1号井戸 U-(6)グリッドに位置する。平面プランは長方形に近い。

第2号井戸 W-(6)グリッド、第1号溝の屈曲部分に位置する。平面プランは長方形状である。

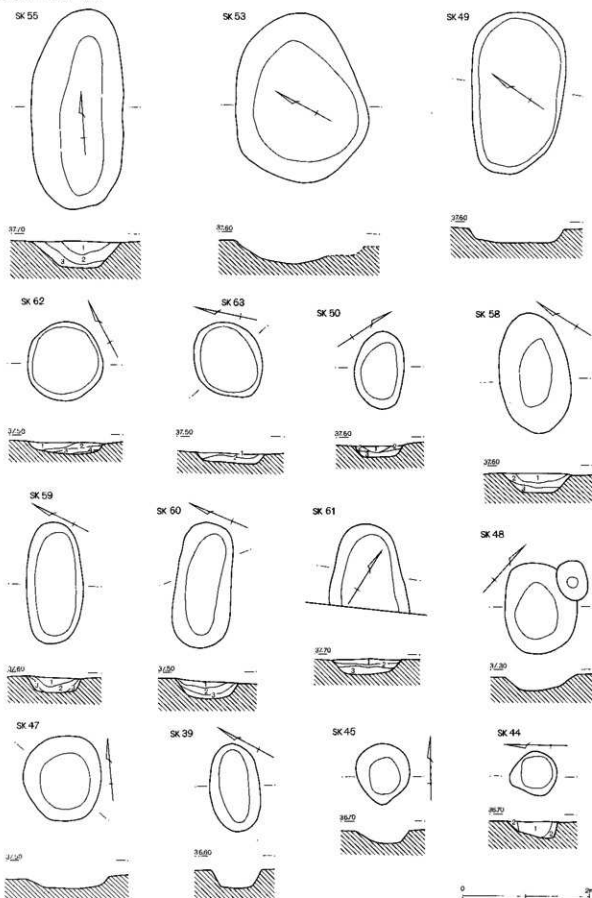
溝 (第6・7図)

第1号溝 H区を斜めに横断するように南北に通っている。溝は2本が離れたり合流したりして、弧を描きながら小さくクランクしている。

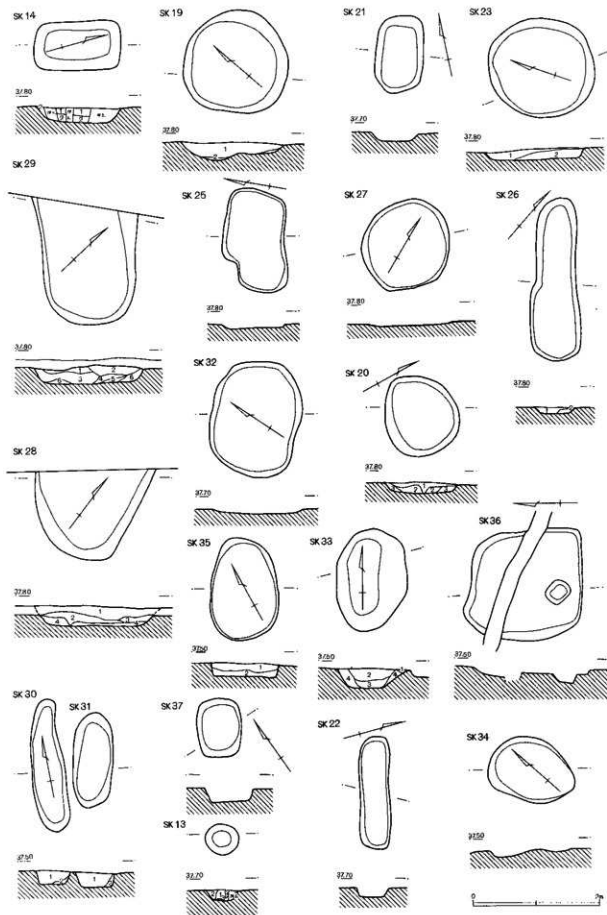
第2号溝 E・J・I・D区の北側調査区ラインに沿ってクランクしながら通っている。東側で3本が複雑に絡むが、BC-11グリッドで合流し1本又は2本が小さくクランクを描く、第1号溝の関連は不明である。

第3号溝 F区に第2号溝と斜に、南北方向に入っている。

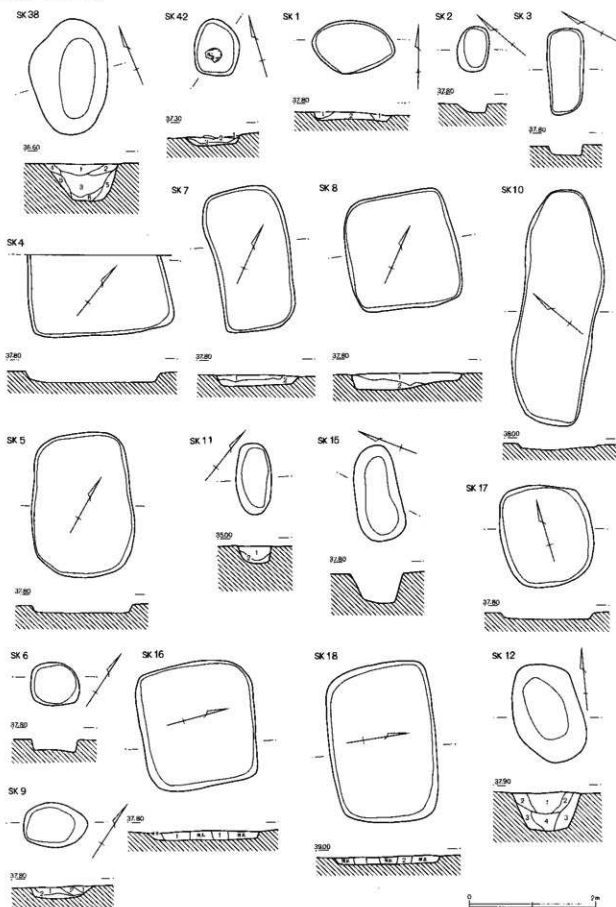
第38図 土坑 (1)



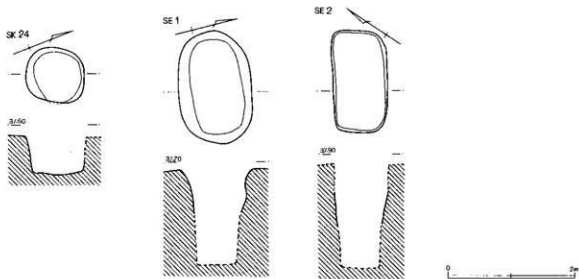
第39図 土坑 (2)



第40図 土坑 (3)



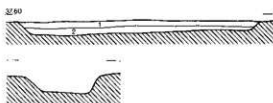
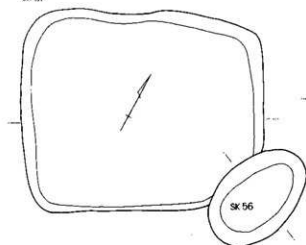
第41図 土壤(4)



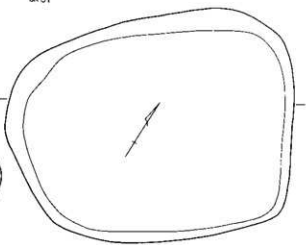
- [illegible]

第42図 竪穴状遺構

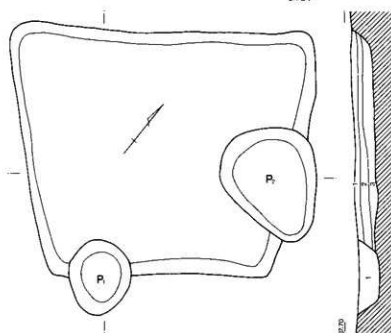
SK 57



SK 51



SK 54



SK 51
1 堀跡の上 砂→土層の境界線が示す。
2 堀 色 土 砂→土層の境界線が示す。
3 堀 色 土 砂→土層の境界線が示す。
4 堀 色 土 砂→土層の境界線が示す。土層の上の境界線が示す。
5 堀跡の上 砂→土層の境界線が示す。

SK 54
1 堀跡の上 砂→土層の境界線が示す。
2 堀跡の上 砂→土層の境界線が示す。
3 堀跡の上 砂→土層の境界線が示す。

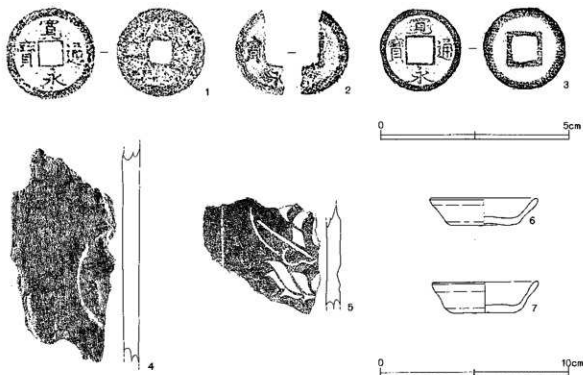
SK 57
1 堀跡の上 砂→土層の境界線が示す。
2 堀 色 土 砂→土層の境界線が示す。

0 2m

第7表 土壌一覧

土壌番号	グリッド	平面形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	主軸方位	備考
1	X-(9)	円形	1.3	0.8	0.1	N-9°-E	
2	Y-(8)	円形	0.7	0.5	0.1	N-72°-E	
3	X-(8)	方形	1.3	0.5	0.1	N-63°-E	
4	X-(8)	方形	2.3	—	0.1	N-55°-E	
5	Y-(8)	方形	2.2	1.6	0.2	N-32°-W	
6	Y-(8)	円形	0.8	0.7	0.2	N-55°-E	
7	X-(8)	方形	2.3	1.2	0.2	N-32°-W	
8	X-(8)	方形	1.8	1.7	0.3	N-28°-W	
9	X-(8)	円形	1.0	0.7	0.2	N-52°-E	
10	Y-(7)	長楕円形	3.7	1.2	0.1	N-52°-E	
11	X-(7)	円形	1.1	0.6	0.3	N-43°-W	
12	V-(7)	円形	1.6	1.1	0.6	N-18°-W	
13	V-(7)	円形	0.5	0.5	0.2	—	
14	V-(6)	方形	1.4	0.8	0.2	N-16°-E	
15	V-(5)	楕円形	1.5	0.7	0.5	N-62°-E	
16	V-(5)	方形	2.0	1.8	0.1	N-79°-W	
17	V-(5)	方形	1.6	1.5	0.1	N-14°-E	
18	V-(5)	方形	2.5	1.7	0.1	N-85°-W	
19	U-(3)	円形	1.7	1.6	0.3	—	
20	U-(2)	円形	1.3	1.2	0.2	N-85°-E	
21	V-(2)	方形	1.2	0.8	0.1	N-15°-E	
22	U-2	長方形	1.8	0.5	0.2	N-76°-W	
23	T-(3)	円形	1.6	1.6	0.2	—	
24	S-(3)	円形	1.0	0.9	0.6	—	かわらけ2点
25	T-(2)	方形	1.6	1.0	0.1	N-80°-E	
26	S-(3)	長楕円形	2.5	0.6	0.1	N-40°-W	
27	R-(3)	円形	1.4	1.4	0.1	—	
28	R-(3)	不明	—	1.8	0.3	—	
29	R-(3)	不明	—	1.6	0.4	—	
30	S-(1)	長楕円形	2.1	0.5	0.2	N-5°-E	
31	S-(1)	楕円形	1.5	0.6	0.2	N-21°-E	
32	R-(2)	方形	1.8	1.4	0.1	N-65°-E	
33	S-(1)	楕円形	1.6	1.1	0.3	N-6°-E	
34	Q-(1)	不整円形	1.4	1.0	0.1	N-18°-W	
35	Q-0	楕円形	1.6	1.0	0.2	N-31°-E	
36	Q-(1)	方形	1.8	1.7	0.4	N-5°-E	浅いビット1本
37	Q-0	方形	0.9	0.7	0.2	N-30°-E	
38	L-4	楕円形	1.8	1.2	0.6	N-26°-E	
39	L-4	楕円形	1.4	0.8	0.2	N-59°-E	
42	L-3	方形	0.9	0.7	0.1	N-14°-E	
44	J-5	円形	0.8	0.7	0.3	—	
45	J-5	円形	0.9	0.8	0.2	—	
47	K-7	円形	1.3	1.3	0.2	—	
48	J-8	円形	1.4	1.1	0.4	—	
49	D-9	楕円形	1.2	0.8	0.2	N-49°-W	
50	D-9	楕円形	1.2	1.8	1.2	N-50°-W	
51	D-10	方形	4.5	3.5	0.2	N-32°-E	堅穴状遺構
53	C-10	円形	2.7	2.1	0.2	—	
54	D-10	方形	4.5	3.8	0.3	N-41°-E	堅穴状遺構
55	C-10	楕円形	3.1	1.4	0.4	N-9°-E	
56	C-12	楕円形	1.8	1.2	0.3	N-27°-E	
57	C-12	方形	3.8	3.1	0.2	N-30°-E	堅穴状遺構
58	C-12	楕円形	1.9	1.1	0.3	N-54°-E	
59	B-12	楕円形	1.9	0.8	0.2	N-62°-E	
60	C-12	楕円形	1.8	0.9	0.2	N-72°-E	
61	B-12	不明	—	1.2	0.2	—	
62	C-16	円形	1.2	1.2	0.2	—	
63	C-17	円形	1.3	1.0	0.1	—	
SE1	U-(2)	方形	1.8	1.2	—	N-83°-W	井戸：深さ不明
SE2	W-(6)	方形	1.6	0.9	—	N-55°-E	井戸：深さ不明

第43図 出土遺物



出土遺物（第43図）

- 1 寛永通寶 第2号溝覆土中から出土。
- 2 寛永通寶 H区出土。右側を欠損する。
- 3 寛永通寶 H区出土。
- 4 板碑 H区出土。
- 5 板碑 H区出土。
- 6 かわらけ 第24号土塋（第41図）覆土中から出土し

た。残存率は100%、口径11.5cm、底径6.2cm、器高2.9cmで、やや歪んでいる。底部は回転糸切クロ右回転で、焼成は普通、色調はにぶい黄橙色をしている。

7 かわらけ 第24号土塋（第41図）覆土中から出土。残存率は60%である。口径11.3cm、底径6.6cm、器高3.3cmで、底部は回転糸切クロ右回転で、焼成は普通、色調はにぶい横橙色をしている。

Shinyama

新山遺跡



V 新山遺跡の調査

1. 遺跡の概要

新山遺跡は一次調査によって遺構の検出されなかった中央部を除き、AとBの2区に分けて、調査を実施した。

A区(第44図) 調査範囲の北西側に土壌がまとまる。

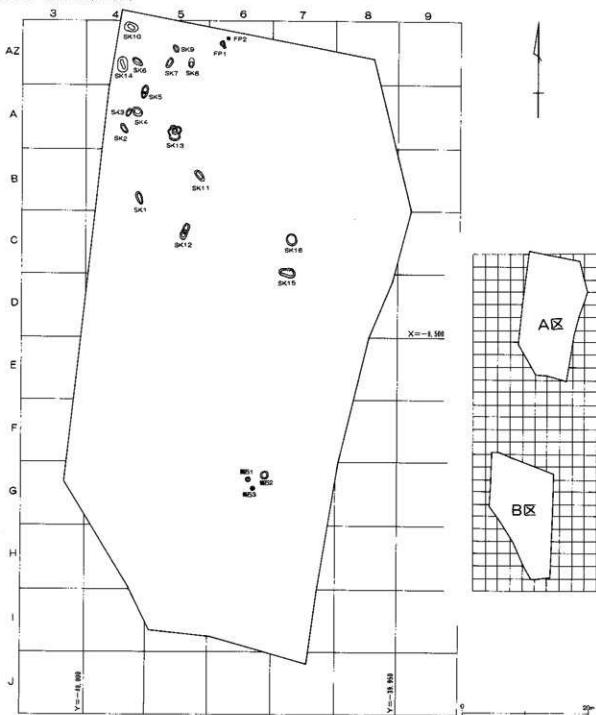
また、調査区の南側に集石土壌3基が近接して検出さ

第44図 A区 遺構全体図

れている。

先土器時代の石器集中は調査区の北東のコーナー部分から、細石器の石器集中3箇所が東西に並ぶように検出された。

縄文時代の遺構は、Tピットが2基、炉穴2基と集



石土壇3基である。遺物はほとんど検出されていない。

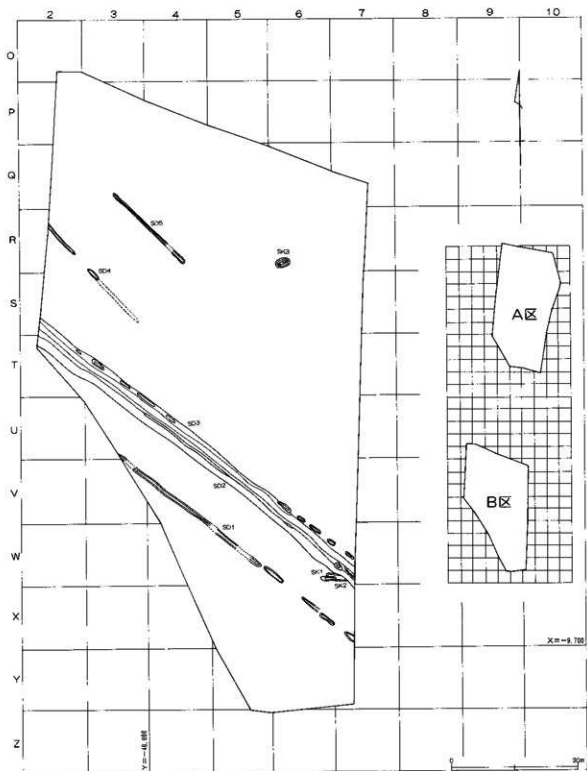
その他の時期の遺構は、土壇14基が検出されているが、共存遺物は無い。

B区（第45図） 遺構は、縄文時代の土壇1基と、道状遺構が検出された。

第45図 B区 遺構全体図

道状遺構は溝覆土中から出土した須恵器環によって、9世紀後半と考えられる。

※ 尚、地区呼称は調査時と図面整理の段階で逆転したため、年報のA・B区と逆になっている。

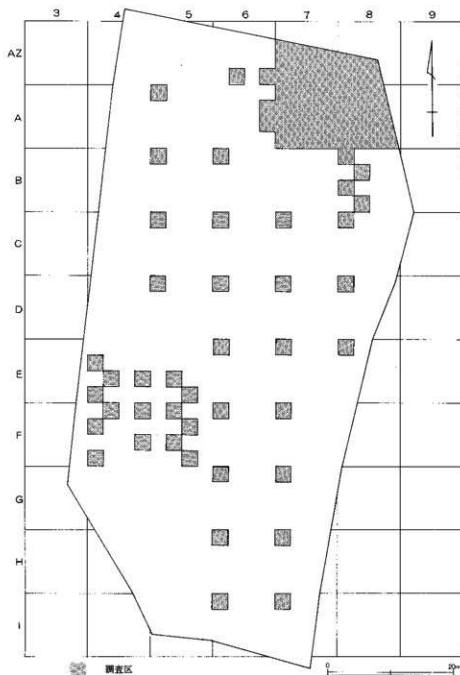


2. 先土器時代の遺構と遺物

先土器時代の調査は、A区を中心に10mグリッドの北西コーナーに2m四方の深掘区を基本とし、適時拡張を行った。その結果、調査区の北東部AZ-7・8、A-7・8グリッドから細石器の石器集中3箇所を検出した。

石器は南北10m、東西20mの範囲から検出され、東西方向に石器集中が3箇所並ぶ、柳戸遺跡と非常に類似した状況である。柳戸遺跡でも指摘したように、取って3つの集中に分ける必要性があるか迷うが、平面

第46図 先土器時代調査範囲



分布で2つの視覚的まとまりと、その中間に位置する石器がみられることから、英語の小文字によって区分した。

石器集中a (第48図)

AZ-8・A-8グリッドに位置する。石器は南北8m、東西6.3mの範囲に“8”字状となり、2つの中心に密に分布する。

石器の総数は、105点と新山遺跡の中心的な石器集中である。組成は細石核3点、細石刃38点、削器1点、

剥片11点、砕片52点と充実している。また、ナイフ形石器が集中内から出土しているが、混入と考えられる。
★印の石器は、A-8グリッドの石器である。

石器集中b (第49図)

A-7グリッドに位置する。石器の数は少なく散漫な分布で、石器集中aと石器集中bの中間地帯と言える。

石器の総数は5点と少ないが、組成は細石刃2点、打面再生剥片1点、削器1点、剥片1点と内容は充実している。

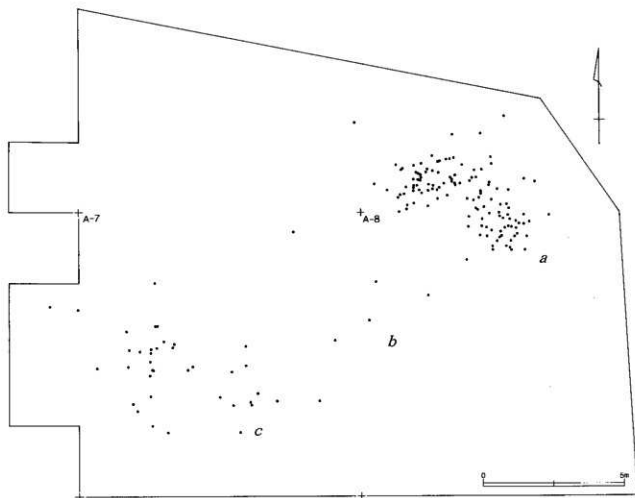
石器集中c (第50図)

A-7グリッドに位置する。遺物は南北4m、東西10.6mの範囲に散漫に分布するが、細石核3点が近接して検

出されている点は注目される。石器の総数は39点で、組成は細石核3点、細石刃13点、打面再生剥片1点、

剥片8点、砕片14点である。細石刃・砕片の占める割合が、石器集中aと比べると低い。

第47図 先土器時代遺物分布図



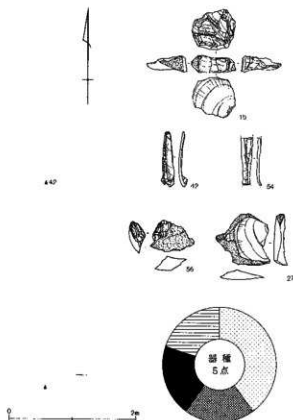
第8表 新山遺跡器種一覧

	細石核	細石刃	打面再生剥片	掻・削器	石核	剥片	砕片	合計
石器集中a	3	40	0	1	0	11	51	106
石器集中b	0	2	1	1	0	1	0	5
石器集中c	3	13	1	0	0	8	14	39
その他	0	1	0	0	1	4	0	6
合計	6	56	2	2	1	24	65	156

第48图 石器集中 a



第49図 石器集中b



石器 (第51～54図)

細石核 (第51図1～6)

1は石器集中c出土である。裏面に原石面を残し、正面を作業面としている。作業面の外形は縦長の楕円形で5条の掻状剥離面が観察できるが、あまり整っていない。打面は不純物を避けるように周縁からの細かい剥離で平坦面を作り出している。横断面形は不整形である。

2は石器集中a出土である。正面を作業面とし、明確な側面を有していない。作業面の外形はU字状となり、4条の掻状剥離面が観察できる。打面は作業面からの剥離で作られ、打面調整剥離を入念に施している。また、右側縁に裏面からの連続した剥離が施されている点が特徴的である。横断面形は裏面を平坦面とした薄鉢状を呈している。

3は石器集中c出土である。裏面及び正面下半部に原石面を残している。作業面は4条の掻状剥離面がみられるが、原石面の関係から、多くの細石刃を剥離し

ているとは思えない。打面は原石面の平坦な部分に、直接打面調整剥離を行う斜傾打面である。底部に裏面方向からの調整剥離がみられ、石核調整と思われる。

4は石器集中a出土である。裏面の打面方向からの加撃によって二分されている。作業面は下半部を斜めに切っているが、もともとの外形は長方形になると思われる。打面は作業面方向からの一枚の剥離によって作られ、打面調整はみられない。

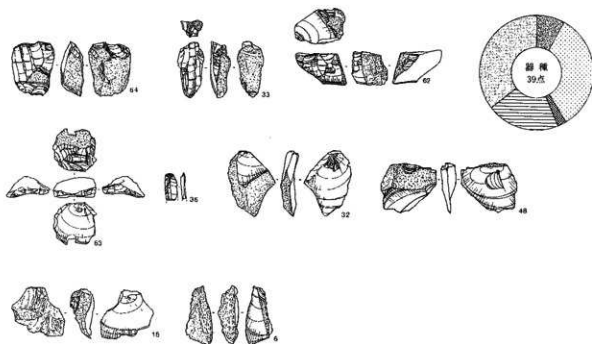
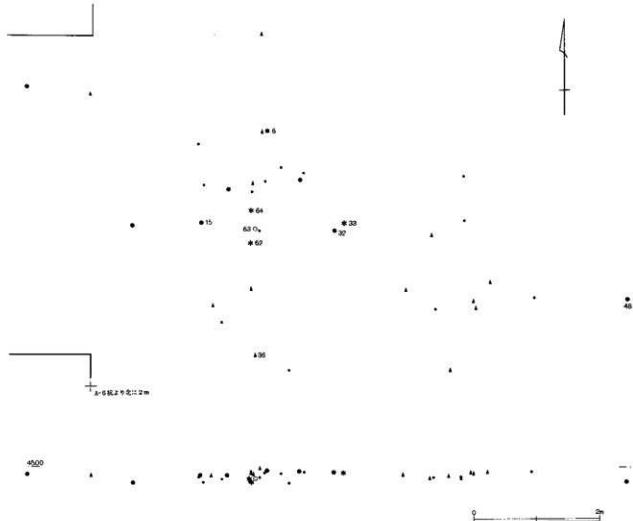
5は石器集中c出土である。底面からの打撃によって二分される。打面は左側縁方向からの一枚の剥離により、打面調整剥離はみられない。

6は石器集中a出土である。作業面の斜め上からの剥離によって打面を失っている。

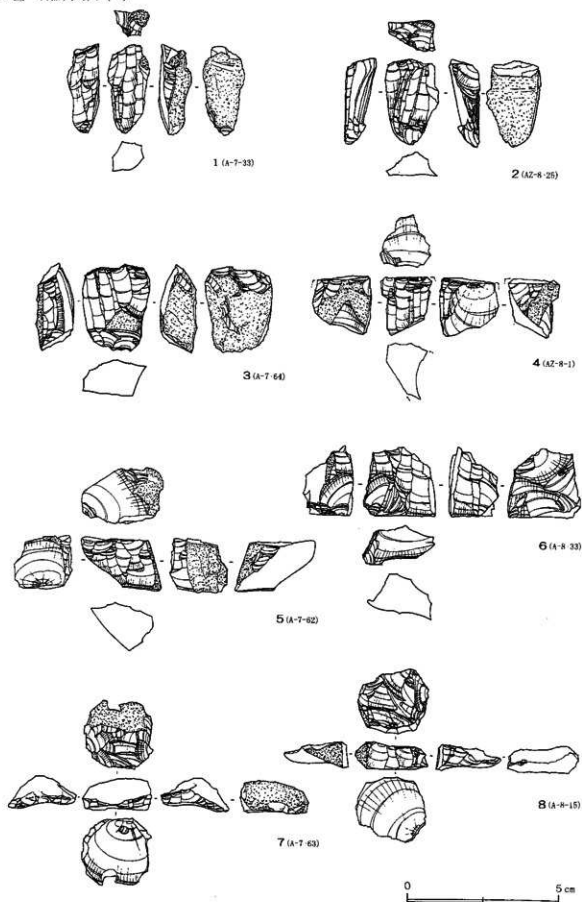
細石刃 (第54図23～48)

細石刃の多くは石器集中aから出土している。柳戸遺跡と比較すると、完形に近いものが多い。23は横断面が三角形になり、稜上剥離がみられる。26は左側に

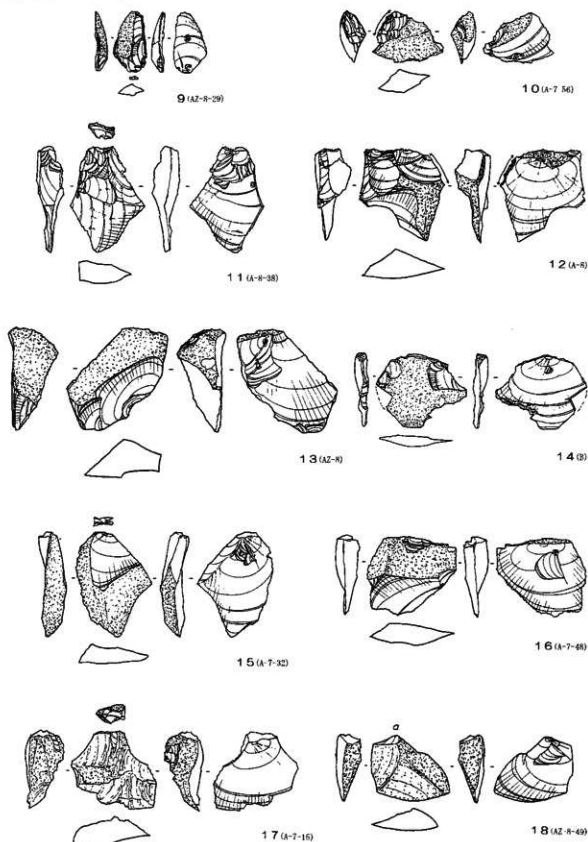
第50図 石器集中c



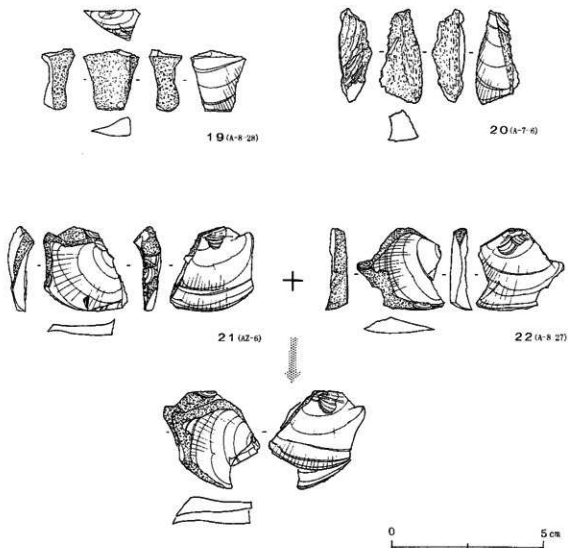
第51図 石器実測図(1)



第52图 石器夹测图(2)



第53図 石器実測図(3)



原石面を帯状に残し、先端部がアーチ状になっている。
28は2点の接合で、近接して出土している。25・27は側
縁に細かい剥離痕がみられる。

打面再生剥片(第51図7～8)

7は石器集中c出土である。正面下半部に原石面を
残し、上半部は上面及び両側縁からの複数の剥離が施
され、縦断面は山形になる。打面から両側縁に細石核
の作業面の跡がみられる。

8は石器集中b出土である。正面は上下両端からの
剥離面が全面に施されている。打面から右側縁に細石
核の作業面の跡がみられる。

削器(第52図9～10)

9は石器集中a出土である。正面に原石面を残す小
形の縦長剥片の右側縁に細かい刃部加工が施されてい
る。

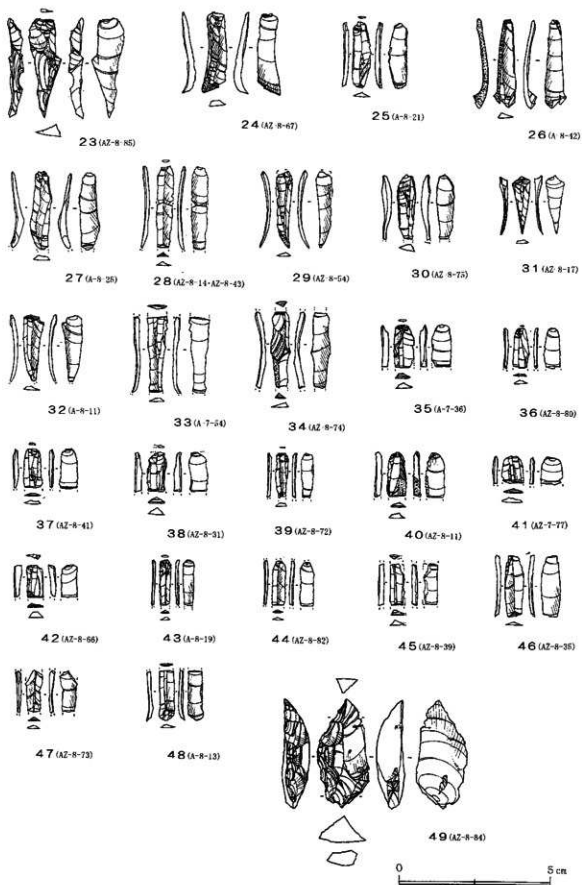
10は石器集中b出土である。正面に原石面を残し、
裏面打面付近を節理面で欠損した貝殻状剥片の打面付
近の一部に刃部加工が施されている。

剥片(第52～53図11～22)

剥片は正面に原石面を残さないもの(11)と、原石面を
大きく残すもの(12～22)がある。

11は正面は主要剥離面の加撃方向と直交する剥離

第54图 石器类测图(4)



第9表 先土器石器一覧

番号	グリッド	集中	北-南	西-東	標高	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1	A-8	a	86	420	44.87	砕片	黒曜石	1.15	0.95	0.40	0.30	
2	A-8	a	57	442	44.93	細石刀	黒曜石	1.30	0.40	0.10	0.05	中間部
4	A-8	a	11	454	44.92	砕片	黒曜石	0.45	0.50	0.05	0.02	
5	A-8	a	5	487	44.94	砕片	黒曜石	0.75	1.10	0.45	0.30	
6	A-8	a	28	503	44.94	砕片	黒曜石	0.35	0.50	0.05	0.02	
8	A-8	a	11	573	44.93	砕片	黒曜石	1.00	0.35	0.10	0.02	
9	A-8	a	36	593	44.93	細石刀	黒曜石	0.95	0.55	0.10	0.07	頭部
10	A-8	a	57	548	44.89	細石刀	黒曜石	0.50	0.45	0.10	0.02	頭部
11	A-8	a	55	529	44.89	細石刀	黒曜石	2.20	0.70	0.25	0.18	第54図32: 完形
12	A-8	a	104	528	44.92	細石刀	黒曜石	0.70	0.40	0.10	0.03	尾部
13	A-8	a	135	578	44.90	細石刀	黒曜石	1.65	0.55	0.25	0.10	第54図48: 中間部
16	A-8	a	55	378	44.82	細石刀	黒曜石	0.95	0.40	0.15	0.05	尾部
17	A-8	a	170	372	44.84	剥片	黒曜石	1.80	0.80	0.30	0.36	
18	A-8	a	90	446	44.86	剥片	黒曜石	1.95	0.80	0.65	0.67	
19	A-8	a	136	465	44.84	細石刀	黒曜石	1.50	0.35	0.15	0.06	第54図43: 中間部
20	A-8	a	86.7	496	44.86	剥片	黒曜石	(0.30)	0.60	0.05	0.02	
21	A-8	a	128	525	44.84	細石刀	黒曜石	2.15	0.60	0.20	0.25	第54図25: 完形
22	A-8	a	136	530	44.85	剥片	黒曜石	1.25	1.70	0.30	0.76	
23	A-8	a	87	542	44.84	細石刀	黒曜石	0.90	0.50	0.10	0.05	尾部
24	A-8	a	79	550	44.84	砕片	安山岩	0.70	0.95	0.20	0.14	
25	A-8	a	41	556	44.85	細石刀	黒曜石	2.50	0.70	0.45	0.38	第54図27: 完形
26	A-8	a	88	584	44.87	砕片	黒曜石	(0.95)	0.70	0.20	0.17	
28	A-8	a	53	425	44.80	剥片	黒曜石	2.00	1.90	1.10	2.50	第53図19
29	A-8	a	28	427	44.82	砕片	黒曜石	2.15	1.15	0.35	0.74	
30	A-8	a	13	516	44.80	細石刀	黒曜石	0.55	0.40	0.10	0.02	頭部
31	A-8	a	33	545	44.81	砕片	黒曜石	1.30	0.50	0.20	0.08	
32	A-8	a	13	662	44.86	砕片	黒曜石	(2.10)	0.35	0.40	0.12	
33	A-8	a	58	547	44.81	細石核	黒曜石	2.30	2.40	1.65	7.44	第51図6
34	A-8	a	68	460	44.70	砕片	黒曜石	(0.80)	0.40	0.05	0.03	
38	A-8	a	44	572	44.62	剥片	黒曜石	3.45	2.45	0.90	4.71	第52図11
2	AZ-8	a	885	572	44.96	砕片	黒曜石	1.20	0.75	0.20	0.14	
3	AZ-8	a	833	459	44.98	剥片	黒曜石	1.45	2.60	0.65	1.30	
4	AZ-8	a	939	423	44.90	剥片	黒曜石	(1.55)	0.70	0.30	0.28	
5	AZ-8	a	952	416	44.89	砕片	黒曜石	1.10	0.60	0.40	0.30	
7	AZ-8	a	854	397	44.97	砕片	黒曜石	2.35	0.50	0.10	0.13	
8	AZ-8	a	873	330	44.94	砕片	黒曜石	(1.75)	0.75	0.30	0.34	
9	AZ-8	a	896	319	44.93	砕片	黒曜石	(1.60)	0.65	0.15	0.21	
11	AZ-8	a	850	232	44.87	細石刀	黒曜石	1.50	0.65	0.25	0.23	第54図40: 中間部
12	AZ-8	a	864	228	44.88	砕片	黒曜石	0.90	0.35	0.10	0.02	
13	AZ-8	a	871	209	44.89	砕片	黒曜石	(0.60)	0.35	0.10	0.02	
14	AZ-8	a	863	193	44.91	細石刀	黒曜石	2.70	0.50	0.25	0.10	第54図28: 完形
17	AZ-8	a	990	406	44.90	細石刀	黒曜石	1.95	0.60	0.25	0.13	第54図31: 完形
18	AZ-8	a	962	395	44.89	砕片	黒曜石	0.95	0.40	0.10	0.04	
19	AZ-8	a	957	374	44.90	砕片	黒曜石	1.30	0.65	0.20	0.13	
20	AZ-8	a	836	355	44.92	砕片	黒曜石	0.65	0.30	0.20	0.03	
21	AZ-8	a	887	320	44.89	細石刀	黒曜石	0.70	0.65	0.20	0.07	頭部
22	AZ-8	a	903	294	44.89	砕片	黒曜石	1.20	2.50	0.50	0.67	
23	AZ-8	a	915	274	44.91	砕片	黒曜石	1.10	2.30	0.65	1.14	
25	AZ-8	a	977	163	44.91	細石核	黒曜石	2.80	1.80	1.05	4.77	第52図2
26	AZ-8	a	725	420	44.95	砕片	黒曜石	0.70	0.75	0.10	0.02	
28	AZ-8	a	903	44	44.86	砕片	黒曜石	1.05	1.50	0.30	0.41	
29	AZ-8	a	925	90	44.86	刮器	黒曜石	1.95	1.10	0.40	0.76	第52図9
30	AZ-8	a	950	130	44.85	細石刀	黒曜石	0.75	0.40	0.10	0.03	尾部
31	AZ-8	a	942	139	44.91	細石刀	黒曜石	1.30	0.65	0.25	0.18	第54図38: 中間部
32	AZ-8	a	938	152	44.83	細石刀	黒曜石	1.00	0.40	0.10	0.06	中間部
33	AZ-8	a	913	156	44.90	砕片	黒曜石	(0.55)	0.25	0.05	0.02	
34	AZ-8	a	927	184	44.83	砕片	黒曜石	(0.80)	0.30	0.05	0.03	

番号	グリッド	集中	北-南	西-東	標高	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
35	AZ-8	a	916	184	44.89	細石刃	黒曜石	2.05	0.65	0.20	0.19	第54図46: 中間部
36	AZ-8	a	908	195	44.83	細石刃	黒曜石	0.55	0.25	0.05	0.02	尾部
37	AZ-8	a	886	184	44.86	砕片	黒曜石	(0.35)	0.30	0.05	0.01	
38	AZ-8	a	848	145	44.86	砕片	黒曜石	(0.85)	0.50	0.10	0.05	
39	AZ-8	a	838	185	44.84	細石刃	黒曜石	1.35	0.50	0.20	0.13	第54図45: 中間部
40	AZ-8	a	867	201	44.86	細石刃	黒曜石	0.95	0.40	0.10	0.05	中間部
41	AZ-8	a	888	200	44.90	細石刃	黒曜石	1.30	0.60	0.15	0.12	第54図37: 中間部
42	AZ-8	a	890	208	44.89	砕片	黒曜石	(1.10)	0.50	0.10	0.03	
43	AZ-8	a	881	210	44.88	細石刃	黒曜石	2.70	0.50	0.25	0.11	第54図28: 完形
44	AZ-8	a	925	205	44.80	砕片	黒曜石	0.40	0.20	0.05	0.01	
45	AZ-8	a	926	235	44.89	砕片	黒曜石	0.20	0.25	0.05	0.01	
46	AZ-8	a	904	237	44.85	砕片	黒曜石	0.85	0.65	0.15	0.07	
47	AZ-8	a	919	252	44.89	細石刃	黒曜石	1.00	0.55	0.10	0.05	中間部
48	AZ-8	a	909	255	44.83	砕片	黒曜石	0.25	0.30	0.05	0.01	
49	AZ-8	a	924	267	44.85	剥片	黒曜石	2.20	2.60	0.90	3.45	第52図18
50	AZ-8	a	954	269	44.87	砕片	黒曜石	0.85	0.70	0.20	0.12	
51	AZ-8	a	857	251	44.87	細石刃	黒曜石	1.00	0.45	0.15	0.05	中間部
52	AZ-8	a	864	271	44.85	砕片	黒曜石	(1.00)	0.50	0.15	0.08	
53	AZ-8	a	823	277	44.85	砕片	黒曜石	0.95	0.95	0.15	0.12	
54	AZ-8	a	817	299	44.87	細石刃	黒曜石	2.55	0.55	0.35	0.18	第54図29: 完形
55	AZ-8	a	815	312	44.83	砕片	黒曜石	(1.25)	0.60	0.10	0.06	
56	AZ-8	a	810	325	44.86	細石刃	黒曜石	1.40	0.55	0.20	0.11	完形
57	AZ-8	a	908	332	44.85	砕片	黒曜石	0.35	1.10	0.20	0.09	
58	AZ-8	a	880	405	44.88	砕片	黒曜石	(0.30)	0.35	0.05	0.02	
59	AZ-8	a	853	425	44.89	砕片	黒曜石	(1.30)	0.50	0.20	0.11	
60	AZ-8	a	898	454	44.88	砕片	黒曜石	0.90	0.40	0.10	0.05	
61	AZ-8	a	985	434	44.87	砕片	黒曜石	(0.80)	0.40	0.10	0.02	
62	AZ-8	a	973	512	44.84	砕片	黒曜石	1.40	0.90	0.35	0.21	
63	AZ-8	a	988	520	44.87	砕片	黒曜石	1.55	0.55	0.30	0.15	
64	AZ-8	a	808	457	44.90	砕片	黒曜石	1.75	0.60	0.20	0.17	
65	AZ-8	a	728	320	44.89	細石刃	黒曜石	1.10	0.55	0.20	0.16	第54図42: 中間部
67	AZ-8	a	981	235	44.79	細石刃	黒曜石	2.70	0.80	0.50	0.39	第54図24: 完形
68	AZ-8	a	880	314	44.81	砕片	黒曜石	(0.65)	0.50	0.05	0.03	
69	AZ-8	a	901	348	44.83	細石刃	黒曜石	0.40	0.45	0.10	0.04	頭部
71	AZ-8	a	892	382	44.84	砕片	黒曜石	1.10	0.65	0.15	0.13	
72	AZ-8	a	928	422	44.87	細石刃	黒曜石	1.50	0.40	0.15	0.06	第54図39: 中間部
73	AZ-8	a	907	450	44.89	細石刃	黒曜石	1.40	0.55	0.20	0.12	第54図47: 中間部
74	AZ-8	a	960	460	44.82	細石刃	黒曜石	2.50	0.65	0.40	0.37	第54図34: 中間部
75	AZ-8	a	920	479	44.86	細石刃	黒曜石	2.15	0.60	0.30	0.31	第54図30: 完形
78	AZ-8	a	663	503	44.95	砕片	黒曜石	0.75	0.90	0.10	0.08	
80	AZ-8	a	946	304	44.74	細石刃	黒曜石	1.35	0.55	0.15	0.10	第54図36: 中間部
81	AZ-8	a	902	330	44.78	砕片	黒曜石	(1.00)	0.45	0.15	0.05	
82	AZ-8	a	882	390	44.86	細石刃	黒曜石	1.45	0.45	0.15	0.06	第54図44: 中間部
84	AZ-8	a	977	491	44.72	ナイフ	黒曜石	3.60	1.70	0.90	4.31	第54図49
85	AZ-8	a	924	518	44.74	細石刃	黒曜石	3.30	1.10	0.50	0.95	第54図23: 完形
86	AZ-8	a	999	134	44.74	砕片	黒曜石	(0.45)	0.45	0.05	0.02	
88	AZ-8	a	990	160	44.65	砕片	黒曜石	(0.55)	0.50	0.15	0.02	
1-1	AZ-8	a	896	611	44.93	剥片	黒曜石	1.95	0.55	0.65	1.48	
1-2	AZ-8	a	896	611	44.93	細石核	黒曜石	1.95	1.70	1.95	5.39	第51図4
54	A-7	b	453	907	44.88	細石刃	黒曜石	2.55	0.65	0.30	0.26	第54図33: 中間部
56	A-7	b	72	758	44.96	刮器	黒曜石	1.70	2.30	0.85	2.12	第52図10
15	A-8	b	382	28	44.93	打面再生剥片	黒曜石	0.90	2.35	2.15	3.14	第51図8
27	A-8	b	248	52	44.86	剥片	黒曜石	2.70	2.90	0.75	3.66	第53図22
42	A-8	b	297	235	44.80	細石刃	黒曜石	2.95	0.75	0.45	0.38	第54図26: 完形
77	AZ-7	a	683	977	44.84	細石刃	黒曜石	0.90	0.70	0.15	0.10	第54図41: 頭部
2	A-6	c	217	914	44.86	砕片	黒曜石	1.40	0.90	0.20	0.26	
4	A-6	c	330	898	44.88	剥片	黒曜石	1.60	(1.90)	0.55	1.52	
7	A-6	c	342	998	44.88	細石刃	黒曜石	0.80	0.45	0.10	0.05	中間部

番号	グリッド	集中	北-南	西-東	標高	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1	A-7	c	250	270	44.97	細石刀	黒曜石	1.90	0.80	0.20	0.13	中間部
5	A-7	c	402	271	44.97	細石刀	黒曜石	0.75	0.35	0.10	0.02	中間部
6	A-7	c	400	279	44.96	剥片	黒曜石	3.10	1.40	1.05	3.51	第53図20
8	A-7	c	420	171	44.83	砕片	黒曜石	1.65	2.00	0.45	1.36	
10	A-7	c	485	179	44.74	砕片	黒曜石	(1.10)	0.70	0.50	0.45	
12	A-7	c	492	218	44.85	剥片	黒曜石	1.70	2.10	0.65	1.67	
15	A-7	c	544	176	44.85	剥片	黒曜石	2.60	2.80	1.30	5.31	第52図17
16	A-7	c	548	66	44.74	剥片	黒曜石	(2.00)	1.20	0.40	0.49	
20	A-7	c	674	194	44.85	細石刀	黒曜石	1.35	0.65	0.10	0.14	中間部
21	A-7	c	700	208	44.80	砕片	黒曜石	2.10	1.00	0.30	0.36	
22	A-7	c	458	302	44.89	砕片	黒曜石	(1.50)	1.20	0.20	0.22	
23	A-7	c	483	257	44.89	細石刀	黒曜石	0.85	0.50	0.10	0.04	中間部
24	A-7	c	480	276	44.90	砕片	黒曜石	0.30	0.50	0.15	0.02	
25	A-7	c	496	255	44.92	砕片	黒曜石	0.95	0.30	0.10	0.03	
27	A-7	c	477	333	44.92	剥片	黒曜石	2.20	1.65	0.55	1.46	
28	A-7	c	466	339	44.91	砕片	黒曜石	(1.30)	1.00	0.35	0.34	
31	A-7	c	557	268	44.83	砕片	黒曜石	1.35	1.40	0.20	0.37	
32	A-7	c	557	388	44.90	剥片	黒曜石	3.45	2.50	0.95	4.93	第52図15
33	A-7	c	545	403	44.90	細石核	黒曜石	2.95	1.40	1.10	3.90	第51図1
36	A-7	c	751	261	44.87	細石刀	黒曜石	1.40	0.65	0.25	0.25	第54図35: 中間部
37	A-7	c	564	540	44.82	細石刀	黒曜石	0.70	0.65	0.20	0.09	頭部
38	A-7	c	542	591	44.81	砕片	黒曜石	0.85	1.05	0.20	0.13	
39	A-7	c	638	632	44.91	細石刀	黒曜石	1.15	0.55	0.15	0.12	中間部
40	A-7	c	650	500	44.87	細石刀	黒曜石	1.60	0.55	0.10	0.05	中間部
42	A-7	c	679	610	44.88	細石刀	黒曜石	0.90	0.55	0.10	0.06	頭部
43	A-7	c	668	606	44.90	細石刀	黒曜石	1.30	0.45	0.10	0.07	中間部
44	A-7	c	680	546	44.83	砕片	黒曜石	1.15	0.35	0.15	0.09	
45	A-7	c	664	702	44.92	砕片	黒曜石	(0.90)	0.70	0.15	0.12	
46	A-7	c	776	570	44.85	細石刀	黒曜石	1.40	0.55	0.10	0.08	中間部
48	A-7	c	666	852	44.75	剥片	黒曜石	2.65	2.95	0.80	4.19	第52図16
53	A-7	c	473	590	44.84	砕片	黒曜石	0.65	0.50	0.10	0.03	
55	A-7	c	775	315	44.74	砕片	黒曜石	0.80	1.55	2.50	0.24	
61	A-7	c	647	254	44.78	細石刀	黒曜石	0.70	0.50	0.10	0.02	頭部
62	A-7	c	575	253	44.80	細石核	黒曜石	1.80	2.70	1.90	6.92	第51図5
63	A-7	c	554	261	44.80	打面再生剥片	黒曜石	1.10	2.30	2.25	4.95	
64	A-7	c	525	254	44.76	細石核	黒曜石	2.90	2.25	1.20	9.11	第51図3
①	A-8	-	-	-	-	細石刀	黒曜石	1.90	0.80	0.20	0.26	中間部
②	A-8	-	-	-	-	剥片	黒曜石	3.10	2.95	1.15	4.96	第52図12
⑦	AZ-6	-	-	-	-	剥片	黒曜石	2.80	2.80	0.85	5.00	第53図21
⑧	AZ-7-①	-	-	-	-	剥片	黒曜石	1.80	2.40	0.40	1.11	
③	AZ-8	-	-	-	-	石核	黒曜石	3.40	3.30	1.60	10.73	第52図13
⑤	A区一括	-	-	-	-	剥片	黒曜石	2.40	3.00	0.50	2.23	第52図14

面によって構成されている。

ナイフ形石器 (第54図49)

12~22は正面の原石面から角礫を素材としていることが窺える。

49は基部に打面を残す二側縁加工のナイフ形石器である。形態から武蔵野台地IV下層のものと考えられる。

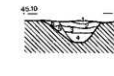
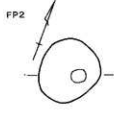
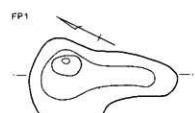
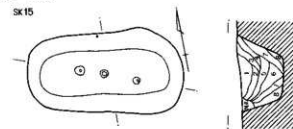
3. 縄文時代の遺構と遺物

第3号土壌 (第55図)

B区 R-6グリッドに位置する。平面プランは楕円形で長軸2.3m、短軸1.4m、深さ1.0mで、主軸はN-

29°-Eである。底面にビットが3本ある。

第55図 土壌



- SK-15
- 1 黒褐色土 ローム地すき層に穴
 - 2 黒褐色土 ローム地すき層に穴
 - 3 黒褐色土 ローム地すき層に穴
 - 4 黒褐色土 ローム地すき層に穴
 - 5 黒褐色土 ローム地すき層に穴
 - 6 黒褐色土 ローム地すき層に穴
 - 7 黒褐色土 ローム地すき層に穴
 - 8 黒褐色土 ローム地すき層に穴

- FP-1
- 1 黒褐色土 黒土・黒褐色土を少量含む
 - 2 黒褐色土 黒土・黒褐色土を少量含む

- FP-2
- 1 黒褐色土 黒土・黒褐色土を少量含む
 - 2 黒褐色土 黒土・黒褐色土を少量含む
 - 3 黒褐色土 黒土・黒褐色土を少量含む
 - 4 黒褐色土 黒土・黒褐色土を少量含む
 - 5 黒褐色土 黒土・黒褐色土を少量含む
 - 6 黒褐色土 黒土・黒褐色土を少量含む

0 2m

第14号土壌 (第55図)

A区 B-4グリッドに位置する。平面プランは楕円形で長軸2.5m、短軸1.5m、深さ0.8mで主軸はN-4°-Wである。

第15号土壌 (第55図)

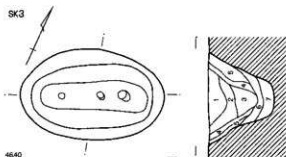
A区 D-7グリッドに位置する。平面プランは隅丸長方形で長軸2.5m、短軸1.3m、深さ0.7mで主軸はN-77°-Wである。底面にビットが3本ある。

第1号炉穴 (第55図)

A区 A-6グリッドに位置する。平面プランは不定形で長軸2.4m、短軸0.9m、深さ0.2mである。

第2号炉穴 (第55図)

A区 A-6グリッドに位置する。平面プランは円形で長軸は1.0m、深さ0.3mである。



- 1 黒褐色土 ローム地すき層、黒褐色土を少量含む
- 2 黒褐色土 ローム地すき層、黒褐色土を少量含む
- 3 黒褐色土 ローム地すき層、黒褐色土を少量含む
- 4 黒褐色土 ローム地すき層、黒褐色土を少量含む
- 5 黒褐色土 ローム地すき層、黒褐色土を少量含む
- 6 黒褐色土 ローム地すき層、黒褐色土を少量含む
- 7 黒褐色土 ローム地すき層、黒褐色土を少量含む
- 8 黒褐色土 ローム地すき層、黒褐色土を少量含む

0 2m

第1号集石土壇 (第56図)

A区G-6グリッドに位置する。平面プランは円形で長軸は0.9m、深さ0.1mである。

第2号集石土壇 (第56図)

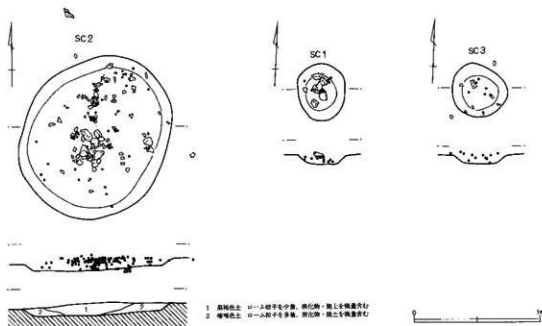
A区G-6グリッドに位置する。平面プランは円形で

長軸は2.5m、深さ0.2mである。

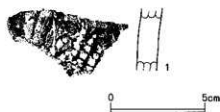
第3号集石土壇 (第56図)

A区G-6グリッドに位置する。平面プランは円形で長軸は0.9m、深さ0.1mである。

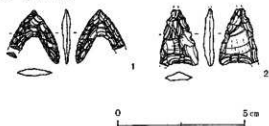
第56図 集石土壇



第57図 出土土器



第58図 出土石器



出土土器 (第57図1)

グリッドから出土した土器群は細片が少量であり、縄文時代中期の加曾利EⅢ式土器と、堀之内Ⅱ式の新しい土器群であった。図示し得たものは1点のみで、1は幅広の縄文帯と磨消文帯が垂下し、地文に単節Rを施文する。

出土石器 (第58図1・2)

1 石鏃 左脚部を欠損する。基部の挟りは深く、調整加工は両面とも入念に施されている。

2 石鏃 先端及び左脚部を若干欠損する。基部は平基で、外形は二等辺三角形状である。裏面に主要剝離面を残し周縁に調整加工を施している。

第10表 縄文石器一覧

番号	出土地点	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	備考
第58図-1	A-7	石鏃	2.10	2.10	0.35	0.63	チャート	
2	試掘	石鏃	2.20	1.50	0.45	1.23	チャート	

4. 平安時代の遺構と遺物

構 (第59・60図)

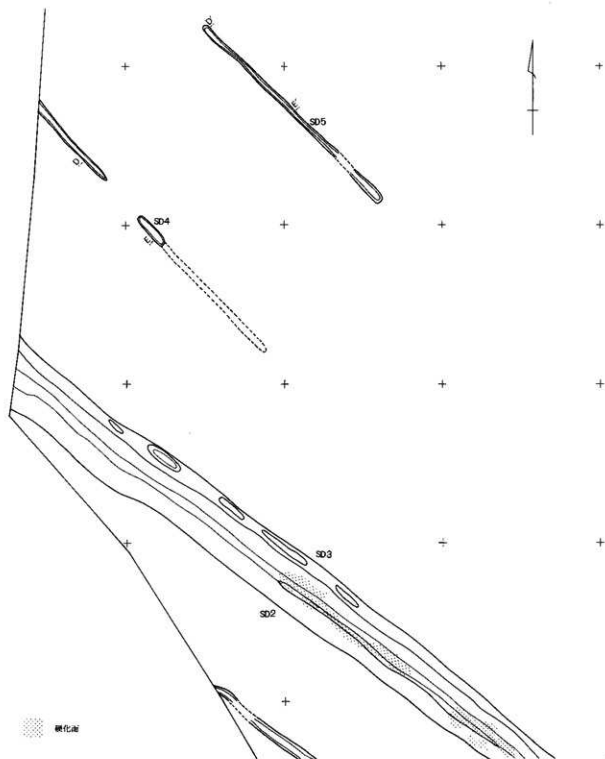
新山遺跡B区は、N-51'-W方向に並行する5状の溝が検出された。

1号溝 調査区の南側に通る。幅0.6m、深さ0.1mであ
第59図 遺状遺構 (1)

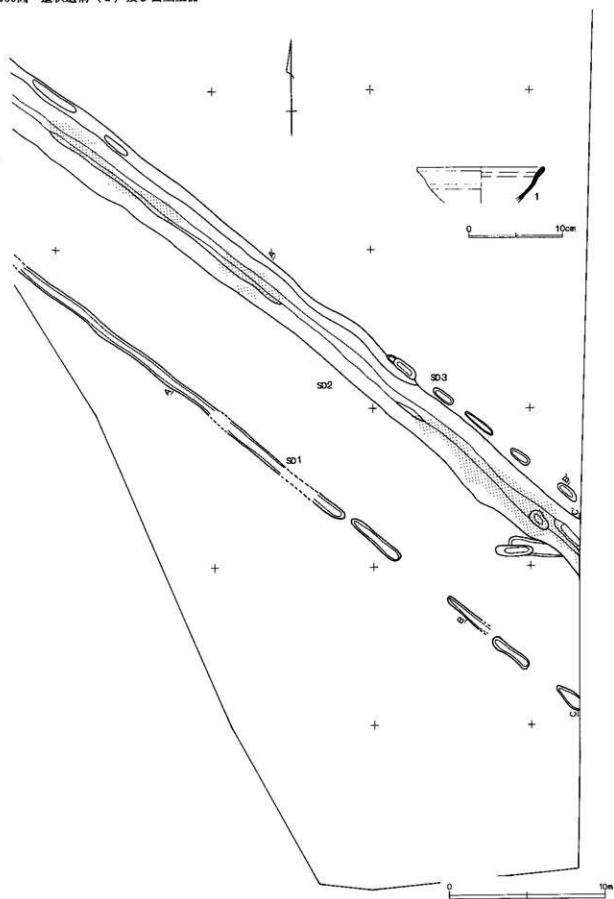
る。

2号溝 本調査区で最大規模の溝である。幅3.6m、深
さ1mで、覆土上面の一部に硬化面がみられる。

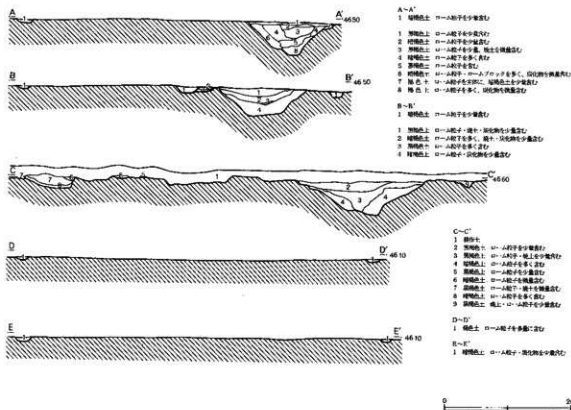
3号溝 2号溝と一部重複する。幅0.6m、深さ0.2mで



第60図 道状遺構(2)及び出土土器



第61図 道状遺構断面図



部分的にしか残っていない。規模は1号溝に近いと思われる。

4号溝 調査区北東部に少し離れている。幅0.6m、深さ0.1mで、規模は1、3、5号溝と同じである。

5号溝 4号溝に並行する。幅0.6m、深さ0.1mである。

以上、各溝の規模を概観した。次に、溝相互の関連をみると、1～3号溝が幅10.5mの間隔で並行し、2号溝上面に硬化面がみられることから、道状遺構の可能性が指摘できる。井上(1993)は東山道武蔵路に関連する道状遺構として位置づけている。本遺構を道状遺構と考え、1・3号溝が、道の側溝になると思われ、幅10mの道路が推定される。

4・5号溝は1～3号溝に並行し、1・3号溝に近い規模で、溝の間隔は12.1mと共通する点が多く、道状遺構に関連するものと考えられる。

出土土器(第60図1)

須恵器環 第2号溝覆土、硬化面下から出土。残存率は10%と低い。口径の推定は13.4cmで、9世紀後半のものと考えられる。

(註)

井上尚明 1993 「北武蔵の古代道路について」『研究紀要第10号』埼玉草埋蔵文化財調査事業団

5. その他の時代の遺構

近世以降と思われる遺構は、A区から土壌14基、B区から土壌2基が検出された。土壌に伴う遺物は出土しなかった。

土壌の平面プランは、長楕円形のもの为主体を占める。それ以外の形状のものは、方形に近いもの(第10・16号)、不正形のもの(第13号)である。

第5・12号土壌 平面プランは長楕円形で、規模は長軸が2 m程度である。土壌中央にビット1本を有する。底面はビットの左右で深さが異なっている。

第1・1(B区)・2・6・7・8・11土壌 平面プラン

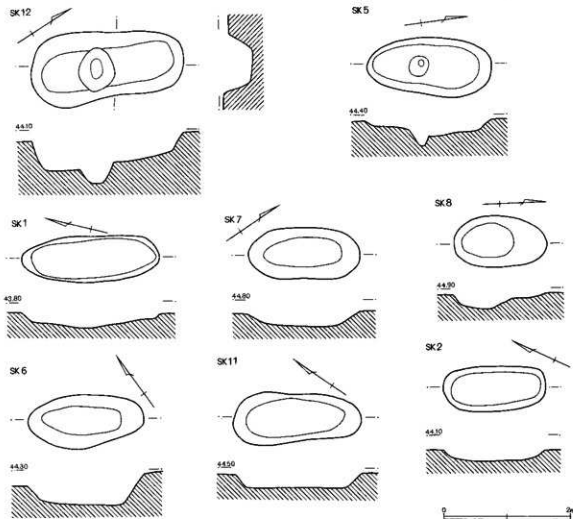
は長楕円形で、長軸が2 m前後である。第8号土壌以外の底面は比較的平坦である。

第3・9・4号土壌 平面プランは長楕円形で、長軸が1 m前後の小形である。

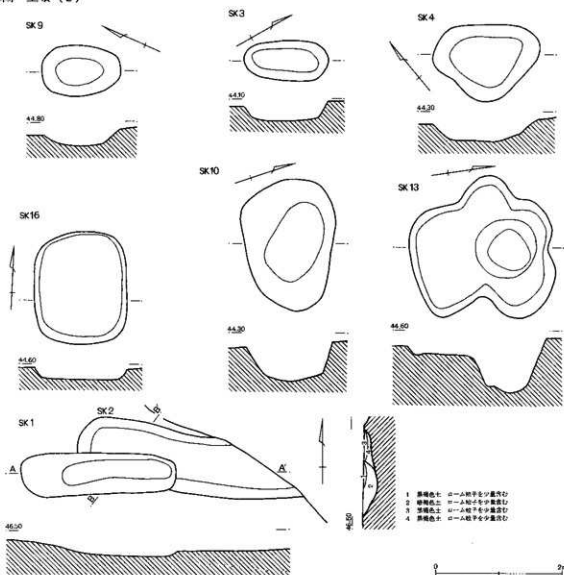
第10・16土壌 平面プランが方形に近いもので、第10号土壌は底面がU字状となり深く、第16号土壌の掘り込みは浅く底面は平坦である。

第13号土壌 平面プランは不整形で、幾つかの土壌が切り合っている可能性が高い。中央部の円形の掘り込みは深い。

第62図 土壌(1)



第63図 土壇 (2)

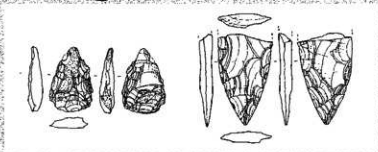


第11表 土壇一覧

土壇番号	グリッド	平面形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	主軸方位	備考
1	B-4	長楕円形	2.5	0.4	0.3	N-91°-E	A区
1	C-4	長楕円形	2.2	0.7	0.2	N-16°-W	B区
2	A-4	長楕円形	—	0.9	0.3	—	B区
2	B-4	楕円形	1.7	0.7	0.2	N-28°-W	A区
3	B-4	楕円形	1.4	0.6	0.3	N-29°-E	A区
4	B-4	楕円形	1.7	1.3	0.3	N-50°-W	A区
5	B-4	楕円形	2.0	0.9	0.4	N-8°-E	A区:ピット1本
6	A-4	楕円形	1.9	0.8	0.5	N-56°-W	A区
7	A-5	楕円形	1.8	0.8	0.2	N-32°-E	A区
8	A-5	楕円形	1.5	0.8	0.2	N-4°-E	A区
9	A-5	楕円形	1.3	0.8	0.2	N-24°-W	A区
10	A-4	楕円形	2.1	1.5	0.6	N-70°-W	A区
11	C-5	楕円形	2.0	0.7	0.2	N-34°-W	A区
12	D-5	楕円形	2.4	1.0	0.7	N-30°-E	A区:ピット1本
13	B-5	不整形	2.2	1.9	0.8	—	A区
16	D-7	方形	1.8	1.5	0.2	N-2°-E	A区

Mukaiyama

向山遺跡



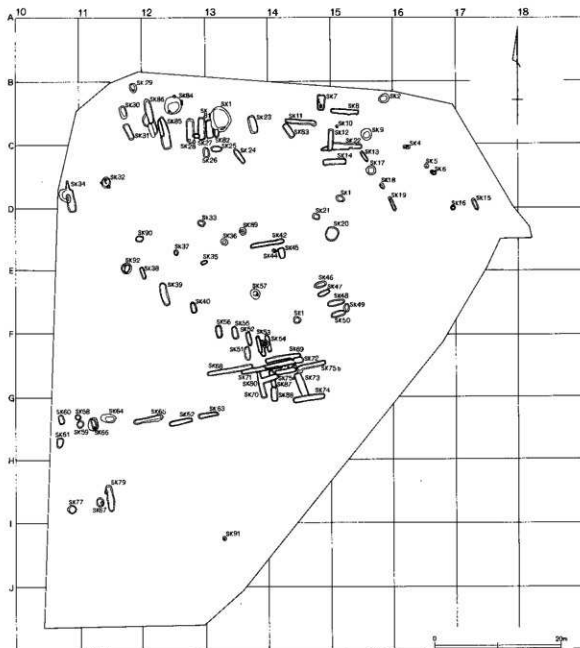
VI 向山遺跡の調査

1. 遺跡の概要

向山遺跡から検出された遺構は、縄文時代に属すると思われる土壌8基と、近世以降と思われる85基の土壌である。遺物は先土器時代から縄文時代の土器・尖頭器・細石刃・石鏃・削器が若干出土している。また、近世以降の遺物は図示できる物は無かった。

検出された遺構の主体は近世以降の土壌で、その配置は調査区の北側にまとまるグループと、調査区中央にまとまるグループに分かれ、土壌の主軸も北を向くものと、東を向くものに二分できる。

第64図 遺構全体図



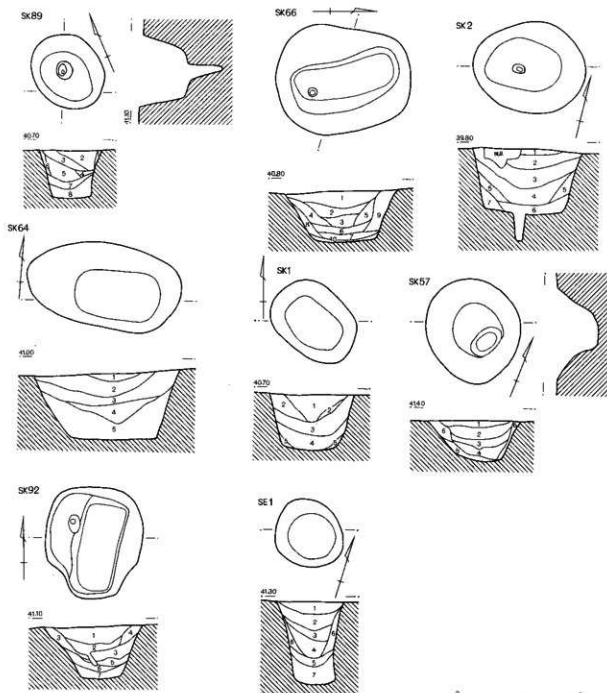
2. 縄文時代の遺構と遺物

向山遺跡で縄文時代に属すると思われる土壌を一括した。土壌は調査区全域に疎に分布はしており、何処かにまとまる傾向はみられない。第2・66・92号土壌はいわゆる丁ビットである。

第65図 縄文時代の土壌

第89号土壌 (第65図)

D-14グリッドに位置する。平面プランは円形で、底面の中心に深いビットをもつ。長軸は1.3m、短軸は1.0mで、深さは0.8mある。



5K1

- 1 埋戻土上 ロームブロックを多数に、埋戻土下・埋戻土中を少量含む
- 2 埋戻土上 ロームブロックを多数含む
- 3 埋戻土上 ロームブロックを多数含む
- 4 埋戻土上 ロームブロックを多数含む
- 5 埋戻土上 ロームブロックを多数含む

5K2

- 1 埋戻土上 埋戻土を多く含む
- 2 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む
- 3 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む
- 4 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む
- 5 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む
- 6 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む
- 7 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む

5K3

- 1 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む
- 2 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む
- 3 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む
- 4 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む
- 5 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む
- 6 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む
- 7 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む

5K4

- 1 埋戻土上 ロームブロックを少量含む
- 2 埋戻土上 ロームブロックを少量含む
- 3 埋戻土上 ロームブロックを少量含む
- 4 埋戻土上 ロームブロックを少量含む
- 5 埋戻土上 ロームブロックを少量含む

5K5

- 1 埋戻土上 ロームブロックを少量含む
- 2 埋戻土上 ロームブロックを少量含む
- 3 埋戻土上 ロームブロックを少量含む
- 4 埋戻土上 ロームブロックを少量含む
- 5 埋戻土上 ロームブロックを少量含む
- 6 埋戻土上 ロームブロックを少量含む
- 7 埋戻土上 ロームブロックを少量含む
- 8 埋戻土上 ロームブロックを少量含む
- 9 埋戻土上 ロームブロックを少量含む
- 10 埋戻土上 ロームブロックを少量含む

5K6

- 1 埋戻土上 ロームブロックを少量含む
- 2 埋戻土上 ロームブロックを少量含む
- 3 埋戻土上 ロームブロックを少量含む
- 4 埋戻土上 ロームブロックを少量含む
- 5 埋戻土上 ロームブロックを少量含む
- 6 埋戻土上 ロームブロックを少量含む
- 7 埋戻土上 ロームブロックを少量含む

5K7

- 1 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む
- 2 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む
- 3 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む
- 4 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む
- 5 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む
- 6 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む
- 7 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む

5K8

- 1 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む
- 2 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む
- 3 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む
- 4 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む
- 5 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む
- 6 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む
- 7 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む
- 8 埋戻土上 埋戻土を多く含む、ロームブロックを少量含む

第66号土壌 (第65図)

G-12グリッドに位置する。平面プランは隅丸長方形を呈し、長軸は2.2m、短軸は1.6m、深さ0.8mで、主軸はN-0°-Eである。

第2号土壌 (第65図)

B-16グリッドに位置する。平面プランは楕円形を呈し、底面にビット1本を有する。長軸は1.8m、短軸は1.4m、深さ1.0mで、主軸はN-86°-Eである。

第84号土壌 (第65図)

G-12グリッドに位置する。平面プランは楕円形を呈し、長軸は2.5m、短軸は1.3m、深さ1.1mで、主軸はN-18°-Wである。

第1号土壌 (第65図)

C-16グリッドに位置する。平面プランは隅丸方形で、

長軸は1.5m、短軸は1.1m、深さ0.9mである。

第57号土壌 (第65図)

E-13グリッドに位置する。平面プランは円形を呈し、長軸は1.5m、深さ1.6mである。

第92号土壌 (第65図)

D-12グリッドに位置する。平面プランは隅丸長方形で、長軸は1.8m、短軸は1.4m、深さ0.8mである。主軸はN-1°-Wで、西側の膨らみは遺構が埋まる過程の崩落と思われる。

SE1 (第65図)

E-15グリッドに位置する。調査の時点では井戸として呼称しているが、縄文時代の土壌の可能性の方が高い。平面プランは円形で長径は1.2m、深さ1.3mである。

出土土器 (第66図1~20)

向山遺跡からは、主に縄文時代早期の土器群が出土している。

第1類土器 (1~9)

押型文系土器群を一括する。

a種 (1~5)

横刻み原体の山形押型文土器を一括する。何れも明赤褐色を呈し、厚さ5mm程を測る。胎土は緻密であるが、小礫を若干含み、白色粒子が目立つ。1は原体長16mmを測り、4条の山形文が刻まれる。山形文は縦位に若干間隔を開けて施文されている。

b種 (6、7)

縦刻み原体の山形押型文土器を一括する。6、7は同一個体と思われる。a種よりは色調が明るく、胎土に片岩類の小礫を多く含み、白色粒子が少ない。原体を縦位に密接して施文し、施文幅は15mmを測る。原体長はそれよりやや長くなるものと思われる。

c種 (8)

押型文土器に伴う縄文施文土器である。8は細密な単筋LRを縦位施文し、無文帯と縄文帯を交互に垂下するものと思われる。器壁は5mm程で、胎土には片岩類の小礫を多く含む。焼成良く、赤褐色を呈する。

d種 (9)

押型文土器に伴う無文土器である。底部付近の破片であり、器面の荒れもあるため確実な無文土器とは断言できないが、現存部には押型文は施文されない。胎土、色調等は他種に類似する。

第2類土器

貝殻沈線文系土器群を一括する。

a種 (10~13)

凹線状の短沈線文を斜位に密接施文する土器群を一括する。短沈線は断面が半円状を呈し、概ね幅4mm、長さ4cmに施文されている。右上から左下に描き下ろ

されており、モチーフ性は窺えない。裏面には、上下方向の強い削り状の整形痕が明瞭に残る。胎土は砂粒、小礫を多く含み、白色粒子も多く含まれる。全体的に器面がざらついている。

b種 (15、16)

細沈線文と刺突文とが組合わさるものを一括する。

15は水平沈線文と縦長の2段の刺突文とで横位に区画した後、細沈線文の比較的粗い斜格子目文を帯状に施文するものである。器表面は良く研磨されるが、裏面には横位の強い擦痕状の整形痕が施され、砂粒の動きが著しい。小礫、砂粒を多く含み、長石類が目立つ。色調は淡橙褐色を呈する。16は3本の細い平行沈線文で横位区画し、押し引き状の縦位の刺突文を挟みながら施文する。破片の下部に斜位の沈線文が見られることから、水平区画の下に斜位のモチーフを施文するものと思われる。区画線に沿って刺突文が施文される。暗赤褐色を呈し、砂粒を多く含むが、堅緻な胎土である。内外面とも良く整形されている。

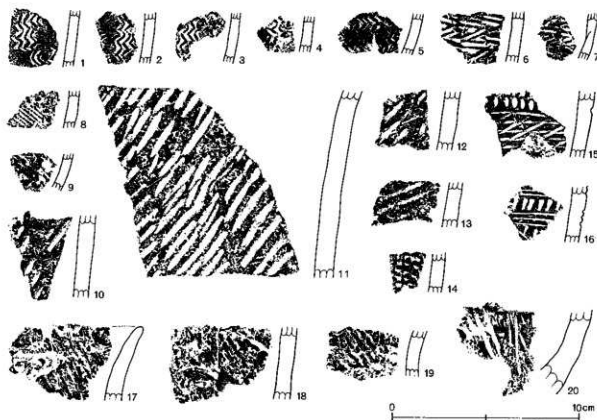
c種 (14)

細かな連続刺突文を施文するものである。刺突文は一見すると貝殻腹縁の様であるが、細い角頭状工具を何本か束ねたもので施文されており、やや角を立てる三角押文状を呈する。砂粒を多く含むが、堅緻であり、内面に強い整形痕が見られる。

以上、第2類は施文の特徴等から、三戸式でも若干新しい段階に比定されるものと思われる。

第3類 (17~20)

貝殻条痕文系土器群を一括する。17は口唇部が先細りしながら開く器形を呈し、内外面に条痕文を施文する。胎土は小礫も含むが、繊維を大量に含む。他の破片も同様な胎土と整形が見られ、時期的な同時性が窺われる。胎土の特徴等から、条痕文系土器群の中でも後半期、早期終末に近い時期に比定されよう。



出土土器（第67図）

尖頭器（第67図1～3）

尖頭器の3点はD-13グリッドにまとまる傾向がみられた。

1は正面に原石面を残した、透明度の高い黒曜石の縦長剥片を素材とし、打面を基部として丸く仕上げている。外形は二等辺三角形となる。正面の調整加工は、中央部に原石面を残し周辺に剥離を施し、外形を整えている。裏面は主要剥離面の平坦面をそのままに、基部周辺に平坦剥離を施しバルブの膨らみを除去している。横断面形は薄手の凸レンズ状となる。

2は上半部を欠損する。外形は最大幅が基部中央にくる木葉形尖頭器になると思われる。調整加工は全体に粗い。横断面は薄手のレンズ状になっている。

3は上半部及び基端部を欠損する。外形は2と同様、木葉形尖頭器になると思われる。調整加工は粗く、横断面は厚手で菱形になっている。

細石刃（第67図4～8）

細石刃と思われるものを一括した。E-11グリッドにまとまる傾向がみられた。

4は下端部を欠損する。打面は線打面で、正面の稜線は両側縁に平行して綺麗に並ぶ。

5は下半部を欠損する。打面は潰れている。正面の稜線は両側縁に平行している。

6は下半部を欠損する。打面は複数の細かい剥離面で構成されている。正面の稜線は両端側にみられる。

7は下半部を欠損する。打面は線打面である。正面の稜線は中央に1本通っている。

8は下半部を欠損する。打面は潰れている。正面の稜線は中央部に1本通っている。

石鏃（第67図9・10）

9は右側部を欠損する。外形は括りの深い二等辺三角形を呈し、脚部の先端はコ字状をしている。裏面に素材剥片の主要剥離面を大きく残し、打点の周辺（左

側縁)に平削刺雕を施しているが、バルブの膨らみを取ることはできなかったようである。正面の調整加工は丁寧である。横断面は菱形状である。

10は上半部を欠損する。外形は基部の快りが深く、左右非対称形である。調整加工は正面に周縁刺雕が施されるのみで、作りは粗い。

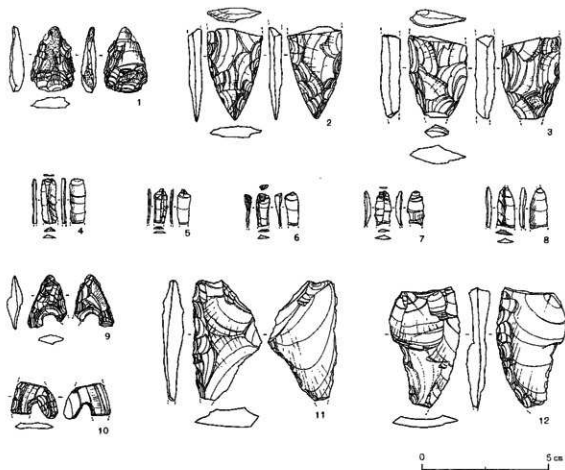
削器(第67図12・13)

2点とも近世の土壌から出土しているが、遺構との共存関係は無い。

11は縦長剥片を素材とし、正面の左側縁に刃部加工を施している。

12は縦長剥片を素材とし、裏面の左側縁に刃部加工を施している。

第67図 出土石器



第12表 縄文石器一覧

番号	出土地点	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
第67図-1	D-13	尖頭器	2.60	1.70	0.60	2.45	黒曜石	
2	D-13	尖頭器	3.60	2.20	0.50	4.40	安山岩	
3	D-13	尖頭器	3.30	2.30	0.80	7.51	安山岩	
4	E-11	細石刃	1.80	0.60	0.20	0.20	黒曜石	
5	E-11	細石刃	1.40	0.50	0.10	0.08	黒曜石	
6	E-11	細石刃	1.30	0.50	0.30	0.13	黒曜石	
7	E-11	細石刃	1.30	0.70	0.30	0.15	黒曜石	
8	E-11	細石刃	1.60	0.70	0.20	0.23	黒曜石	
9	E-14	石鏃	2.10	1.60	0.60	1.03	黒曜石	
10	D-13	石鏃	1.40	1.90	0.30	0.70	黒曜石	
11	SK68	削器	4.70	2.80	0.90	10.26	チャート	
12	SK68	削器	4.80	2.80	0.80	10.08	チャート	

3. その他の時代の遺構

向山遺跡から検出された遺構の主体は、近世以降と思われる土壌で、85基が検出された。土壌に伴う遺物が無いため、時期の限定は難しいが、遺構の配置状況から、何等かの関係の有るものと考えられる。

土壌の分布は、調査区の北側の発掘区に沿うものと、中央部にまとまり、南側部分、東側部分は空白となっている。

土壌の平面プランは、長方形とU形のものがあり、便宜的に分類すると、

I類：平面プランは隅丸の長方形で、長さが幅の3倍以下の土壌。掘り込みは浅いものも多く、底面は平坦である。

II類：平面プランは隅丸の長方形で、長さが幅の3倍以上の土壌。掘り込みは浅いものも多く、底面は平坦である。

III類：U形で長径が1m以上の土壌。掘り込みは浅いものと、やや深いものがあり。浅いものの底面は平坦で、深いものはU字状になっている。

IV類：長径が1m前後のビット状の土壌。掘り込みは大きさの割りに深く、U字状になっている。

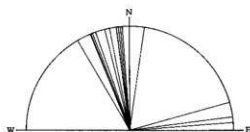
以上の4類型に分けることができる。次に各類型の説明を行う。

I類 (第69・71・75・76図)

総数は19基で、中央部を中心に分布し、グリッドに沿って、北西から南東に等間隔に並んでいる。主軸方向は北を中心に西に20°の範囲にほとんど納まる。

規模は、長軸の最大が3.1m、最小が1.4mと比較的まとまり、規格的である。

第68図 土壌の主軸方位



第I類

II類 (第70～75図)

総数は39基で、調査区の北側と中央部に分布している。主軸方向はI類と異なり、北を指すグループと、東を指すグループに二分でき、前者をaグループ、後者をbグループと仮称する。

土壌の数はaグループが21基、bグループが18基と拮抗する。グループaは、西に30°の範囲に、グループbは、北に20°の範囲にはば収まる。

次に、各グループの分布状況を見ると、グループaは北西側に、グループbは北東側にまとまり、中央部では両グループが切り合っている。

規模は、長軸が最大7.5m、最小2.5mと差は大きく、まとまらないが、幅は最大1.4m、最小0.5mとまとまり規格的である。

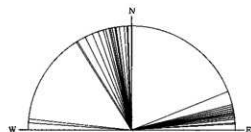
III類 (第76図)

総数は13基で、調査区の北側に多く、中央にはみられない。

IV類 (第77図)

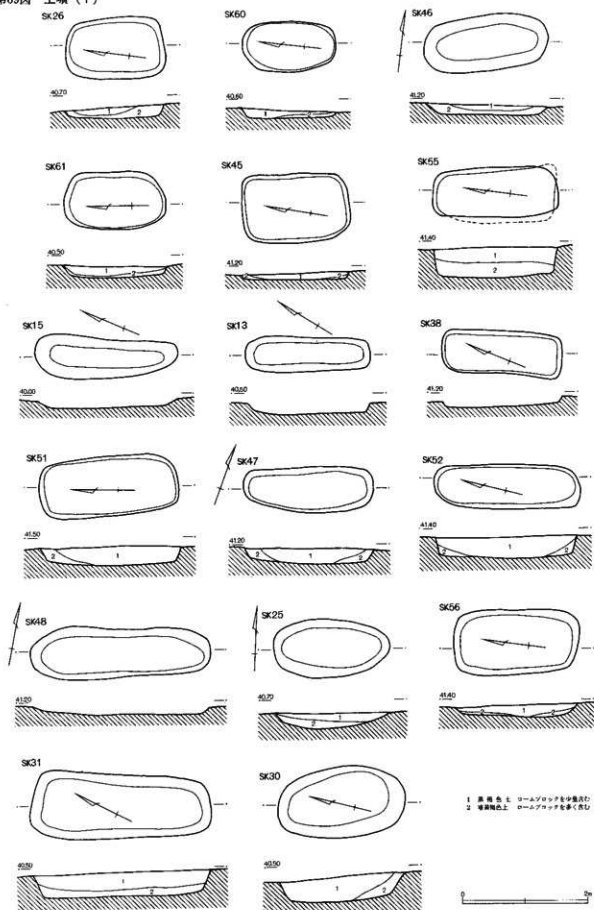
総数は13基で、調査区の北東コーナーにまとまる傾向がある。

以上、各類型を概観した。最後に遺構の性格を考えると、相伴する遺物が無いので推定が難しいが、I・II類は、大きさに規格性があり、主軸方向が緻密に意識されていることから、墓墳の可能性が高いと思われる。

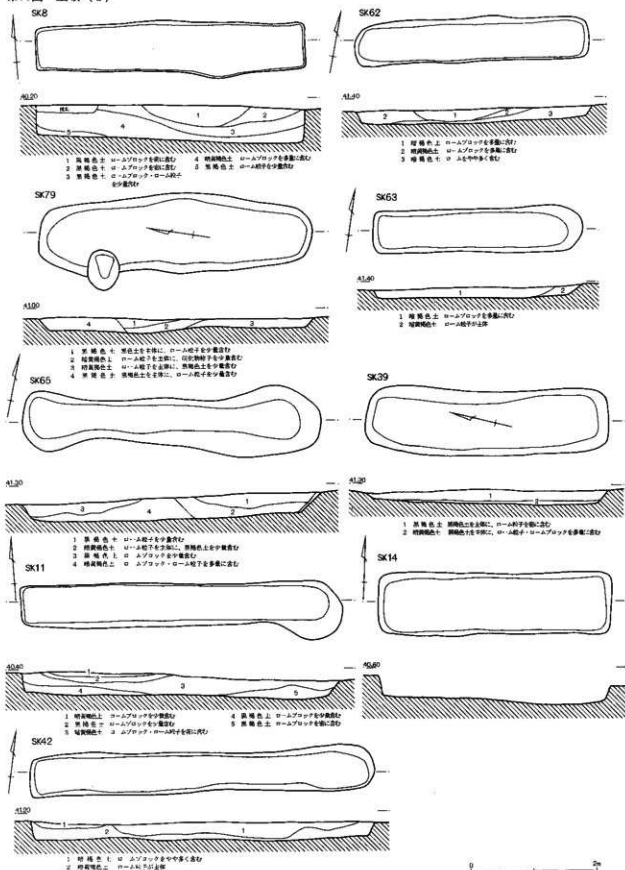


第II類

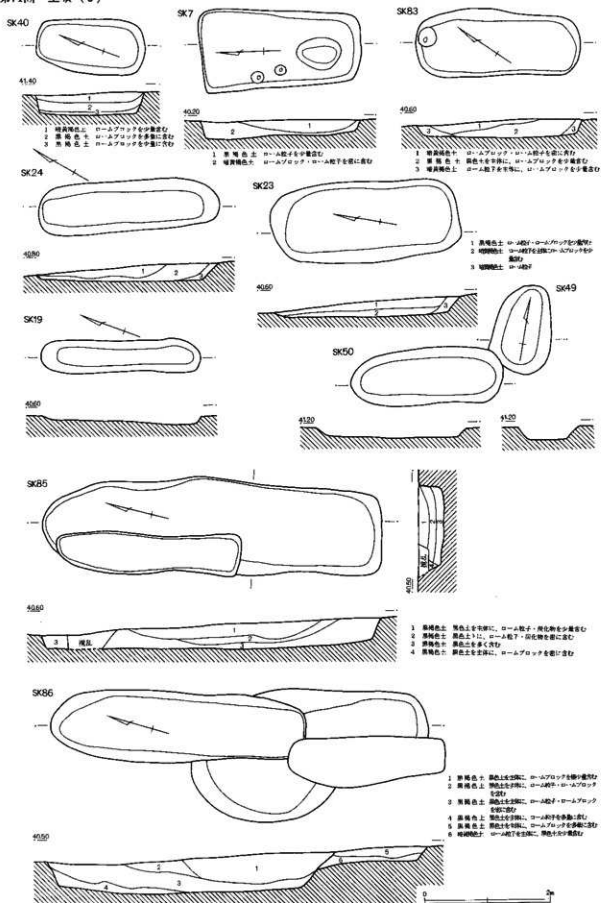
第69図 土坑 (1)



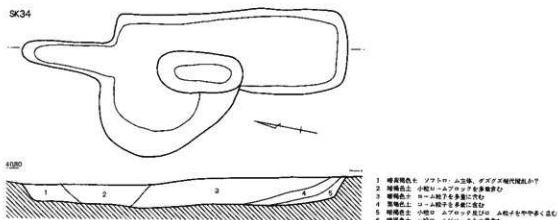
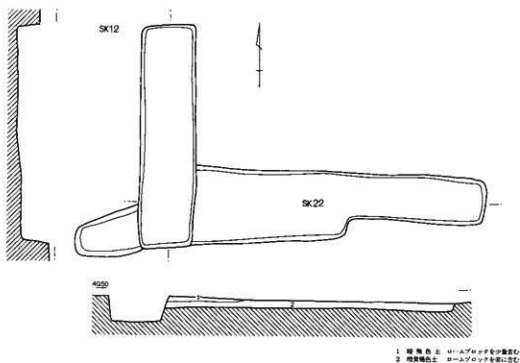
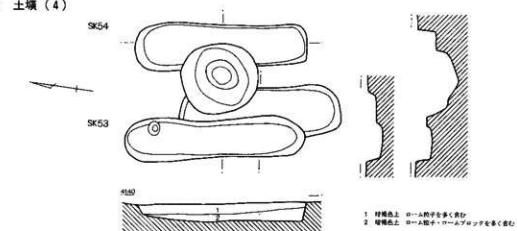
第70図 土壌(2)



第71図 土壕 (3)

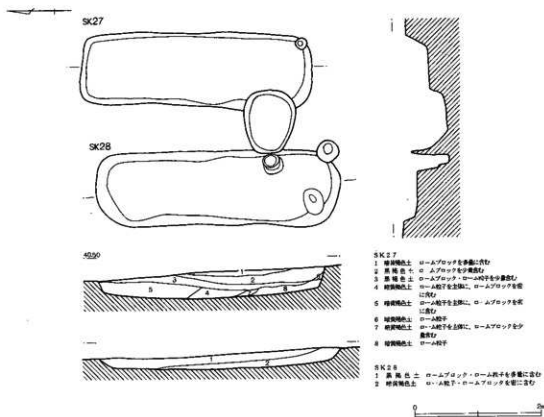
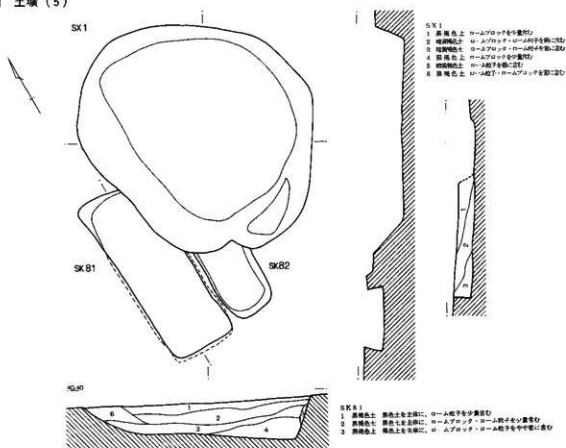


第72図 土壙 (4)

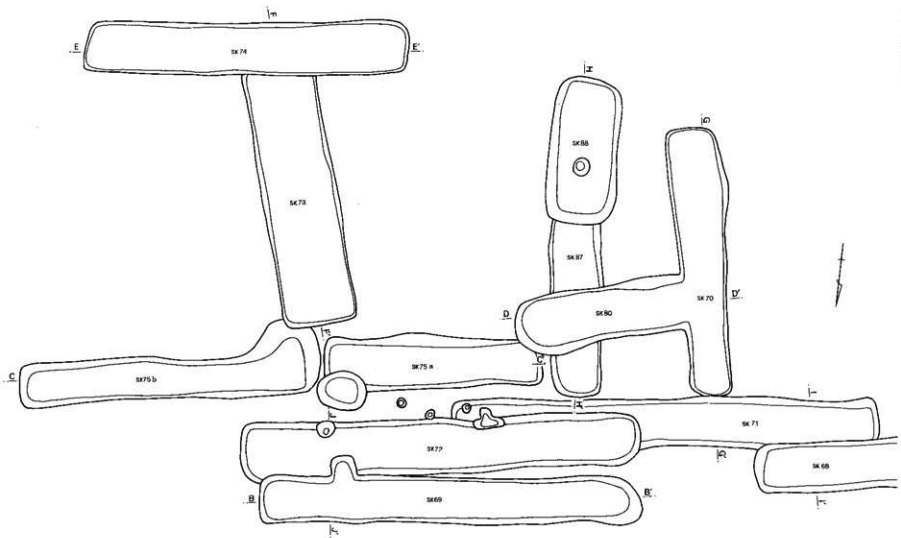


0 2m

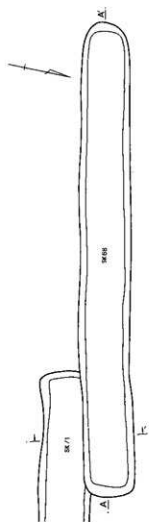
第73図 土坑 (5)



第74圖 土壩(6)



第75図 土壕（7）



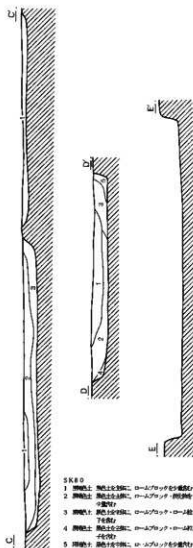
SK 75 (a)
1 黒褐色土 ロームブロックを少量含む

SK 75 (b)
1 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを多く含む
2 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む
3 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む



SK 65
1 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む
2 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む
3 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む
4 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む

SK 65
1 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む
2 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む
3 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む
4 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む
5 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む
6 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む



SK 80
1 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む
2 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む
3 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む
4 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む
5 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む



SK 79
1 黒褐色土
2 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む
3 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む

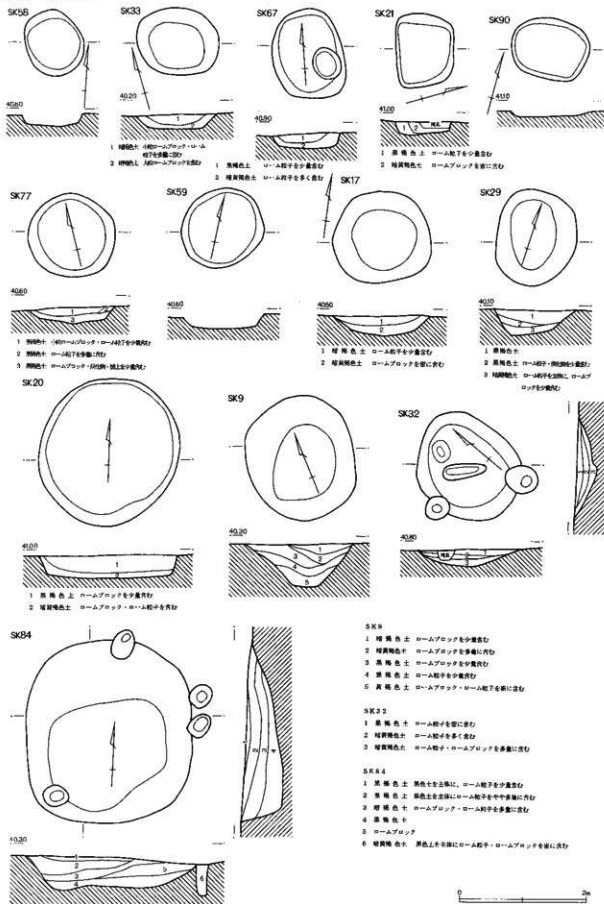
SK 79
1 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む
2 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む
3 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む
4 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む
5 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む

SK 87
1 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む
2 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む

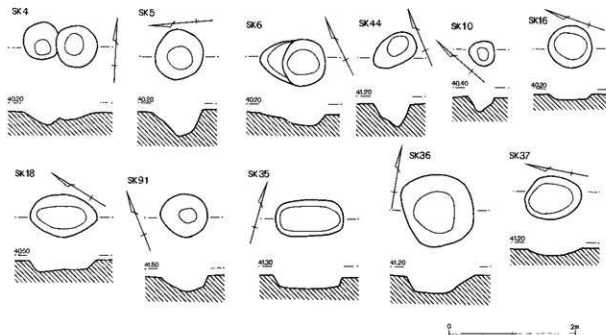
SK 88
1 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む
2 黒褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを少量含む



第76図 土曜(8)



第77図 土坑(9)



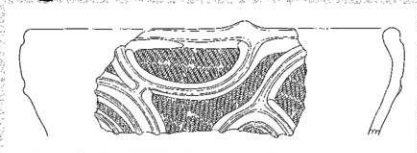
第13表 土坑一覧

土坑番号	グリッド	平面形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	主軸方位	備考
4a	C-17	IV類	0.6	0.6	0.2	—	
4b	C-17	IV類	0.7	0.6	0.1	—	
5	C-17	IV類	0.8	0.7	0.4	—	
6A	C-17	IV類	1.0	0.6	0.1	—	
6B	C-17	IV類	0.7	0.7	0.2	—	
7	B-15	I類	2.6	1.2	0.3	N-0°-E	
8	B-16	II類	4.3	0.8	0.6	N-86°-W	
9	B-16	III類	1.9	1.7	0.7	—	
10	B-16	IV類	0.4	0.4	0.2	—	
11	B-15	II類	5.1	0.6	0.4	N-84°-W	
12	B-16	II類	3.5	0.9	0.4	N-3°-W	
13	C-16	II類	1.9	0.5	0.2	N-32°-W	
14	C-16	II類	3.7	0.9	0.4	N-87°-E	
15	C-18	II類	2.3	0.5	0.1	N-23°-W	
16	C-17	IV類	1.4	0.6	0.1	—	
17	C-16	III類	1.6	1.5	0.2	—	
18	C-16	IV類	1.1	0.7	0.2	—	
19	C-17	II類	2.5	0.5	0.5	N-19°-W	
20	D-16	III類	2.4	2.1	0.4	—	
21	D-15	III類	1.2	0.9	0.2	—	
22	C-16	II類	6.6	0.7	0.1	N-86°-E	
23	B-14	I類	3.1	1.3	0.3	N-14°-W	
24	C-14	II類	2.9	0.8	0.3	N-32°-W	
25	C-14	I類	1.9	0.9	0.2	N-86°-E	
26	C-14	I類	1.6	0.9	0.2	N-7°-W	
27	B-13	II類	3.7	1.1	0.4	N-0°-E	
28	B-13	II類	3.9	1.2	0.3	N-4°-W	
29	B-12	III類	1.5	1.3	0.4	—	
30	B-12	I類	2.1	1.1	0.4	N-19°-W	
31	B-12	I類	2.9	1.0	0.4	N-21°-W	
32	C-12	III類	1.9	1.5	0.3	—	
33	D-13	III類	1.3	1.0	0.2	—	

土壌番号	グリッド	平面形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	主軸方位	備考
34	C-11	II類	5.2	1.3	0.4	N-10°-W	
35	D-13	IV類	1.1	0.6	0.2	—	
36	D-14	IV類	1.3	1.1	0.3	—	
37	D-13	IV類	0.9	0.6	0.1	—	
38	E-13	I類	1.9	0.7	0.7	N-22°-W	
39	E-13	II類	3.9	1.0	0.2	N-12°-W	
40	E-13	I類	1.7	0.7	0.2	N-22°-W	
42	D-14	II類	5.5	0.6	0.3	N-82°-E	
44	D-15	IV類	0.8	0.5	0.4	—	
45	D-15	I類	1.7	1.1	0.1	N-11°-W	
46	E-15	I類	2.0	0.9	0.1	N-83°-E	
47	E-15	II類	2.1	0.5	0.3	N-68°-E	
48	E-16	II類	2.9	0.7	0.1	N-81°-E	
49	E-16	I類	1.4	0.9	0.2	N-5°-W	
50	E-16	I類	2.4	0.9	0.2	N-75°-E	
51	F-14	I類	2.2	0.9	0.3	N-6°-W	
52	F-14	II類	2.3	0.7	0.3	N-9°-W	
53a	F-14	II類	2.9	0.6	0.3	N-11°-W	
53b	F-14	II類	2.6	0.8	0.1	N-11°-W	
54	F-15	II類	2.7	0.7	0.3	N-9°-W	
55	E-14	I類	2.0	0.8	0.5	N-7°-W	
56	E-14	I類	2.1	1.0	0.2	N-7°-W	
58	G-11	III類	1.1	0.9	0.2	—	
59	G-12	III類	1.4	1.2	0.2	—	
60	G-11	I類	1.5	0.8	0.2	N-7°-W	
61	G-11	I類	1.7	0.9	0.3	N-8°-E	
62	G-13	II類	3.7	0.7	0.2	N-78°-E	
63	G-14	II類	3.3	0.7	0.2	N-80°-E	
65	G-13	II類	4.8	0.8	0.4	N-77°-E	
67	H-12	III類	1.5	1.1	0.3	—	
68	F-14	II類	7.5	0.8	0.2	N-79°-E	
69	F-15	II類	6.0	0.7	0.3	N-83°-E	
70	F-14	II類	4.2	0.6	0.2	N-12°-W	
71	F-14	II類	6.7	0.6	0.2	N-84°-E	
72	F-15	II類	6.3	0.8	0.1	N-80°-E	
73	F-15	II類	4.0	1.1	0.4	N-16°-W	
74	F-15	II類	5.1	0.8	0.3	N-83°-E	
75a	F-15	II類	3.4	0.7	0.1	N-81°-E	
75b	F-15	II類	4.7	0.6	0.2	N-78°-E	
77	H-11	III類	1.4	1.3	0.3	—	
79	H-12	II類	4.4	1.1	0.2	N-13°-W	
80	F-14	II類	3.3	0.8	0.3	N-76°-E	
81	B-14	II類	3.1	1.0	0.3	N-2°-W	
82	B-14	—	—	0.8	0.1	N-0°-E	
83	B-15	I類	2.6	1.0	0.3	N-30°-W	
84	B-13	III類	3.2	2.8	0.7	—	
85a	B-13	II類	5.4	1.4	0.4	N-15°-W	
85b	B-13	II類	2.9	0.6	0.4	N-15°-W	
86	B-13	II類	4.1	0.8	0.5	N-17°-W	
87	F-15	II類	2.8	0.8	0.1	N-7°-W	
88	F-15	I類	2.3	1.1	0.2	N-4°-W	
90	D-12	III類	1.2	1.0	0.1	—	
91	I-14	IV類	0.7	0.7	0.2	—	

Aodana

青棚遺跡



VII 青棚遺跡の調査

第78図 調査区

1. 遺跡の概要

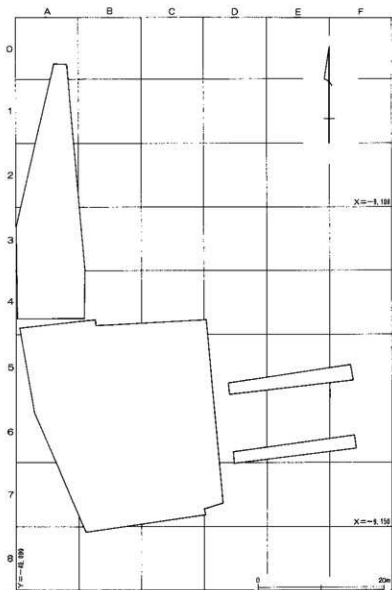
青棚遺跡は、南雲氏の表採資料が『鶴ヶ島町史 原始・古代・中世編』に掲載されており、先土器時代から縄文時代の遺跡として、知られている。今回の調査地点は、表採地点から東側に若干離れるが、遺跡が範囲内の可能性が高いため、1993年度に一次調査を行い、縄文中期の土器が出土したため、1994年度に発掘調査を行った。

調査の結果、遺構の検出はなく、遺物は一次調査でみつかった、縄文中期の土器片が、そのほとんどである。

2. 縄文時代の遺物

出土土器 (第79図1～18)

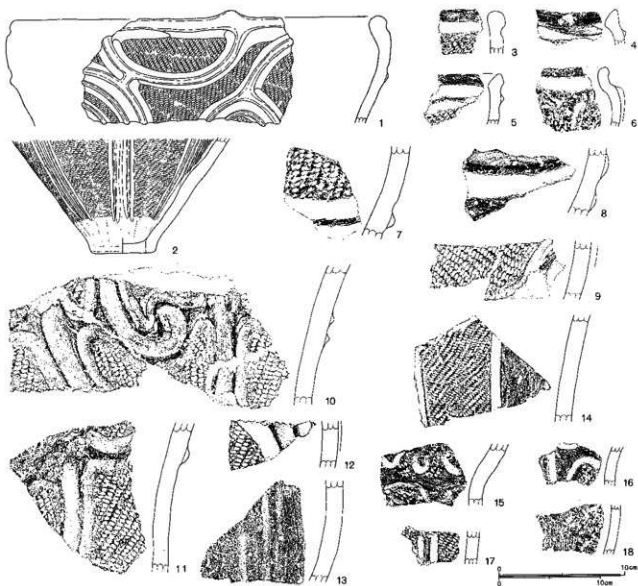
縄文時代中期終末の土器群がまとまって出土した。1は口縁部がやや内湾して開くキャリバー系の深鉢形土器で、推定口径約50cmを測る大型土器である。器面全面に隆帯文が展開される土器である。口縁部は口唇がやや厚く肥厚し、小突起が何単位かに付き、突起から連なる隆帯で楕円区画が施される。この楕円区画は胴部の隆帯モチーフと連結されているが、本来、口縁部文様帯の楕円区画文の名残であり、胴部文様帯と一体化したモチーフに変形しているものである。胴部は詳細は不明であるが、2本隆帯を基本にして渦巻モチーフを連結する構成を採るものと思われる。地文は単節RLである。2は2本対の隆帯文が垂下する土器で、1とは別個体と思われるが、地文に単節RLを施文する。底径8cm、現存高15cmを測る。



10～13も隆帯のみでモチーフが展開されるものである。10は胴中央部で、上半部の渦巻状モチーフと下半部の区画文との連結部分である。連結隆帯の一部が小さな「J」字状となる。11は10と同一個体と共に地文に単節RLを施文する。12は1と同一個体である。13は2本の低隆帯が垂下するのみの破片である。

3～9は口縁部文様帯をもつキャリバー系土器の口縁部であり、4、5は口唇部の内端が尖り気味に整形される。6は内彎の強い器形で、鉢になる可能性もある。楕円区画の合わせ目が高い隆帯となり垂下し、不鮮明ではあるが地文に単節LRを施文する。

第79図 出土土器



14、17は幅広の磨消帯と縄文帯が交互に垂下するもので、地文は単節RⅠである。17は間隔が狭い。

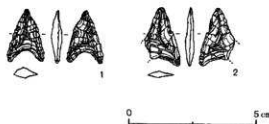
15、16は胴部の括れるキャリバー系土器で、沈線文のみでモチーフが展開されるものである。15は胴上半部にやや幅狭の「U」字状文を描き、間に「S」字状の沈線文を挟んでいる。地文縄文は区画外に施文され

る。下半部は逆「U」字状文を配し、区画内に充填縄文を施す。16は垂下する沈線懸垂文と対向する「U」字状文を施文し、区画内に充填縄文を施す。

18は直線的な条線文を施文するものである。

以上の土器群は、中期終末のおよそ加曾利EⅢ式に比定される土器群である。

第80図 出土石器



出土石器 (第80図)

1 石鏃 凹基無基で、外形は二等辺三角形状をしている。調整加工は良く、特に先端部の作り出しは丁寧である。横断面は、裏面が平坦で薄鋒状に仕上げている。

2 石鏃 左脚部を欠損する。外形態は凹基無基の二等辺三角形状となる。先端が尖鋭でない点など、1と比べると調整加工は若干粗い。横断面は菱形に近い。

3. 周辺の石器

本石器は、南雲氏が発見保管しておいた石器で、市教育委員会が整理し、『鶴ヶ島市史 原始・古代・中世編』に掲載している。今回、市教育委員会の斉藤稔氏の厚意によって、再度実測図を掲載させてもらった。

ナイフ形石器 (第81図 1・2)

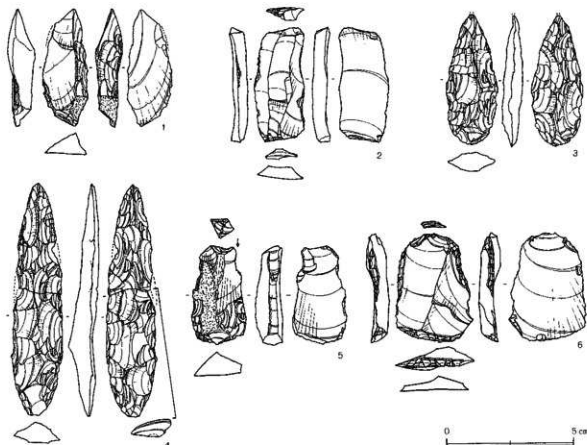
1 は縦長剥片を素材とし、調整加工を右側縁打面部側、ほぼいっばいに、鋸歯状に近い大きめの剥離を施している。左側縁は基端部周辺に細かい剥離加工が施している。横断面は厚手の三角形である。

第81図 周辺の石器 (1)

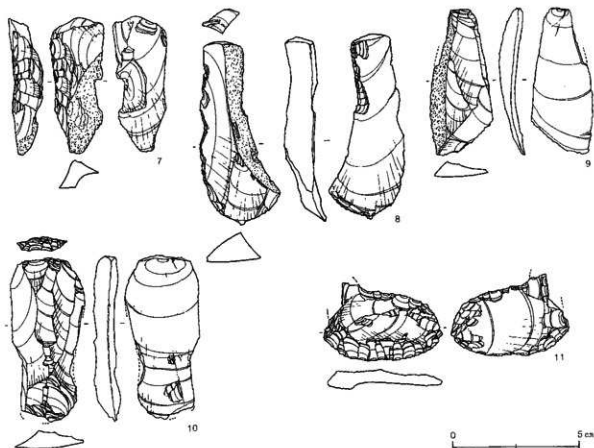
2 は縦長剥片を素材とし、打面側を基端としている。打点は除去されており、調整加工は先端に施されている。搔器とも考えられるが、調整剥離が Blunting 状であることから、端部加工のナイフ形石器と考えられる。

尖頭器 (第81図 3・4)

3 は最大幅が基部付近にある、木葉形の尖頭器である。調整加工は比較的丁寧で、両面とも面的剥離が施されている。側縁の稜線は側面の中央部を通っており、



第82図 周辺の石器 (2)



第14表 石器一覧

番号	出土地点	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
第80図-1		石鏃	2.10	1.50	0.50	0.83	チャート	
2		石鏃	2.30	1.40	0.30	0.89	チャート	
第81図-1		ナイフ形石器	4.60	1.80	1.10	6.42	チャート	
2		ナイフ形石器	4.50	2.00	0.70	6.87	チャート	
3		尖頭器	5.10	2.00	0.80	8.64	チャート	
4		尖頭器	9.00	2.00	1.00	16.73	粘板岩	
5		彫器	3.90	2.20	1.20	9.23	黒曜石	
6		搔器	4.30	3.10	0.90	9.60	珪質頁岩	
第82図-7		削器	5.30	2.20	1.40	12.62	チャート	
8		削器	7.30	3.10	1.90	20.45	チャート	
9		剥片	5.70	2.50	1.00	9.00	粘板岩	
10		剥片	6.40	3.00	1.00	19.10	粘板岩	
11		石砧	3.20	4.70	0.80	10.66	チャート	

横断面はレンズ状を呈する。

4は細身の柳葉形尖頭器である。基部中央で2つに折れているが、折れ面の風化程度から使用に因るものではなく、後の欠損と考えられる。しかし、採集時点のものかは不明であるため、折れ面は図示した。調整加工は両面とも丁寧に入念に施され、正面の基部中央

に稜線が通る。裏面は平坦削離で整えられ、側縁の稜線は裏面側に位置する。横断面は凸レンズ状となる。

彫器 (第81図5)

5は縦長剥片を素材とし、素材の打面部に裏面からの調整剝離を施し、彫器の打面を作っている。桶状剝

離は側縁からやや裏面側に向かって行われている。

掘・削器（第81・82図6・7）

6は良質の珪質頁岩を用いている。幅広い縦長剥片の下端辺に裏面からの刃部加工が施されている。打面部付近の加工は外形を整えるための剥離である。

7は正面に原石面を残す縦長剥片を素材とし、左側縁に粗い刃部加工が施されている。

剥片（第82図8～10）

8は正面に原石面を残す縦長剥片である。裏面左側縁の剥離は剥離面の風化状況から、後のものと考えら

れる。

9は左側側面に原石面を帯状に残す。外形の整った縦長剥片である。

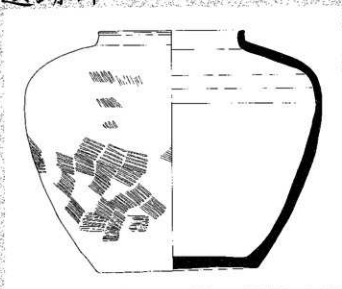
10は縦長剥片である。正面の剥離面は主要剥離面と平行する複数の剥離面が観察できる。打面は正面方向からの複数の剥離面で構成されている。

石匙（第82図11）

11はつまみ部を欠損するが、全体の形状から横形の石匙と思われる。刃部は裏面からの槌状の剥離によって仕上げられている。

Kouzan

光山遺跡群



2. 奈良時代の遺構と遺物

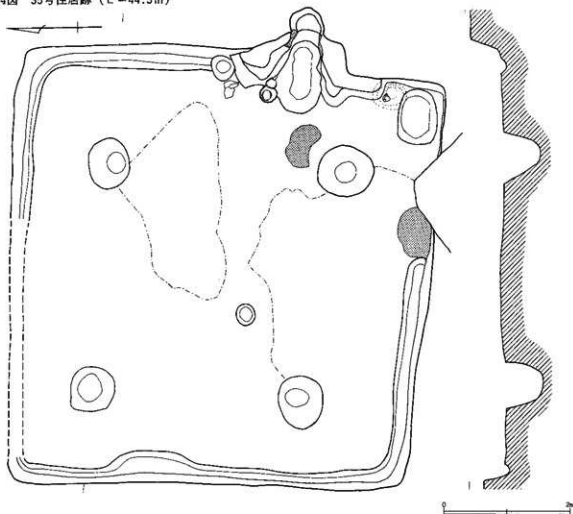
35号住居跡 (第84・85図)

今回の調査では北壁を確認でき、これにより全体の規模が判明したが、道路下は攪乱が多く、不明瞭な部分もある。主軸方向は前回の計測と同様にN-104°-Eを指し、規模は東西6.55m、南北6.7mを計り、ほぼ方形のプランを呈している。壁溝は攪乱で明瞭ではないが、北西コーナー付近で一部途切れている。柱穴は北壁の両コーナーに沿って確認され、4本の主柱穴を

有する住居跡となった。

出土遺物は、前回は「福」の墨書や鉄製轡など豊富であったが、今回は鉄製品を含め多くが検出されている。2の須恵器環と7の須恵器蓋は、各々前回報告の遺物番号13・24と接合したため実測しなおしたものである。11は片口の壺、12・13は鎌で、折り返しと刃部の位置から、12は右利き用で13は左利き用である。

第84図 35号住居跡 (L=44.5m)

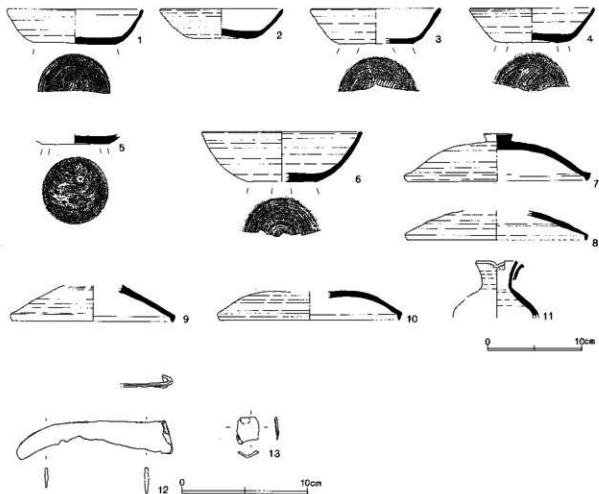


第15表 35号住居跡出土土器観察表 (第85図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	14.3	3.6	8.9	BDEH	良	5	30%	ロクロ右回転、全面鑑割り
2	環	13.0	3.1	5.8	EDI	良	8	20%	床、底部に施記号「×」、右回転
3	環	13.8	3.7	7.8	ABDE	不良	4	25%	左回転、糸切り痕、周辺鑑割り
4	環	(13.2)	3.6	(7.6)	ABDE	良	5	33%	右回転、糸切り痕、周辺鑑割り
5	環			7.0	ABEH	普通	5		底部、右回転、糸切り痕、周辺鑑割り

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
6	坏	17.0	(5.2)	(7.3)	BEF	良	5	35%	右回転、糸切り底、周辺露削り
7	蓋	19.7	5.0		BEFH	不良	7	25%	右回転
8	蓋	(18.8)			AEFH	良	6	20%	右回転
9	蓋	(17.0)	(3.8)		BEF	不良	7	30%	右回転
10	蓋	19.5	3.0		ABEF	良	5	30%	右回転、床下
11	片口蓋	4.5	(6.0)		EF	良	7		口縁部

第85図 35号住居跡出土遺物

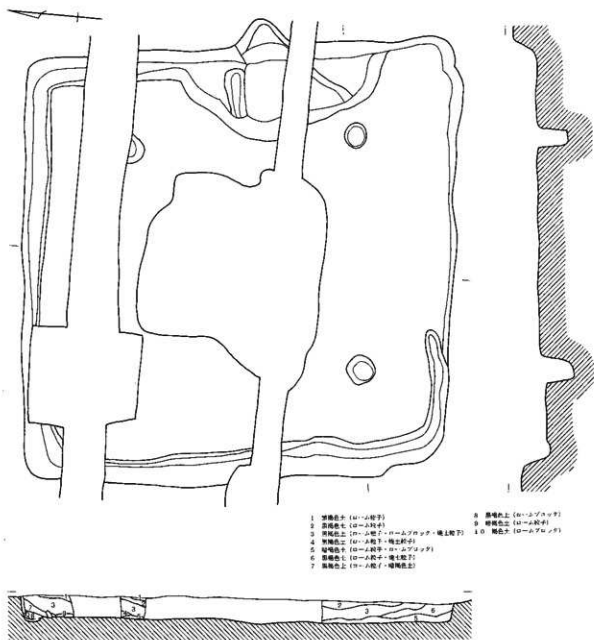


39号住居跡（第86～88図）

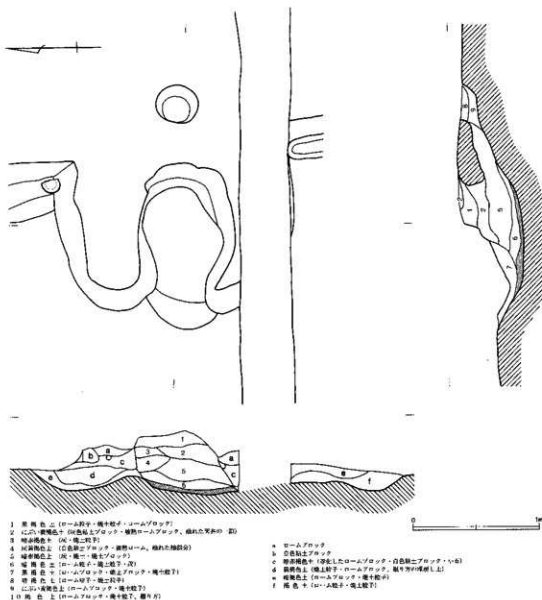
前回は南東コーナー部分だけの調査であったが、南北6.8m、東西6.7mのほぼ方形を呈する大型住居であることが判明した。主軸方向はN-86°-Eを指し、深さは最深部で40cmである。大部分が道路下に位置していたため攪乱が激しく、カマドの一部や柱穴が破壊されている。床面は、中央部が攪乱のため不明であるがほぼ水平で、壁溝は南東コーナーから南壁中央以外に

巡っている。柱穴は各コーナーに沿って4本穿たれているが、北側の2本は攪乱によって破壊され、深さなどは不明である。貯蔵穴はない。

カマドは東壁中央やや南よりに構築されているが、南側の袖部は攪乱をうけている。全長192cm、焚口幅50cmを測り、天井部が一部残存していた。袖部は白色粘土を芯としてロームを使用している。燃焼部には、灰



第87図 39号住居跡カマド (L=44.4m)

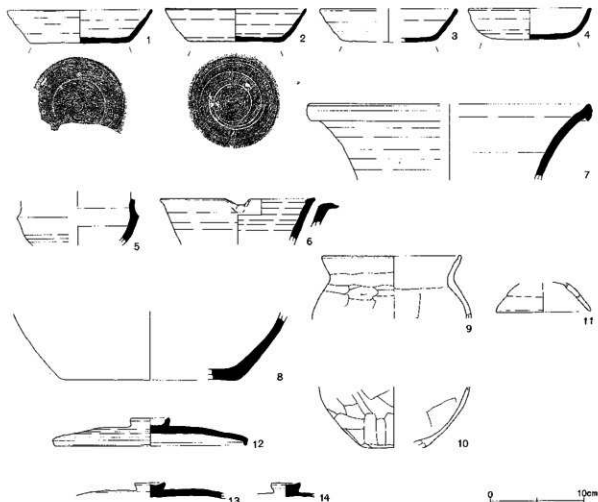


と焼土が多量に堆積し、床面より40cm程掘り込まれている。

出土遺物は、前回は調査面積も狭かったのでなかったが、今回の調査では佐波理模倣碗などが検出さ

れている。しかし、前述のように攪乱が多いため、出土位置の細かな特定は不可能である。5は佐波理模倣碗の胴部破片で、6は片口鉢の口縁部である。

第88図 39号住居跡出土遺物



第16表 39号住居跡出土土器観察表 (第88図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	15.4	3.4	10.4	BEFH	良	6	50%	ロクロ右回転、全面施割り
2	坏	15.0	3.4	9.6	BECH	良	5		右回転、全面施割り
3	坏	14.6	(3.5)	5.0	BDEH	良	6	25%	全面施割り、ロクロ右回転
4	坏	13.0	(3.3)	8.0	BDEH	良	6	25%	全面施割り、ロクロ右回転
5	碗				BDEH	良	7		体部、佐波理模倣
6	片口鉢	16.4	(4.8)		BDE	良	9		口縁部
7	甕	29.4	(8.0)		A~CEGH	良	9		口縁部
8	甕			19.0	ABDE	良	7		底部
9	甕	15.8			ADEF	普通	4		口縁部
10	甕			6.0	ADEF	普通	4		底部
11	台付甕			10.0	ABEFH	普通	4		台部
12	甕	20.2	2.9					20%	つまみ
13	甕								つまみ
14	甕								つまみ

56号住居跡（第89図）

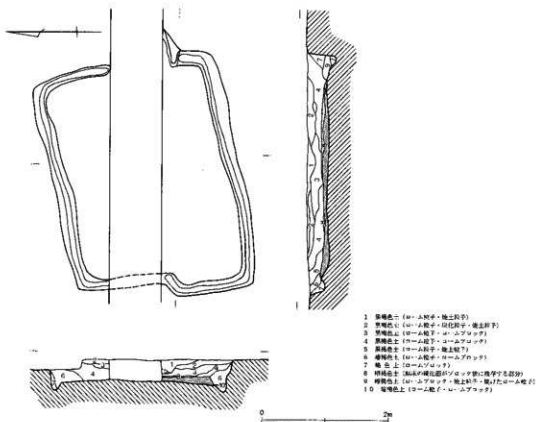
全体が市道下に位置するため、今回の調査で新たに発見された竪穴住居跡である。しかし、水道管が中央部を東西に走り、カマドと西壁が破壊されている。東西3.5～3.8m、南北2.9mで、主軸方向はN-78°-Eを指す。西壁は直線ではなく、南側がやや張り出すように突出しているようであるが、攪乱により明瞭ではない。深さは28cmで、床面はロームブロックを含んだ

貼床である。壁溝は全周する。

カマドは東壁南よりに構築されているが、大部分が水道管で破壊されている。柱穴や貯蔵穴はない。

出土遺物は少なく、土師器12片、須恵器5片で、いずれも細片であるため実測は不可能である。土師器環については、胎土や焼成から37号竪穴住居跡に近いと考えられる。

第89図 56号住居跡（L=44.6m）



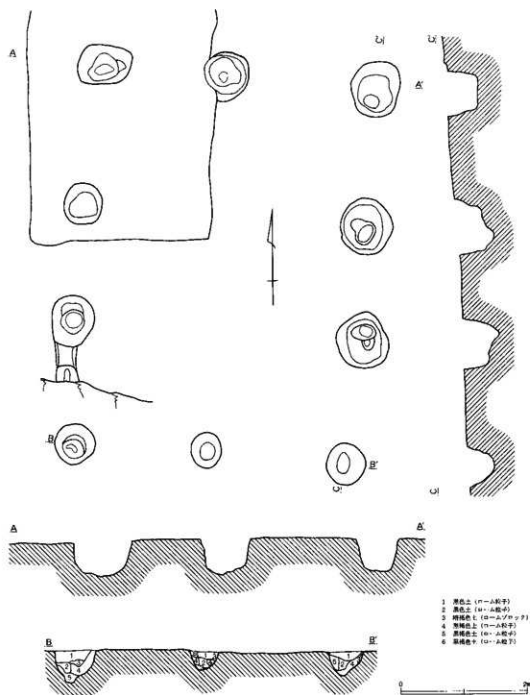
27号掘立柱建物跡（第90図）

今回の調査で南側梁行が検出され、全体の規模が判明した。主軸方向などには変化ないが、桁行3間、梁行2間で、規模は南北6.5m、東西5mを測る。西側桁行の南側に溝跡が見られるが、今回調査分では道路

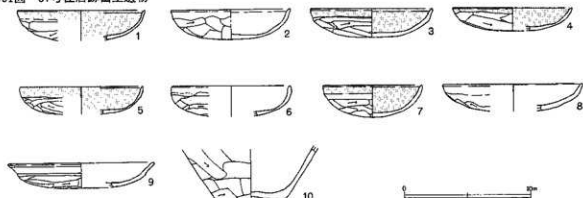
下であったため確認面が低く、削平され確認できなかった。

今回の調査では出土遺物はない。

第90図 27号掘立柱建物跡 (L=44.2m)



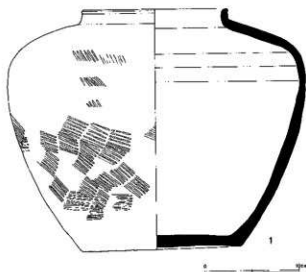
第91図 37号住居跡出土遺物



第17表 37号住居跡出土土器観察表 (第91図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	13.6	(3.2)		DEH	良	4	15%	赤彩
2	坏	12.4	3.2		CDE	良	3	50%	
3	坏	12.9	3.0		DEH	良	4	25%	赤彩
4	坏	12.8	2.5		ADEH	良	4	30%	赤彩
5	坏	13.0	2.9		ADE	良	4	20%	赤彩
6	坏	12.6	(3.2)		EDF	普通	4	25%	
7	坏	10.4	3.4		ADE	良	3	60%	赤彩
8	坏	14.8	2.9		ADE	良	4	18%	
9	皿	15.4	(2.6)		BCDE	良	3	20%	
10	甕			5.3	ADE	良	4	底部	

第92図 1号井戸出土土器



その他の出土遺物

崩落などの危険防止や調査の都合で最後まで残っていた、37号竪穴住居跡貼床下と1号井戸最下層の出土遺物について以下に述べる。

37号住居跡出土土器 (第91図)

全て貼床下から出土したもので、土師器坏が主体である。特に白色針状物質を含んだ焼成の良好なものが多い。

1号井戸出土土器 (第92図)

水が湧く最下層から出土した短頸壺で、前回報告分の遺物番号22と接合した。前回は口縁部破片であったが、接合の結果底部を含む8割ほどの個体となったため、改めて再実測したものである。

出土土器について

以上の土器を、前回検討した光山編年に当てはめると、35号竪穴住居跡はⅡ期～Ⅲ期1段階、39号竪穴住居跡はⅡ期、56号竪穴住居跡はⅠ期1段階に位置付けられよう。また、今回37号竪穴住居跡の貼床から土師器坏が新たに出土したが、これらは赤彩し白色針状物質を含み、堅緻で良好なつくりである。この種の坏は、

本遺跡や川越市霞ヶ関遺跡など入間郡・高麗郡を中心に分布しており、限定された地域・時期に特徴的である。焼成遺構も特定されつつあり(川越市東下川原遺跡)、時期的にもⅠ期1段階をやや遡る可能性が高い。今後時期の再検討とともに、供給先やその目的(供給遺跡の性格)などを検討する必要がある。

VI 調査の成果

1. 先土器時代

はじめに

1. 遺跡群の概観と立地

a) 柳戸遺跡・新山遺跡

b) 遺跡の立地

2. 細石器について

a) 細石核

はじめに

首都圏中央連絡自動車道建設に伴い、鶴ヶ島市内で5遺跡が発掘調査され、内4遺跡を本報告書に掲載した。

発掘調査の結果、先土器時代終末期の細石器及び尖頭器の資料が、柳戸遺跡・横田遺跡・新山遺跡・青柳遺跡から検出された。

1. 遺跡群の概観と立地

a) 柳戸遺跡・新山遺跡

柳戸遺跡と新山遺跡から、それぞれ3箇所の石器集中が、非常に接近して検出された。また、2遺跡間の石器集中の距離は、直線で約1440mである。横田遺跡は2遺跡の中間に位置し、距離的には柳戸遺跡に近い。また、向山遺跡は細石核等は検出されていないが、細石刃と思われる黒曜石の縦長剥片が出土している。

石器集中は、大谷川が僅かに蛇行する部分の右岸に位置し、河川との比高差はほとんど見られない。標高は柳戸遺跡が約39m、新山遺跡が約45mである。

b) 遺跡の立地

細石器の石器集中が、どのような地形に位置するか、報告書掲載の地図から、地形図にプロットしてみた(第93図)。縮尺を1/10,000に統一するため、報告書で述べる縮尺の地図上に、調査の範囲、石器集中の地点が明確に指められている遺跡に限られたため、該期の遺跡全体を網羅することはできなかった。しかし、武蔵野台地・相模野台地・下総台地の各台地の、細石器遺跡が密に分布する、地域の遺跡の傾向を見ることができたと思う。

b) 打面再生剥片

c) 石核調整剥片

d) 細石刃

3. 石器集中の規模

4. 黒曜石の産地推定について

おわりに

今まで、埼玉県内の細石器の遺跡は、川本町白草遺跡の削片系細石器石器群以外に、これと言った遺跡が無い状況であった。

今回の報告の成果を整理することによって、この地域の該期の様相を少しでも明かにできればと思う。

【下向山遺跡】 南小畔川の右岸に位置し、標高は約60mである。石器集中は、約60mの等高線が北西方向に、僅かに突き出た部分の先端に在り、河川との比高差は約1mである。遺物分布は、3箇所の石器集中に分けられるが、ナイフ形石器・尖頭器が出土している。ナイフ形石器は分かれそうであるが、尖頭器と細石器の関係に問題が残る。ここでは、石器集中1箇所としておく。

【清橋遺跡】 砂川郷の左岸に位置する。先土器時代の遺跡は、砂川郷右岸の所沢台地上に多く見られるが、左岸にはほとんど分布せず、特異な存在である。石器集中は、台地部縁辺に近い、低地部から検出された。標高は約94mで、砂川郷との比高差はほとんど無い。石器の出土層位は、暗黄褐色土への漸移層である。

石器は約10×8mの広い範囲から出土し、分布の濃淡から、a～cの3つのクラスター・小さなまとまりに分けられる。細石器と尖頭器が出土し、石材は黒曜石とチャートのまとまりに分かれるが、遺物分布を見る限り、分離できなかった。

【中砂遺跡】 遺跡は砂川堀の右岸、標高90～89mの緩い北側斜面に位置する。細石器の石器集中は、調査区の最も低い部分で、砂川堀に近く比高差はほとんどみられない。

尖頭器を有する第3号石器集中と近接するため、比田井氏は尖頭器と細石器の共伴する例として挙げている。しかし、低地に近いため、層位の堆積が薄く、切片等も出土するなど、一時期とするには問題が多い。

【白草遺跡】 荒川支流の吉野川右岸に位置する。標高は約62mで、水田面との比高差はほとんど無い。石器集中は、水田面との境目に、第1ユニットが位置し、その周辺に第2～5ユニットが配する。

遺跡の景観は、荒川の低地から、台地の上がり際で、水田が緩やかに持ち上がるような、開放的な感じである。

石器は珪質頁岩を石材とする、切片系の細石器で、群馬県東部無遺跡、千葉県木戸場遺跡A地点、茨城県後野遺跡と対比される。

【上草柳遺跡】 遺跡は、引上川の源流の水源地を囲むように、第1～4地点が分布し、第1地点と第3地点から細石器が検出されている。

第1地点の標高は、約63mで支谷との比高差は約5mである。石器集中は等高線に沿うように、近接して2箇所見つかっている。両石器集中に小規模の礫群が伴う。

第3地点の標高は、約65mで支谷との比高差は約15mである。石器集中は1箇所、小規模な礫群を伴う。

【中村遺跡】 遺跡は境川の右岸の台地上に位置する。標高は約85m、低地との比高差は約10m程度である。

石器集中は、小さな谷状となる部分の基部から、1箇所検出されている。

【大林遺跡】 遺跡は、西側に手繰川の支流末端の支谷、東側に勝田川の支流末端の支谷が挟まる、分水嶺となっている。標高は約25m、支谷との比高差は約2mである。

石器集中は、台地上の平坦面に4箇所分散している。

【大割遺跡】 遺跡は、手繰川とその支流に挟まれた

台地上に位置する。標高は約26m、水田面との比高差は約10mである。

石器集中は、台地のやや奥まった所に、3箇所近接して並んでいる。

【木戸場遺跡A地点】 遺跡は、高崎川支流から派生する小支谷に面する、台地上に位置する。標高は約34m、水田面との比高差は約14mである。

石器集中は台地縁辺部に、2つが近接して並んでいる。石器は白草遺跡と同様、珪質頁岩を石材とした切片系細石器石器群である。

以上、細石器の遺跡（石器集中）の立地を見たが、次に、幾つか気になった点を整理する。

武蔵野台地東部は、柳戸・新山遺跡と、所沢市内の中砂・清橋遺跡等は共に、小河川が僅かに湾曲する部分で、河川との比高差はほとんど見られない。石器集中が1～3箇所程度が近接する、規模の小さな遺跡が、小河川の流域に沿って点在する傾向がある。清橋遺跡は低地部、下里本邑遺跡は河成低地部礫床から検出されており、本地域における該期遺跡は、低い部分を好んで選地していることが窺える。

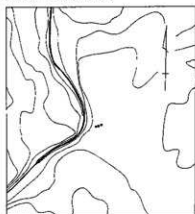
白草遺跡は、切片系細石器石器群をもつ遺跡で、荒川低地に面する低位台地の緩斜面に在り、一見上記遺跡とは異なるようにも思われる。がしかし、台地の中部と、縁辺の違いとして捉えると、違いよりか共通する部分のほうが多い。

相模野台地は、大和市周辺に良好な遺跡が密集する。遺跡（石器集中）の立地は、台地の縁辺部に多く見られるが、水田面と標高差が10m程度在り、武蔵野台地東部のように、特に低い部分を好んでいる様相はない。

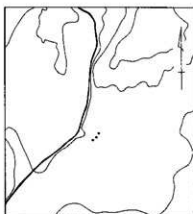
遺跡の規模は、船底系の石核を有する遺跡が、規模的に大きいものが目に付き、角柱状の細石核を有する遺跡は、武蔵野台地と比べると一回り大きい程度である。

下総台地の遺跡は、他の地域と比べ、角柱状の細石核を有する遺跡で、規模の大きいものが目立つ。大林・大割遺跡は、台地上の平坦部の広い範囲から、石器集中が検出されている。台地上と水田面の比高差は10m

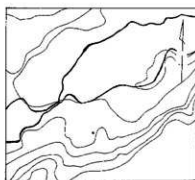
第93図 遺跡の立地



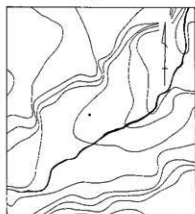
御所遺跡



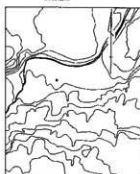
野山遺跡



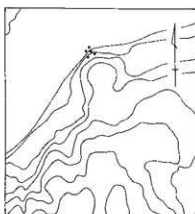
下内山遺跡



神保遺跡



宇砂遺跡



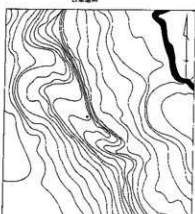
白鳥遺跡



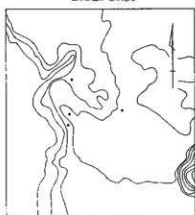
上野原遺跡 舊い池元



上野原遺跡 新い池元



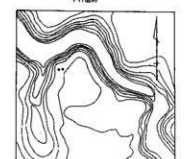
平井遺跡



大森遺跡



大野遺跡



八幡宮遺跡

程度在り、相模野台地同様、該期が特に低い部を好んでいる様相は見られない。

2. 細石器について

a) 細石核

細石核は、柳戸遺跡から8点、新山遺跡から6点出土した。武蔵野台地で、この様に近接する遺跡から、細石核がまとまって検出されるのは希である。

細石核の形態から4つに分類することができる。

1類：柳戸遺跡から出土している。作業面は正面に限定されている。形状は逆三角形を呈する2～4と、正方形に近い1・5がある。打面は基本的に単剥離面によって作られ、細石刃の作出過程で打面調整が施される。2に接合する打面再生剥片(15)を見ると、最終的に打面調整が、打面全体に施されるようである。打面と作業面の角度は直角に近いが、打面再生を施す過程で鋭角となるもの(2)が見られる。それは、作業面の長さの維持と関係しているようである。

石核の素材は、小形の角礫(1・2)と厚手の剥片(3～5)に分かれるが、いずれも、単剥離によって打面を作った後、石核面調整をあまり施さず、細石刃剥片剥離作業を行っているようで、1がその初期段階と思われる。

2類：新山遺跡から出土している。作業面は正面に限定されている。形状は不整形長方形である。打面は細かい複剥離面で構成され、側面整形等の石核調整剥離は見られない。打面と作業面の角度は1類に比べて、やや鋭角である。横断面は原石面を底面とすると、レンズ状になる。

整理の初期では、厚手の剥片を素材とし、主要剥離面を作業面としたのではないかと想定した。しかし、6を初期段階の石核と考えると、小形の角礫に、打面を作るために、細かい剥離を斜めに施し、細石刃剥片剥離作業を開始した可能性が高いと考える。打面の維持には、打面再生を行わず、打面調整を繰り返すことによって行い、打面は小さく、剥離角がやや鋭角になっ

ていったものと考えられる。

3類：柳戸遺跡から出土している。作業面は、正面の幅狭面から側面に施される。打面は正面から見ると縦長になり、剥片剥離作業の進行と共に、方形に近くなって行く。

9は作業面の切り合い関係から、細石刃剥片剥離過程を2段階に分けることができる。まず、右側面に細石刃剥片剥離が施され、後に正面から左側面にかけて細石刃が割がされている。10は右側面の細石刃剥片剥離と、正面の剥離に段階差が認められる。この様に、複数の作業面が認められる場合、その作業工程に段階が認められる場合が多い。

4類：欠損品を一括した。柳戸遺跡・新山遺跡から出土している。

11は柳戸遺跡から検出された。極状剥離面を有する不整形剥片で、作業面再生剥片の可能性もある。

12～14は新山遺跡から検出された。いずれも、細石核の破損品で、12は打面部、13は裏面を大きく欠損する。現況から復元する限り、2類とは異なる形態の細石核となるようで、16・17の打面再生剥片と関連すると思われる。

以上2遺跡から出土した、細石核14点を4つに分類した。全体の傾向として、作業面は単設離面で、側面の石核調整剥離面も打面方向からの剥離で構成されている。例外としては、4類とした、11と12の一部に底面からの剥離面が見られが、いずれも欠損品であるため、今後の検討が必要である。

1・3類が柳戸遺跡、2類が新山遺跡に偏るのは、遺跡での癖など、当然の結果かもしれないが、黒曜石の産地推定と各類型を関連させると、興味深い傾向を示す。

第94図 柳戸・新山遺跡出土の細石器



b) 打面再生剥片

打面再生剥片は、柳戸遺跡から1点、新山遺跡から2点出土した。

15は柳戸遺跡出土から出土している。上面に作業面方向からの細かい剥離(打面調整剥離)が見られ、対峙方向に原石面を残す。打面は小さく、細石核と接合していなければ、打面再生剥片と判断するのが難しい。縦断面は凸レンズ状である。

細石核と打面再生剥片の接合状況を観ると、打面調整を繰り返したため、打面が凸状に膨らみ、作業に支障が生じ、打面再生を行ったものと思われる。その際、細石核を輪切状に打面再生すると、作業面の長さが減少するので、それを最小限にとめるため、作業面方向から表面に向けて、斜めに剥離を施したと考えられる。細石核の打面角はやや鋭角になるが、作業そのものには支障が無いようで、打面再生の後に何枚か、細石刃を剥離している。

16と17は新山遺跡から出土している。

16は上面に全周からの剥離(打面調整剥離)が入念に施されている。打点は、細石核の裏面方向から施され、縦断面は作業面に向かって厚くなっている。そのため、細石核の作業面が観察できる。

17は基本的に15と同じで、上面の作業面に接する部分に細かい剥離(打面調整剥離)が見られ、細石核の裏面部分に原石面を残している。剥離は作業面方向からの加撃によって剥がされている。縦断面は厚い凸レンズ状となるが、打面(作業面)は薄くなっている。

以上、柳戸・新山遺跡出土の打面再生剥片を見てきたが、次ぎに、関東地方出土の打面再生剥片と比較してみる。

まず、加撃方向と断面形を観察項目とし、表にまとめた。

- 加撃方向**
- I : 作業面からの加撃
 - II・IV : 作業面の右及び左側面からの加撃
 - III : 裏面から作業面方向への加撃

第95図 打面再生剥片



断面形

a : 作業面が薄く、裏面に向かって厚くなる

b : 輪切り状となる

c : 裏面が薄く、作業面に向かって厚くなる

埼玉・神奈川・千葉の3県で、12遺跡25点の打面再生剥片を抽出してきた。

加撃方向はIが25点中14点と、全体の半数以上を占め、IIIが6点、II・IVが5点と近い値を示し、合わせると44%になる。

断面形はaが7点、bが8点、cが10点と、何れも近い点数である。

では、加撃方向と断面形の関係を見ると、Iはaが6点、bが5点、cが3点で、aとbの数が等しく、cが少ない傾向を示す。IIはaが1点、bが2点、cが3点で、aからcに向かって、やや増える傾向が窺える。IIIはaが0点、bが1点、cが4点と、Iと対照的にaとbが少なく、cが多くを占めている。以上、点数が少ないため、資料的制約があるが、一定の傾向は見ることができる。

打面再生剥片の接合は7例が観察された。

柳戸遺跡(I a)は、再生後に打面調整があまり行われておらず、細石刃を剥離しているが、程無く、作業を終了している。

かしわ台駅前遺跡は、2枚の文化層から、合計5点の打面再生剥片が出土し、それぞれの文化層で接合例が見られた。I文化層の打面再生剥片(II c)は、石核整形剥片との接合で、石核の詳しい状況は不明であるが、整った細石刃を剥離した痕跡は見られない。II文化層の打面再生剥片(IV a)は、最終段階の打面再生で、本剥片を剥離した後に細石刃は剥離していない。本資料は、細石核に7本の細石刃が接合するもので、

作業の初期段階の打面と、残核の打面との間に差が大きく、複数回の打面再生（本文化層出土の他の2点とともに、同一母岩であり、打面再生が繰り返行われた結果と指摘している）が行われていることを示す、良好な資料である。また、初期の細石刃の長さが3.9cmであるのに対し、最終段階の細石刃の長さが2.1cmと小形になっている。作業面を見る限り、細石刃作作業の続行に、支障が出るような乱れがある訳でないのに、この時点で細石刃の作を断念した理由として「細石刃として必要な長さ」が維持できなくなったためと思われる。

上草柳遺跡第1地点（I a）は、打面再生剥片と作業面の差から、複数の細石刃を作出したことが窺える。打面と作業面の剥離角は、再生前はほぼ直角であるのに対し、再生後は鋭角になっている。打面調整は、再生の前後とも施されていない。

上草柳遺跡第3地点では、2点の打面再生剥片が細石核と接合している。まず、黒曜石の打面再生剥片（III c）は、剥離した時点で細石核が2つに大きく破損し、そのまま断念したものと思われる。流紋岩の打面再生剥片（I a）は、2つに破損したものが接合しており、再生前の打面調整の砕片が上面に接合している。細石核との接合では、打面再生と作業面との差から、再生後に複数枚の細石刃が剥離されていることが窺える。

打面は再生後あまり調整剥離を施していない。また、打面と作業面の剥離角は、再生前がほぼ直角であるのに対し、再生後はかなり鋭角になっている。細石刃剥片剥離作業は、最終的に下面を打面とし、細石刃を剥離している。

大林遺跡（IV a）は、凝灰岩の打面再生剥片で、細石核と接合している。打面再生と作業面の差から、再生後に細石刃が剥離されていることが窺える。しかし、再生前に打面調整が施されているのに対し、再生後は打面調整を施していない。この点から、再生後は、多くの細石刃を剥離していないようである。打面と作業面の剥離角は、再生前がほぼ直角であったが、再生後はやや鋭角になっている。

以上、打面再生剥片に関し、幾つかの視点で観察した。まず、加撃方向及び断面形との関係は、I の占める割合が高く、断面形は数の偏りは少ないが、I と a、III と c の間に有機的関連が見られた。

また、細石器との接合例を、若干詳しく観察すると、柳戸遺跡の場合と同様打面再生によって、打面と作業面の剥離角が鋭角になるものが多く、作業面の長さの維持—細石刃の長さの維持—に主眼をおいて、打面再生を行っている為であると考えられる。それ以外の例は少なく具体的な検討はできないが、極端な c の場合、細石核の破損等に繋がることもあったと思われる。

県名	遺跡名	石器集中	加撃方向	断面	石材	接合	備考
埼玉県	柳戸遺跡		I	a	黒曜石	細石核	上面に原石面を残す
"	新山遺跡	1	I	a	黒曜石		上面に原石面を残す
"	"	2	III	c	黒曜石		上面の全面に打面調整
"	清橋遺跡		II	c	黒曜石		上面の剥離方向は主要剥離面と異なる
"	池田遺跡		I	b	黒曜石		上面の剥離面は主要剥離面と同一方向、打面調整は入念
神奈川県	かしわ台駅前遺跡	I-4	II	c	黒曜石	細石核	上面の全面に打面調整
"	"	I-5	III	b	黒曜石		上面に原石面を残す
"	"	II-1	IV	b	黒曜石	細石核	上面の全面に打面調整
"	"	II-2	I	c	黒曜石		上面は主要剥離面を180°逆方向からの早剥離面、打面調整は見られない
"	"	II-3	I	c	黒曜石		上面に原石面を残す
"	"	III-4	I	c	黒曜石		上面の全面に打面調整
"	"	III-5	III	b	黒曜石		上面に原石面を残す
"	月見野上野遺跡		I	a	黒曜石		長軸の両端に作業面、上面の全面に打面調整
"	上草柳遺跡第1地点	1	I	a	黒曜石	細石核	上面の全面に打面調整
"	上草柳遺跡第3地点	1	III	c	黒曜石	細石核	上面全体に打面調整
"	"	2	I	a	流紋岩	2点欠、細石核	上面全面に打面調整
"	台通遺跡	1	II	c	黒曜石		欠損?
"	"	2	I	a	黒曜石		上面の全面に打面調整
"	中村遺跡		I	b	黒曜石		上面の全面に打面調整
"	城山遺跡	1	I	c	黒曜石		上面の全面に打面調整
"	"	2	III	c	黒曜石		上面の全面に打面調整

県名	遺跡名	石器集中	加撃方向	断面	石材	接合	備考
神奈川県	城山遺跡	3	IV	b	黒曜石		上面の全面に打面調整
"	"	4	III	c	黒曜石		上面は作業面左方向からの平削断面、打面調整は見られない
"	"	5	I	b	黒曜石		上面は主要剥離面と同一方向、打面調整は見られない
千葉県	大林遺跡	1	IV	a	凝灰岩	細石核	上面の全面に打面調整
"	"	2	I	b	珪質頁岩		上面の一部に原石面を残す
"	"	3	I	b	凝灰岩		上面の一部に原石面を残す

c) 石核調整剥離

柳戸・新山遺跡から出土した剥片類は、正面に原石面を残すものと、原石面をほとんど残さないものに、本文中で大別した。前者をa類、後者をb類とする。

a類：18～20（柳戸遺跡）、22～25（新山遺跡）。原石面が正面の6割り以上を占めるものがほとんどである。原石面に稜線が見られ、横断面が厚手の三角形になるもの（18・20・25）は、角礫のコーナー部分を削ぎ落とすように、剥離したと考えられる。打面は原石面を直接利用した18・22・23と、剥離面の19・21・24がある。正面の剥離面は、主要剥離面より古い剥離面が多く、加撃の方向は一定の傾向は見られず、どちらかと言えば、求心的である。

b類：21は柳戸遺跡、26は新山遺跡である。原石面をほとんど残さない剥片である。本類の剥片は、両遺跡

とも1・2点と非常に少ない。21は正面の連続する剥離面が、左側面を打面としており、石核作業面再生剥片と思われる。26は正面に残る剥離面の加撃方向が、主要剥離面と90°異なっており、左側面を打面とした細かい剥離面が多く観察できる。

以上、細石器に関連すると思われる、黒曜石の剥片類をa・b類の2つに分けた。a類とb類の関連に関しては、石核整形の進行状況で、初期の段階と、より進んだ段階の剥片の差として、捉えることもできる。がしかし、b類に関しては、想定される原石の大きさが小さい点、極端に少ない点等、細石核の作成と異なる目的・削器等の製作一で、遺跡に持ち込まれた可能性も考えられる。

d) 細石刃

細石刃は、柳戸遺跡から41点、新山遺跡から56点出土した。

【部位の組成】

柳戸遺跡は、完形が19.5%、中間部が58.5%でその合計が78%を占めており、頭部は14.6%、尾部は7.3%となる。

新山遺跡は、完形が21%、中間部が53.6%で、合計すると74.6%を占める。頭部は16%、尾部は8.9%である。

両遺跡とも各部位の比率は、中間部が最も多く、次いで完形と頭部が近い値を指し、尾部の数が最も少ないという傾向を示している。

【完形】

柳戸遺跡：8点出土

完形の細石刃は、両側縁が並行し形状が整った1

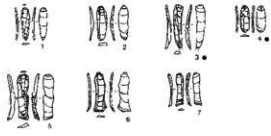
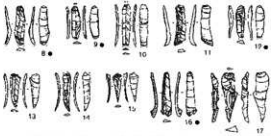
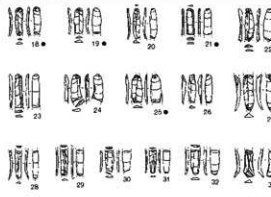
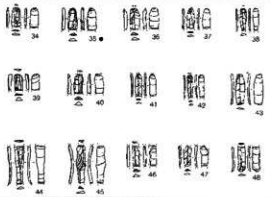
～4と、原石面を一部に残す5・6があり、横断面は片側が厚くなる7が見られる。

長さは最大3.0cm、最小1.2cm、平均2.2cmで、最大/最小は2.5。幅は最大0.9cm、最小0.6cm、平均0.7cmで、最大/最小は1.5。厚さは最大0.5cm、最小0.15cm、平均0.3cmで、最大/最小は3.3と、長さ・幅と比べ大きい。これは、反ったものがあるためと、1・2・4のように形状の整ったものと、5・6のように原石面を残すものによって、数値が大きく異なるためである。重量は最大5.3g、最小0.1g、平均0.25gで、最大/最小は5.3である。

新山遺跡：12点出土

細石刃は、形状の整った8～14と、下端部が極端に窄まる15、原石面を残す16と、稜上剥離がある17に分けられる。17は稜付細石刃と思われる。

第96図 神戸・新山遺跡出土の細石刀

	柳戸遺跡	新山遺跡
完 形		
中 間 部		
頭 部		
尾 部		

● 縦溝の有無があるもの

長さは最大3.3cm、最小1.4cm、平均2.4cmで、最大／最小は2.4。幅は最大1.1cm、最小0.5cm、平均0.65cmで最大／最小は2.2。厚さは最大0.5cm、最小0.2cm、平均0.3cmで、最大／最小は2.5である。長さ・幅・厚さの最大と最小の比の値は近似する。重量は最大0.95g、最小0.1g、平均0.3gで、最大／最小は9.5である。

【中間部】

中間部と分類したものは、頭部、尾部又は両端を欠くものを一括した。

柳戸遺跡：24点出土

長さは最大2.3cm、最小0.5cm、平均1.6cmで最大／最小は4.6。幅は最大0.9cm、最小0.4cm、平均0.55cmで最大／最小は2.3。厚さは最大0.4cm、最小0.1cm、平均0.21cmで最大／最小は4である。長さ・厚さの最大／最小比が4に近いのに対し、幅は2.3と安定した値を示す。

重量は最大0.42g、最小0.02g、平均0.16gで最大／最小は21と個体差が大きい。

新山遺跡：30点出土

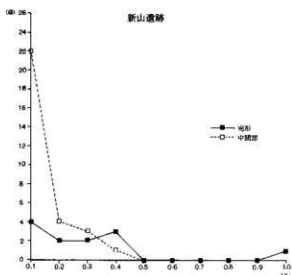
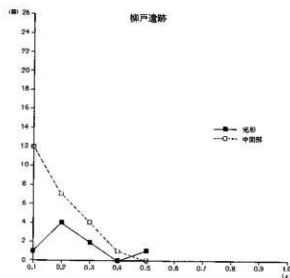
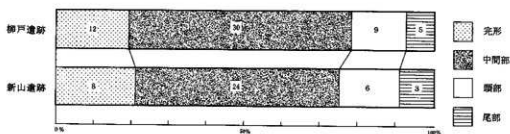
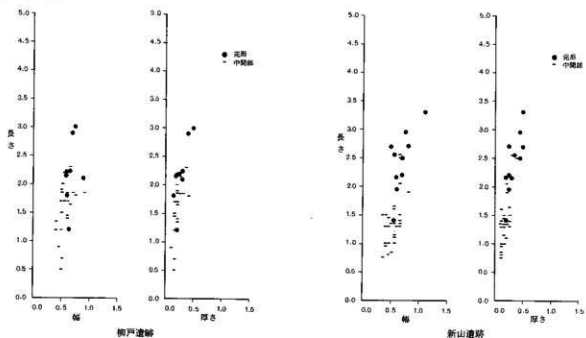
長さは最大2.55cm、最小0.75cm、平均1.4cmで最大／最小は3.4。幅は最大0.8cm、最小0.35cm、平均0.5cmで最大／最小は2.3。厚さは最大0.4cm、最小0.1cm、平均0.17cmで最大／最小は4で、柳戸遺跡同様長さ・厚さの最大／最小比と比べ、幅は安定した数値を示す。重量は最大0.37g、最小0.02g、平均0.12gで最大／最小は18.5と個体差が大きい。

以上、完形・中間部の計測値である。

長さ・幅・厚さの相関グラフ

柳戸遺跡 完形の長さは、1.2～3cmであるが、3cm近いものと、1.2cmのものを除くと2cm前後にまとまる。長幅比は1/2から1/4の範囲に収まる。一方、中間

第97図 細石刃の大きさ



部の長さは、0.5～2.3cmと完形より一回り小さく、広い範囲に分散する。長幅比は1/3を中心に、1/1～1/4となる。

新山遺跡 完形の長さは、1.4～3.3cmで最大と最小のものを除いても、2～3cmの範囲に分散する。長幅比は1/3～1/4にはほとんど収まっている。中間部の長さは0.75～2.25cmで、2cm前後の5点を除くと、0.8～1.5cmの範囲によくまとまり、完形の最小のものと重なる。長幅比は1/2～1/3に収まる。

重量と個数の関係

柳戸遺跡 完形は平均2.5gで、0.2gを中心に正規分布を示す。中間部は0.1gをピークに、重量が増すごとに、徐々に点数が減少する。

新山遺跡 完形は平均0.29gであるが、0.1～0.4gに平均して分布し、1g近いものが1点ある。中間部は0.1gをピークに、一気に点数が減少する。

【頭部】

柳戸遺跡：6点出土

長さは最大1.25cm、最小0.65cm、平均0.92cmで最大/最小は1.9。幅は最大0.7cm、最小0.6cm、平均0.64cmで最大/最小は1.2。厚さは最大0.2cm、最小0.1cm、平均0.17cmで最大/最小は2。重量は最大0.15g、最小0.06g、平均0.1gで最大/最小は2.5である。

新山遺跡：9点出土

3. 石器集中の規模

関東地方における、該期の石器集中の規模を比較する。検討した資料は、埼玉県・東京都・神奈川県・千葉県
の18遺跡を対象とし、各報告書掲載の石器集中（各報告書でブロック・ユニットと呼称されているが、ここでは石器集中として統一した）区分に基づいた75箇所である。

各遺跡の石器集中の数は、平均すると4.2箇所であるが、月見野遺跡群上野遺跡の28箇所と長堀北遺跡の9箇所が突出しており、それを除くと、平均2.4箇所と非常に少ない。また、前2遺跡を見ると、他遺跡と比較し、かなり細かい区分をしている。

長さは最大0.95cm、最小0.4cm、平均0.7cmで最大/最小は2.4。幅は最大0.7cm、最小0.4cm、平均0.54cmで最大/最小は1.75。厚さは最大0.2cm、最小0.1cm、平均0.13cmで最大/最小は2。重量は最大0.1g、最小0.02g、平均0.05gで最大/最小は5である。

【尾部】

柳戸遺跡：3点出土

長さは最大1.3cm、最小1.0cm、平均1.13cmで最大/最小は1.3。幅は最大0.5cm、最小0.4cm、平均0.45cmで最大/最小は1.25。厚さは最大0.2cm、最小0.1cm、平均0.15cmで最大/最小は2。重量は最大0.09g、最小0.04g、平均0.06gで最大/最小は2.25である。

新山遺跡：5点出土

長さは最大0.95cm、最小0.55cm、平均0.77cmで最大/最小は1.7。幅は最大0.5cm、最小0.25cm、平均0.39cmで最大/最小は2。厚さは最大0.15cm、最小0.05cm、平均0.1cmで最大/最小は3。重量は最大0.05g、最小0.02g、平均0.04gで最大/最小は2.5である。

微細な剝離痕

柳戸遺跡は、完形に2点、中間部に5点、頭部に1点観察できる。

新山遺跡は完形に4点、中間部に1点観察できる。微細な剝離痕が観察できる細石刃は、16・33を除くと、形状の整った、反りの少ないものが目につく。

石器集中の面積は、報告書の区分に従い、遺物分布の範囲を線で囲み、プランメーターによって計測した。集中の区分及び範囲線の引き方は、必ずしも、各遺跡において統一された基準でないが、ある程度の傾向は捉えられると考える。

面積の平均は42.1㎡、最大は大林遺跡の266.4㎡である。前記同様に月見野上野・中堀北遺跡を除くと、平均が74.4㎡と大きくなる。

次に、ナイフ形石器の石器集中と比較すると、山下（1990年）の関東地方の分析では、平均が11.5㎡と、かなり小振りて、該期の1/4または1/6の規模である。

また、最大は155m²で同じく一回り小さい。

石器集中に小規模な礫群が伴う例が、神奈川県の中

遺跡名	集中	面積	状況
柳戸遺跡	a	52.7	散漫
"	b	166.1	やや密集
"	c	163.4	散漫
新山遺跡	a	84.2	密集
"	b	50.4	散漫
"	c	114.3	散漫
下向山遺跡	II期	13.7	散漫
清橋遺跡	a	3.1	ほぼ2個体
"	b	33.3	密集
"	c	8.0	密集：細石核と尖頭器
中砂遺跡		58.8	やや密集
白草遺跡	1	88.0	密集：遺物は多い
"	2	96.0	散漫：集中1に近接
"	3	27.5	散漫
"	4	15.6	散漫
"	5	1.2	散漫
報恩寺遺跡		68.4	幾つか密集部に分かれる
かしわ台駅前遺跡	I文	22.0	密集
"	II文	42.8	密集：接合が多い
月見野上野遺跡	I-1	5.5	散漫
"	I-2	20.9	密集：石器が多い
"	I-3	3.6	散漫
"	I-4	2.1	散漫
"	I-5	0.5	散漫
"	I-6	9.9	散漫
"	I-7	1.1	散漫
"	II-8	6.2	散漫
"	II-9	17.9	散漫
"	II-10	7.1	散漫
"	II-11	8.4	散漫
"	II-12	4.3	散漫
"	II-13	4.1	散漫
"	II-14	7.8	散漫
"	II-15	14.7	散漫
"	II-16	26.9	密集
"	II-17	10.0	やや密集
"	II-18	10.1	密集
"	II-19	13.1	散漫
"	II-20	1.8	散漫

心に散見することができる。

遺跡名	集中	面積	状況
月見野上野遺跡	II-21	2.3	散漫
"	II-22	1.1	散漫
"	II-23	9.5	散漫
"	II-24	3.2	散漫
"	III-25	14.9	密集：25・26は近接し、緊密な接合関係
"	III-26	10.1	
"	III-27	11.8	
"	III-28	1.0	散漫
中村遺跡		35.7	密集：礫群を伴う
台遺跡	1	259.3	散漫
"	2	227.0	密集
上草柳遺跡第1地点	A	28.2	密集：尖頭器・礫群を伴う
"	B	35.5	密集：尖頭器・礫群を伴う
上草柳遺跡第3地点		54.6	密集
下鶴岡長塚遺跡		84.4	密集：礫群を伴う
風間遺跡	1	11.2	散漫：礫群を伴う
"	2	9.6	密集：礫群を伴う
"	3	89.9	密集：礫群を伴う
長堀北遺跡	1	9.2	密集：削片・尖頭器
"	2	4.9	密集：削片・尖頭器
"	3	12.8	密集：細石核・尖頭器
"	4	12.4	密集：細石核
"	5	7.8	散漫：尖頭器
"	6	0.1	2点
"	7	28.0	散漫：尖頭器
"	8	11.5	散漫
"	9	9.9	散漫
大林遺跡	1	266.4	密集：細石核多数
"	2	17.1	散漫
"	3	136.8	散漫
"	4	14.4	散漫
大割遺跡	1	70.1	やや密集
"	2	199.8	やや密集
"	3	43.3	やや密集
木戸場遺跡A地点	1	52.4	やや密集
"	2	83.2	散漫

4. 黒曜石の産地推定について

蛍光X線による科学分析の結果、柳戸遺跡と新山遺跡の黒曜石は、明瞭に分かれるとしている。新山遺跡は信州系、柳戸遺跡は信州系・神津島等と異なる組成を示している。

細石核の項で行った分類と、クラスター分析によるグループに関し、若干のコメントをする。柳戸遺跡は1類の細石核が、3・4・5グループに分れ、3類は4グループに収まっている。新山遺跡は2・3類の細石核

が、全て1グループに含まれる。

打面再生剥片は、柳戸遺跡が5グループ、新山遺跡は1グループと4グループに分れた。

以上、空間的・時間的に近接する2遺跡で、用いられている黒曜石の産地が、明瞭に分れたことは、細石核の形態の違いと合わせ、小規模な遺跡（集団の規模、又は時間的）が、一定の範囲内で活発に動いていた（単数・複数）ことが窺える。

おわりに

柳戸遺跡と新山遺跡から検出された、細石器に関し、問題点を若干整理した。本地域における該期遺跡群の

中心的存在の、横田遺跡が現在整理中（1996年刊行）であるため、以上の検討は先走りの観もあるが、本報

告書作成段階での問題点として述べてみた。

埼玉県の該期遺跡の数は、水村（1988）によってまとめられ、数的には東京・神奈川・千葉等と遜色はないが、いざ内容となると、発掘での良好な資料に恵まれず、貧弱と言わざるおえない状況であった。しかし、

近年、白草遺跡の報告書刊行、関東道関連遺跡等の整理によって、若干ではあるが、資料の提示ができてきたと考える。今後は、より具体的な課題を、整理する必要を痛感する。

引用・参考文献

- 麻生順司 1988 『台山遺跡発掘調査報告書』台山遺跡発掘調査団
- 安藤政雄 1979 『日本の細石杖』『戦台史学 第47号』戦台史学会
- 岡本健一 1993 『谷津・二反田・下山山』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第131集
- 織笠 昭 1983 『細石刀の形態的一考察』『人間・遺跡・遺物—わが考古学論1—』文獻出版
- 織笠 昭 1992 『南関東における西海技法の受容と変容』『人間・遺跡・遺物—わが考古学論2—』発掘者談話会
- 織笠 昭 1984 『細石器文化組成論』『戦台史学 第60号』戦台史学会
- 川口 潤 1993 『白草遺跡Ⅰ・北篠場遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第129集
- 栗島義明 1993 『細石刀文化と石材環境』『細石刀文化研究の新たな展開Ⅱ—細石刀文化研究の諸問題—』佐久考古学会・ハヶ岳旧石器研究グループ
- 小池 聡 1991 『長堀北遺跡』大和市教育委員会
- 白石浩之 1992 『細石器文化の研究—西南日本の細石器文化について—』『人間・遺跡・遺物—わが考古学論2—』発掘者談話会
- 砂田佳弘 1986 『代官山遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 11
- 竹岡俊樹 1989 『石器研究法』言叢社
- 田中英司 1992 『もうひとつの製作工程—泉福寺溝穴の細石器—』『人間・遺跡・遺物—わが考古学論2—』発掘者談話会
- 田中正夫・西井幸雄他 1994 『清橋遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第142集
- 田村 隆 1989 『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書1—佐倉市御塚山・大林・大堰・西野・芋窪遺跡—』千葉県文化財センター
- 堤 隆 1984 『一般国道245号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』大和市教育委員会
- 堤 隆 1984 『一般国道245号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』大和市教育委員会
- 堤 隆 1986 『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』大和市教育委員会
- 長沢邦夫・中三川昇・萩上由美子 1987 『中村遺跡』中村遺跡発掘調査団
- 中村喜代重 1979 『上和田城山』大和市教育委員会
- 橋本勝雄 1993 『略説—日本細石文化研究の現状と課題』『史観 第24号』史観同人
- 新座市教育委員会 1976 『池田遺跡発掘調査報告書』新座市埋蔵文化財報告書第Ⅱ集
- 西井幸雄 1993 『南関東の細石器文化』『細石刀文化研究の新たな展開Ⅰ—列島諸地域における細石刀文化の機軸—』佐久考古学会・ハヶ岳旧石器研究グループ
- 西井幸雄 1986 『中砂遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第60集
- 水村孝行 1988 『埼玉の細石刀文化に関する覚書』『埼玉県立博物館紀要—15—』埼玉県立博物館
- 矢戸三男他 1987 『佐倉市向山谷津・明代古・木戸場・古内遺跡』千葉県文化財センター
- 山下秀樹 1990 『ナイフ形石器文化後半期の遺跡の規模』『朱雀 第3集』京都文化博物館研究紀要
- 渡辺修一 1991 『四街道市内黒田遺跡群』千葉県文化財センター

2. 縄文時代の出土土器について

本報告では柳戸遺跡、向山遺跡、青柳遺跡、新山遺跡を収録しており、土器群もそれぞれ異なる時期のものが出土している。それぞれ代表的な土器群を第98図に集成し、出土量が多い柳戸遺跡を中心として、縄文時代の土器様相を概括して置きたい。

草創期

草創期の土器群は柳戸遺跡から隆起線文系土器群が2点出土している。1点は細隆起線文土器で、もう1点は微隆起線文土器である。柳戸遺跡1は口縁部近くの破片と思われる、口唇下に2～3条の細隆起線文を巡らし、以下に幅広の文様帯を構成するものと思われる。小破片で全体構成は把握されないが、神奈川県上野遺跡第1地点からの出土土器（小池1986）に文様帯構成が類似するものと推定される。

上野遺跡第1地点出土土器は口端部に小波状を呈する細隆起線文を巡らし、口唇下に5～6条の細隆起線文を配して文様帯を区画している。また、文様帯の下端も5～6条の細隆起線文で区画するものである。区画された文様帯内には細隆起線文の斜格子目文が施文されている。文様帯区画線としての細隆起線文が5～6条と幅広く施文される点は、文様帯の上下に一定の施文域が設定されているものと判断され、横帯に3帯の施文域が設定されているものとも考えることも可能である。斜格子目文帯のみを文様帯と認識すると、1帯構成であるが、施文帯という概念から見ると3帯構成と把握することも可能であろう。

柳戸遺跡1は口縁部の反り具合が強いので、現存破片は口唇直下の部位と思われる。横位の細隆起線文は現状で2条であるが、増えたとしてもあと1条か、または口端部に巡られる波状隆起線文が存在するのみのと思われる。区画された文様帯内には縦位の並行する細隆起線文が垂下するため、格子目状のモチーフではなく別のモチーフが展開されるものと推定される。細隆起線文の段階で文様帯下の胴下半に垂下させるモチーフは栃木県大谷寺洞窟（高1976）や新潟県王遺跡（小林1982）等で散見されるが、区画された文様帯内

に縦位のモチーフを配するものは珍しい。

柳戸遺跡2は口縁部に数条の微隆起線文を施文するものであるが、微隆起線文が極細の貼付文であることは観察した通りである。やや強めに外反する口縁部に現存では6条までの微隆起線文が見られるもので、以下に文様帯を持つものとは思われない。大塚達朗氏の分類では1帯多条型に分類されよう（大塚1982）。微隆起線文には加飾は施されず、上端と下端の区画が不明瞭である。口唇外端部には、小波状を呈するやや太めの細隆起線文が巡っている。この小波状は指頭によって整形されているものと思われるが、遺存が「悪く不明瞭である。微隆起線文土器では山形県日向洞窟やノ沢岩陰等の出土土器（佐々木1971）が想起されるが、口唇部の作り等が異なる。口縁部が「やや強く外反する器形で、口唇部や微隆起線文上に加飾の少ない土器は、神奈川県月出松遺跡（横浜港湾北ニュータウン調査団1986）や栗木V遺跡（増田・後藤1978）等に出土例が知られる。県内の柳戸遺跡の付近では飯城市の小岩井渡場遺跡（安岡1977）が著名であるが、口唇部の作りや、微隆起線文の間隔等異なる点が多い。

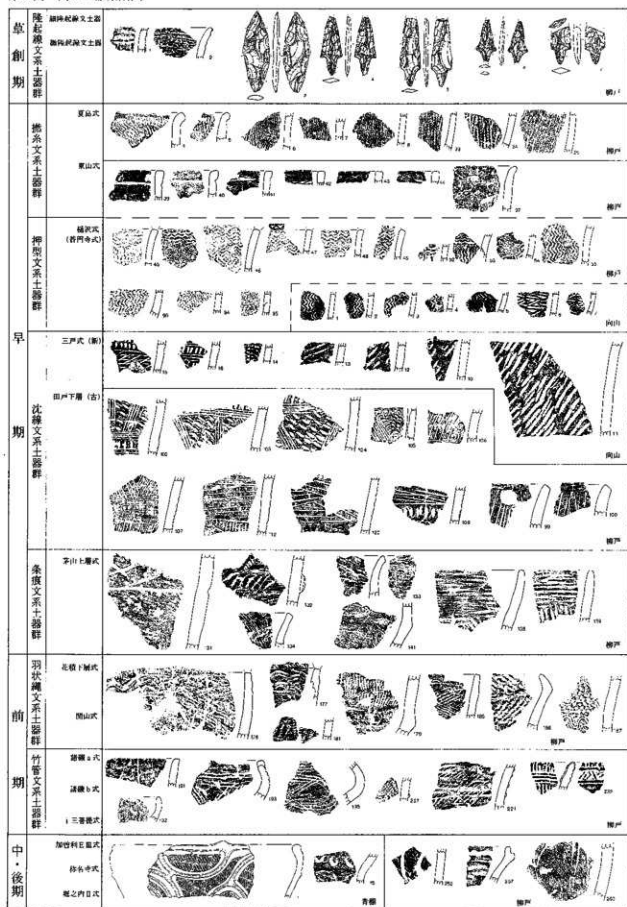
その他、柳戸遺跡からは草創期の石器群が出土しており、石槍を始めとして有茎尖頭器は明瞭であるが、石鏃は所属時期を決し難い。石槍や有茎尖頭器は大小の組み合わせがあり、組成の差異が時期差かは明瞭ではない。出土土器に新旧の時間差が看取されることから、石器群にも時期差が反映されている可能性があるものと思われる。2の土器は隆起線文系土器群の終末期に位置付けられるものと思われるが、富士見市ハケ上遺跡（高橋1985）の様相とも異なる。いまだに、隆起線文系土器群終末期から爪形文・多縄文系土器群への変遷には混沌とした様相が窺えるのである。

早期

早期は大きくは撚糸文系土器群、押型文系土器群、沈線文系土器群、条痕文系土器群が出土しているが、継続的に土器群が出土しているわけではない。

撚糸文系土器群は柳戸遺跡で出土しており、細かく

第98图 出土土器集成图



みると井草Ⅱ式、夏島式、稲荷台式、東山式が存在し、大半は夏島式である。

井草Ⅱ式土器は条線文を施文するもので、銘条体系線を口唇部上端に施文することから判定したが、場合によっては夏島式に含まれる可能性もある。

夏島式土器は大半が燃糸文で、縄文施文は数点を数えるに過ぎない。口縁部破片4、5は比較的太密の燃糸文を施文するか、胴部破片では細密の燃糸文が多い。口縁部は強く屈折する形態で、口唇部はやや角頭状を呈する。口唇下に燃糸文原を押圧する手法は、その系統性を明示すると共に、夏島式の中でも古段階という時間的な様相をも示している。夏島式の器形及び施文手法の系統性や地域性については四反歩遺跡（金子1993）で検討したが、一見一斉的で単純に写る夏島式は、細かな点において系統性と地域性を保有していることが明らかになってきた。

稲荷台式はその中でも新しい段階の無文土器が2点出土しているだけである。稲荷台式新段階を特徴付ける口唇端部の強い面取り状整形を有する土器については、明花向遺跡（金子1984）で注目し、その推移について検討したが、小室上台遺跡（金子1991）等の稲荷台式土器の検討を経て、メルクマールの一つになり得ることが明らかになると共に、地域的な要素の一つでもあることも明らかになってきた。

東山式土器は、型式判定可能な口縁部破片が6点出土している。原田昌幸氏は東山式をa、b、cの3段階に細分しているが（原田1986）、筆者はa段階の土器を稲荷原式の新段階の土器群と認識するため、柳戸遺跡出土土器は原田氏のb段階に当り所謂東山式土器として認識するものである。口縁部の沈線文には断面が丸や三角形を呈するもの等あり、口唇部形態も一様ではなく、これ等の相違は現時点ではバリエーションとして認識されるものと考えて置きたい。

押型文系土器群は向山遺跡と柳戸遺跡で出土している。向山遺跡では山形押型文のみ出土しているが、原体内には2種類が存在している。1つは横刻で原体幅の短い山形文（1～5）で、一方は縦刻でやはり原体幅

の短いものである（6、7）。口縁部破片が出土していないため詳細は不明であるが、横刻原体はやや間隔を開けて帯状施文されるものであり、縦刻原体は縦位密接施文である。

一方、柳戸遺跡では山形押型文とネガティブな格子目文（94）が出土している。山形押型文は異方向帯状施文されるもの（45、52～55）と、異方向密接施文するもの（46～49、90、94、95）があり、異方向帯状施文の45には口縁部裏面施文がある。異方向帯状施文土器は所謂縄文式、異方向密接施文は縄文式とされるものであるが、向山遺跡と柳戸遺跡では若干様相を異にする。これ等の押型文土器が何と伴うかが問題とされてきたが、筆者等は異方向帯状施文の沢式段階に東山式が対峙するものとの予測を立てた（宮崎・金子1990）。埼玉県内においても、東山式に明確に押型文が伴わないことは周知の事実であるが、稲荷原式段階では確実に山形押型文が存在することから、東山式段階でも相方となる押型文は確実に存在するはずである。東山式の型式としての排他性や、長野県向陽台遺跡（会田1988）での異方向帯状施文土器と口縁部に沈線文の巡る無文土器との共存関係等から、東山式と沢式の並行関係が導き出された。埼玉県内では沢式相当の土器群が検出されていないため検証することは難しいが、山形押型文の異方向帯状施文土器が、口縁部裏面施文等の型式学的に古い様相を持ち合わせている。

また、向山遺跡は縦刻原体が所謂日計式の原体を彷彿とさせる点や、稲荷原式新段階から東山式が出土している前原遺跡（青木1983）でも日計式的な変形山形文押型文が出土していること、帯状施文が明瞭であること等から、柳戸遺跡の異方向密接施文土器よりは古相を呈している。本来ならば、向山遺跡に東山式が伴うものと思われるが、実際は共存関係にない。柳戸遺跡では東山式が出土しており、異方向帯状施文の山形押型文と伴う可能性があるが、状況証拠ではない。同じく、圏外遺関係で調査された日高市の向山遺跡（黒坂1995）では、住居跡状の遺構とその内外から異方向帯状施文を中心とし、横位帯状間に鋸歯状沈線文帯を

挟むものや、密接化の強い山形押型文等に混じって、東山式土器が検出されている。確実な共伴関係をもって出土していないため、東山式が単独で存在するのか、いずれかの押型文と共伴関係にあるのかは実証が困難となっている。何れにしても、近接した時間内に位置付けられるものと思われ、型式学的に一部が共伴関係にある可能性は高い。今後、確実な住居跡や土壌等の一括資料の検出によって、共伴関係が確かめられていくものと思われる。また、その一括性の評価の前提には、異方向帯状施文土器と異方向密接施文土器、横位帯状施文土器との関係や、沢式と桶沢式土器の関係(中島1988)、東山式の新旧要素の認定等の問題点の解決が要求されるであろう。

更に、柳戸遺跡から細片で不明瞭ではあるが、ネガティブな格子目文土器が出土している点は、異系統土器の共伴という点から特筆される。日高市向山遺跡でも同様なネガティブ押型文が出土している。

沈線文系土器群は向山遺跡から三戸式土器が、柳戸遺跡からは田戸下層式が出土している。向山遺跡は刺突文の横帯区画内に格子目文を施文するもの(15)と、細かな刺突文土器(14)、斜位の粗い集合凹線文土器(10~13)が出土しているため、三戸式でも若干新しい様相を持つ土器群がまとまっている。また、柳戸遺跡は、三戸式的な横帯区画間に三角状の区画を施し刺

突文を充填するもの(102~106)、集合沈線文で多段の鋸歯状文を施文するもの(107)等三戸式的な要素を強く残す土器群が存在する。場合によっては、向山遺跡を三戸式に、柳戸遺跡の古相土器を三戸式の新段階と捉えることも可能である。しかし、全体像が不明であり、裏面整形と刺突文が田戸下層式的であることから、田戸下層式の古段階として捉えた。

条痕文系土器群は沈線の格子目文(131)や絡条体圧痕文等の数少ない有文土器から、茅山上層式段階と判定したが、明らかに繊維を多く含む等の花積下層式段階の条痕文土器も存在した。波状沈線文を持つ所謂下吉井式土器(176~177)は、その崩れ等から明らかに花積下層式段階に位置付けられるものであり、同一原体の羽状縄文土器(181)貝殻背圧痕文(179)屈曲口縁(186)完成された羽状縄文(185)等の時間幅のある何れの土器と伴うか問題となろう。

以上、草創期、早期の土器群についての私見を加えてきたが、前期では関山式、諸磯a式、諸磯b式、十三菩薩の柳戸遺跡から、中期では加曾利EⅢ式が青柳遺跡から、中・後期では称名寺式、堀之内Ⅱ式、加曾利B式、安行1式が柳戸遺跡から出土している。少量の小破片とはいえ、多くの情報を内包していることは言うまでもないが、紙面の都合もあり割愛し、草創期、早期に絞ることにした。

参考文献

- 本田造他 1988 「向陽台遺跡」塩尻市教育委員会
 青木秀雄 1983 「前原遺跡」宮代町教育委員会
 大塚達朗 1982 「隆起礫文土器群見—関東地方出土当該土器群の型式学的位置—」東京大学文学部考古学研究室研究紀要第1号
 金子直行 1984 「明花向・明花上ノ台・井沼方島堤・とうのこし」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第35集
 金子直行 1991 「小湫上台遺跡」船橋市教育委員会
 金子直行 1993 「四反歩遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第130集
 黒坂慎二 1995 「向山/上原/向原」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第155集
 古池聡他 1986 「月見野遺跡群上野遺跡第1地点」大和市文化財調査報告書第21集
 小林達雄 1982 「壬遺跡1982」国学院大学考古学研究室
 佐々木洋治 1971 「高島町史別巻」考古資料編
 高橋 敦 1985 「ハケ上遺跡第5地点」富士見市遺跡群III 富士見市教育委員会

- 中島 宏 1988 「関東地方における押型文土器編年の再検討」縄文早期を考える－押型文文化の諸問題
- 堀 静夫 1976 「大谷寺洞穴遺跡」栃木県史考古資料編1
- 原田昌幸 1986 「撫糸文系土器終末期の諸問題 無文土器「東山式」の設定」物質文化46
- 増田精一・後藤 健 「栗木IV遺跡」多摩緑沿線地区埋蔵文化財調査団
- 宮崎朝雄・金子直行 「撫糸文系土器群と押型文系土器群の関係」縄文時代創刊号
- 安岡路洋 1977 「小岩井渡場遺跡発掘調査概報」飯能市教育委員会
- 横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団 1986 「古代のよこはま」

付編

a 土壌分析

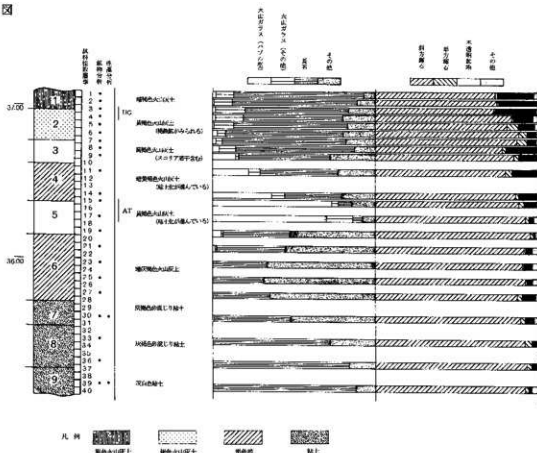
1. はじめに

柳戸遺跡（埼玉県鶴ヶ島市三ツ木所在）は、坂戸台地の縁辺部に立地する。坂戸台地は、高麗川によって形成された古い扇状地性の台地が段丘化したもので、武蔵野面に相当すると言われている（堀口，1986）。本遺跡は台地内から流れだした大谷川の左岸にあたり、現在は畑となっている。現在の集落は、遺跡の立地する面よりも一段高い面に立地する。

本遺跡では、これまでの発掘調査により、旧石器時代から近世にいたる遺構・遺物が検出されている。とくに旧石器時代の細石刃や細石刃核がまとまって出土しており、旧石器時代末にはこの地において細石刃文化が展開されていたことが明らかとなった。

今回、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団により、本遺跡の層序確立および古環境復元などについて自然科学的手法を応用した分析調査依頼が当社にあった。

第1図



当社では、同事業団と協議の結果、以下に示す分析調査課題を設定し、本遺跡周辺地域の古環境について検討することとした。

(1) 遺跡の基本層序と堆積環境

本遺跡のD区において、試掘坑が設定された。分層は、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団によって行われ、1層～9層まで層位番号が付けられた(図1)。1層下部～2層上部にかけて細石刃などが出土している。また、3層は大里ローム(堀口，1986)に対比できるのではないかと推測され、4層および6層はそれぞれ第1暗色帯(BBI)・第2暗色帯(BBII)に相当すると推測されている。現地調査の際に土層断面を観察した結果では、6層(標高36m付近)に深に灰褐色あるいは灰白色シルト質粘土の堆積が見られたが、これらの土層が地下水位の変動に伴う二次的な粘土層なのか水生堆積物なのか否かは層相などから判断でき

なかった。

ここでは、ローム層の鉱物分析を行い、各層の鉱物組成を明らかにして層序年代の確立を行うとともに、

1層下部～2層上部より検出された細石器の年代観把握についても留意する。軽鉱物組成では、とくに火山ガラスの産状に注目し、始良Tロ火山灰(AT:町田、新井, 1984)や立川ローム最上部ガラス質火山灰層(UG:山崎, 1978)と細石器などの遺物との関係を可能な限り把握する。一方、重鉱物組成では、立川ローム層や大里ローム層(堀口, 1986)の既存の分析結果との対比を行い、層相区分の検討を行う。また、6層以深に堆積する灰褐色あるいは灰白色シルト質粘土層については、地下水位の変動による二次的なものか水生堆積によるものなのかを調べるため、珪藻分析も合わせて行なうこととした。

(2) 縄文時代早期の古植生と炉穴の燃料材について
本遺跡のF区において、縄文時代早期の炉穴(F区FP-b)が検出された。炉穴の埋積土中には、多量の焼土が検出された。

分析調査に関する協議では、当初炉穴の埋積土を試料として、当時の古植生を推定するために、花粉分析を実施したいとの要望があったが、炉穴埋積土が黒ボク土であり、これまでの分析調査事例から花粉化石の保存状態が悪いと当社では判断した。したがって、同事業団と協議の結果、今回は花粉分析の概査を行い、花粉化石の有無を調べて、可能な限り当時の古植生に関する資料を得ることとした。また、同時に植物珪酸体分析を行い、当時の周辺地域のイネ科植生について検討も行うこととした。

植物珪酸体分析については、炉穴内で使用されたイネ科草本植物の燃料材についても検討することとした。とくに炉穴の焼土については、イネ科葉部細胞列や葉身機械細胞列の組織片の組成が土坑内の埋積土と焼土でどのように違うかに注目して解析を行う。これは、イネ科植物が生育しているときから組織に珪素を沈着させて珪化組織を作り、これがやうなどで草本類の燃料材が用いられると灰中に植物珪酸体の組織片の

形で残留している例(佐瀬, 1982; 大越, 1985)が多く、当時の燃料材推定が可能だからである。

2. 試料

(1) の分析調査課題に関する試料は、本遺跡D区に設定された試掘坑の土層断面から、5 cm厚で連続的に合計40点(試料番号1～40)を採取した。採取試料から分析目的を考慮して、当社にて鉱物分析試料および珪藻分析試料を選択した。鉱物分析試料は合計22点(試料番号1～9, 11, 14, 15, 17, 19, 21, 23, 25, 27, 30, 33, 36, 39)、珪藻分析試料は合計2点(試料番号30・39)である。本地点の層相および分析試料については、図1に示した。

(2) の分析調査課題に関する試料は、F区で検出された縄文時代早期の炉穴の土層断面から任意に合計5点(試料番号1～5)を採取した。また、焼土サンプル1点が同事業団により既に採取されており、当社では便宜上試料番号6として分析試料に含めた。採取試料のうち、花粉分析試料が合計3点(試料番号1・4・5)、植物珪酸体分析試料が合計6点(試料番号1～6)である。本地点の層相および試料については図2に示した。ただし、試料番号6については試料採取位置が不明である。

3. 分析方法

(1) 鉱物分析

試料約40 gに水を加え、超音波洗浄装置により分散する。その後250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後に篩別し、得られた粒径1/4mm～1/8mmの砂分をポリタングステート(比重約2.96)により重液分離する。得られた鉱物粒については、偏光顕微鏡下にて重鉱物・軽鉱物ともに250個に達するまで同定する。

同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とした。「不透明鉱物」以外の不透明粒子及び変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。また、

火山ガラスは、便宜上軽鉱物に入れ、その形態によりバブル型・中間型・軽石型・繊維束型の4タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は厚手平板状あるいは比較的大きな気泡を持つ塊状、軽石型は小気泡を非常に多く持つ塊状、繊維束状は、繊維状の筋が多数見られるものとする。

また、鉱物分析に用いなかった粒径の砂分についても双眼実体顕微鏡にて検鏡を行い、軽石やスコリアなどテフラの本質物質の有無についても検討した。

同定結果については、重鉱物・軽鉱物それぞれの総数を基数として百分率で表し、グラフに示した。

(2) 珪藻分析

試料約10gについて、過酸化水素水と塩酸により試料の泥化と有機物の分解・漂白，自然沈降法による粘土分の除去，傾斜法による砂質分の除去の順に行い、堆積物中から珪藻化石を濃集した。検鏡し易い濃度に希釈し、プリウラックスで封入して、プレパラートを作成した。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用いて、任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお、珪藻殻が半分以上破損したものについては、同定・計数を行って第2図

いない。珪藻の同定に着いては、K.Krammer & Lange-Bertalot (1986・1988)などを参考にした。なお、堆積環境の推定にあたって参考にした環境指標種(安藤, 1990など)や、個々の種の生態性(塩分、水素イオン濃度、水の流動性に対する適応性)について、結果表に合わせて記した。また、珪藻化石が100個体以上産出された試料については、各試料の産出種の合計を基数として、出現率4%以上を示す分類群について主要珪藻化石分布図を作成した。

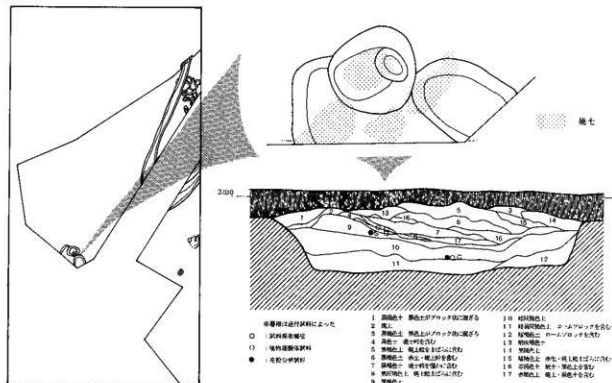
(3) 花粉分析

試料約10gについて、フッ化水素処理による試料の泥化、重液分離(臭化亜鉛:比重2.2)による有機物の濃集、アセトリシス処理(無水酢酸:氷酢酸=9:1)によるセルロースの分解、水酸化カリウム処理による腐植酸の溶解の順に行い、堆積物中から花粉化石を濃集した。

処理後の残渣の一部についてグリセリンで封入してプレパラートを作成し、その保存状態を観察した。

(4) 植物珪酸体分析

試料約10gについて、過酸化水素水と塩酸による有機物と鉄分の除去、超音波処理による試料の分散、沈降法による粘土分の除去、重液分離(臭化亜鉛:比重



2.3)の順に行い、植物珪酸体を分離・濃集した。検鏡し易い濃度に希釈した後、プレパラートを作成した。検鏡は光学顕微鏡下で、出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類を参考にして同定・計数した。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数を一覧表で示す。また、各種類(Taxa)の出現傾向から、生育していたイネ科植物を検討するために、植物珪酸体組成図を作成する。出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数として百分率で算出する。なお、機動細胞珪酸体の総数が100個未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、検出した種類を+で表示する。燃料材に関する検討では、イネ科の短細胞珪酸体列や機動細胞珪酸体列といった組織片を注目して分析する。

4. 結果

(1) 鉱物組成

分析結果を表3・図1に示す。軽鉱物では、試料番号15~17においてバブル型火山ガラスの多い層準が認められ、試料番号3~6に軽石型および中間型火山ガラスの多い層準が認められる。それ以外の試料では、長石の割合が高い。重鉱物では、全試料とも斜方輝石が高率で、不透明鉱物や斜方輝石を多少伴い、カンラン石をわずかに含む。

(2) 珪藻化石

各試料から産出した珪藻化石を表4に、主要珪藻化石の層位分布を図3に示す。

珪藻化石の産状は、壊れたものや溶解したものが多く、完形数は試料番号30が13%、試料番号39が35%と少なかった。また、産出分類群数は、全て淡水生種から構成され14属35分類群(23種、6変種、種不明6)

である。次に、試料別に珪藻化石群集の特徴を述べる。

試料番号30(7層)は、コケや土壤表面などに大気に曝された好気的環境に耐性のある陸生珪藻(小杉, 1986)の *Eunotia praerupta*, *Pinnularia borealis*, 湿地などに多い *Pinnularia* spp. が優勢し、最下流性河川指標種(安藤, 1990)でしかも多少の塩分があれば良く生育する好塩性の *Cyclotella meneghiniana*, 陸生珪藻類の *Eunotia praerupta* var. *bidens*, 湿地などに多い *Eunotia* spp. 沼沢湿地付着生種(安藤, 1990)の *Cymbella subaequalis*, 流水不定生の *Diploneisparma* などが多産する。試料番号39(9層)は、最下流性河川指標種の *Cyclotella meneghiniana* が優勢し、好止水生で浮遊性の *Aulacosira italica* var. *valida*, *A. italica*, *A. distans*, 湿地などに多い *Pinnularia* spp. が多産する。

(3) 花粉化石

結果を表5に示す。いずれも試料も花粉化石が少なく、また保存も極端に悪かった。

(4) 植物珪酸体の産状

結果を表6・図4に示す。イネ科植物起源の植物珪酸体の保存状態は、短細胞珪酸体で良好であるが、機動細胞珪酸体では表面に多くの小孔(溶食痕)が認められ、個体数も少ない。

炉穴の埋積土である試料番号1・4・5では、タケ亜科短細胞珪酸体が多産し、栽培植物のイネ属やキビ族・イチゴツナギ亜科などが少数検出される。また、焼土とされる試料番号2・3と試料番号6については、前2者と後者の間で植物珪酸体の組成が若干異なっている。試料番号2・3の植物珪酸体の出現傾向は、機動細胞珪酸体及び短細胞珪酸体ともタケ亜科が多産し、次いでキビ族・ヨシ属が検出される。これに対して、試料番号6では、ヨシ属短細胞珪酸体は検出されない。組織片については試料番号3でキビ族短細胞列がわずかに検出される。

表 3 就物分析結果

試料番号	火山(ハバ) スル型)	火 山 物			重 結 物				
		火 山 (ハ バ) ス ル 型)	長 石	そ の 他	カン ラン 石	角 方 輝 石	單 斜 輝 石	不 透 明 結 物	そ の 他
1	6	27	211	12		188	3	56	9
2	3	28	192	27		185	3	62	
3	5	44	160	41		180	4	64	2
4	5	42	151	52	1	208	3	30	8
5	3	29	173	45		202	18	25	3
6	7	12	178	53		218	13	15	4
7	5	10	187	48	1	215	18	15	2
8	10	28	180	35		193	5	52	
9	35	5	138	72		211	7	32	
11	56	18	119	58		199	11	40	
14	90	20	85	54		213	5	28	9
16	182	10	20	38		218	7	20	5
17	174	39	16	22	1	227	5	8	9
19	13	3	101	133		235	5	4	6
21	3	3	106	199		226	2	11	12
23			83	167		223	2	13	12
24			72	178		228	2	8	12
26			87	168		215	7	20	8
27			116	131		221	7	13	9
30		3	176	72		237	10	8	
33			207	43		230	8	8	4
36			218	32		237	7	5	1

表1 陸域の生態分類

塩分濃度に対する区分		塩分に対する対応性	生育環境 (例)
海水性:	鹽漬地生 (Polyhalobous)	塩分濃度 4% 以上に生育するもの	低緯度熱帯海域、塩水湖
	真塩地生 (Eukhalobous)	海塩濃度、塩分濃度 10-40、40-45、45% 以上生育するもの	一般海域 (大 大陸棚及び大陸棚以外の海域)
汽水性:	中塩地生 (Mesohalobous)	汽水性: 塩分濃度 0.5%、 10-15% 以上生育するもの	河口、内湾、沿岸、塩水湖、潟など
淡水性:	真淡水生 (Oligohalobous)	淡水性: 塩分濃度 0.5% 以下に生育するもの	一般淡水域 (急 瀬川、池、湖、河川、川、沼地代、裏)

表2 終水生類の名生特性に対する適応性

	塩分・pH・流水に対する区分	塩分・pH・流水に対する適性	生息環境(例)
塩分 に対する 区分	真塩・好塩性種 (Staphiophora)	小鹽の塩分がある方がよく生育するもの	高塩水域 (海水水面上・海岸・耕作土壌)
	真塩・不定性種 (Indifferens)	小鹽の塩分があってもこれに拘束することができないもの	一般淡水域 (湖沼・河・沼・河川・氾濫地 etc)
	真塩・耐塩性種 (Halobaphos)	小鹽の塩分にも耐えることができないもの	塩池・塩田・汽水域
	広塩性種 (Euryhalina)	塩分から高度濃度まで広い範囲の塩分濃度にも適応して生育する種類	一般淡水・汽水域
	真淡水性種 (Aciobiontic)	pH8.4以下に出現、pH8.5以下の酸性水域で最もよく生育するもの	鹽類・炭酸・火口湖 (酸性水域)
pH に対する 区分	好酸性種 (Acidophilous)	pH7.4付近に出現、pH7.5以下で最もよく生育するもの	鹽類・炭酸・汽水域
	pH・不定性種 (Indifferent)	pH7.4付近の中性水域でもよく生育するもの	一般淡水 (sr. 湖沼、池沼、河川)
	真アルカリ性種 (Alkaliphilous)	pH7.4付近に出現、pH8以上で最もよく生育するもの	
	真アルカリ性種 (Alkalibiontic)	pH8.5以上のアルカリ性水域にのみ出現するもの	アルカリ性水域 (少ない)
	真酸性性種 (Limnophilic)	酸性にのみ出現するもの	酸性水のある湖沼・氾濫地
流水 に対する 適性的 区分	好流水性種 (Limnophilous)	流水に特異的であるが、流水にも出現するもの	湖沼・池沼・流れの緩やかな川
	真流水性種 (Indifferens)	流水にも淡水にも適応に出現するもの	湖沼・川・池沼・湖沼
	好流水性種 (Rheophilous)	流水に特異的であるが、流水にも出現するもの	湖沼・川・小川・上流・山溪
	真流水性種 (Rheobiontic)	流水域にのみ出現するもの	湖沼・川・小川のある河川・渓流・上流域
	好陸性種 (Acrophilous)	水質的性質 (Aerial habitat) 水質以外の事に大いに拘束され特異な環境に生育する陸域の一部で 多少の湿り気とある程度の湿度と水の表面に生育可能 性、生活に必要とする特殊な土壌環境をいう	・生息場所の中心が湿った土や水 ・水の乾きや乾燥した土や水に付着 ・流れの緩慢で、十分な酸素、湿気、土に付着 ・湖沼人口や内湖の砂底などに生きた水質

(区分、適応性は田中・吉田・中島(1977)鳥羽湿地域学術調査報告書Ⅱp.114-121.を基に一括解説、整理については加筆し作成した。)

表4 硅藻分析結果

Species Name	Ecology			30	39
	H. R.	pH	C. R.		
<i>Amphora ovalis</i> var. <i>affinis</i> (Kuetz.) V. Heurck	Ogh-ind	al-bi	ind	1	-
[N] <i>Aulacosira ambigua</i> (Grun.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	3	2
[N] <i>Aulacosira distans</i> (Ehr.) Simonsen	Ogh-hob	ac-il	l-bi	-	7
[N] <i>Aulacosira granulata</i> (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	1	4
<i>Aulacosira italica</i> (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	10
<i>Aulacosira italica</i> var. <i>valida</i> (Grun.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	15
<i>Aulacosira</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	1
[·-B] <i>Caloneis leptosoma</i> Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	1	-
[L] <i>Cyclotella meneghiniana</i> Kuetzing	Ogh-hil	al-il	ind	6	40
<i>Cymbella amphioxys</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	ac-il	ind	3	-
[O] <i>Cymbella mesiana</i> Chotnoky	Ogh-ind	al-bi	l-bi	1	-
[O] <i>Cymbella subaequalis</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	5	-
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	3
<i>Diploneis parva</i> Cleve	Ogh-ind	ind	ind	5	1
<i>Eumotia gracilis</i> (Ehr.) Rabenhorst	Ogh-hob	ind	l-bi	2	-
[O] <i>Eumotia pectinalis</i> var. <i>minor</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	1	-
[·-B] [O] <i>Eumotia praerupta</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind	16	3
[·-B] [O] <i>Eumotia praerupta</i> var. <i>bidens</i> Grunow	Ogh-hob	ac-il	ind	6	5
[·-B] <i>Eumotia quaternaria</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	1	-
<i>Eumotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	6	-
<i>Fragilaria virescens</i> var. <i>exigua</i> Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	3	6
[O] <i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-bi	l-ph	1	-
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	1	-
[Q] <i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	3	-
[O] <i>Navicula elginensis</i> (Greg.) Ralfs	Ogh-ind	al-il	r-ph	1	-
[#] [O] <i>Navicula mutica</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	3	-
<i>Navicula plausibilis</i> Husted	Ogh-ind	ind	ind	2	-
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	1	-
<i>Opephora mortyi</i> Heribaud	Ogh-hil	al-il	l-ph	1	-
[O] <i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	13	2
[O] <i>Pinnularia borealis</i> var. <i>rectangularis</i> Carlson	Ogh-ind	ind	ind	2	-
<i>Pinnularia imperatrix</i> Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph	1	3
[O] <i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind	2	-
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	11	8
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) O. Muller	Ogh-hil	al-bi	ind	1	-
Marine Water Species				0	0
Marine to Brackish Water Species				0	0
Brackish Water Species				0	0
Fresh Water Species				104	110
Total Number of Diatoms				104	110

凡例

H. R.:塩分濃度に対する適応性

Ogh-hil:貧塩好塩性種

Ogh-ind:貧塩不定性種

Ogh-hob:貧塩嫌塩性種

Ogh-unk:貧塩不明種

pH:水素イオン濃度に対する適応性

al-bi:真酸性種

al-il:好酸性種

ind: pH不定性種

ac-il:好酸性種

ac-bl:真酸性種

unk: pH不明種

C. R.:流水に対する適応性

l-bi:真止水性種

l-ph:好止水性種

ind:流水不定性種

r-ph:好流水性種

r-bi:真流水性種

unk:流水不明種

環境指標種群

[M]:湖沼浮遊性種, [N]:湖沼沼澤湿地指標種, [L]:最下流性河川指標種, [O]:沼澤湿地付着性種, [Q]:陸域指標種, #:好汚濁性種, [-]:陸生硅藻, [-B]:B群

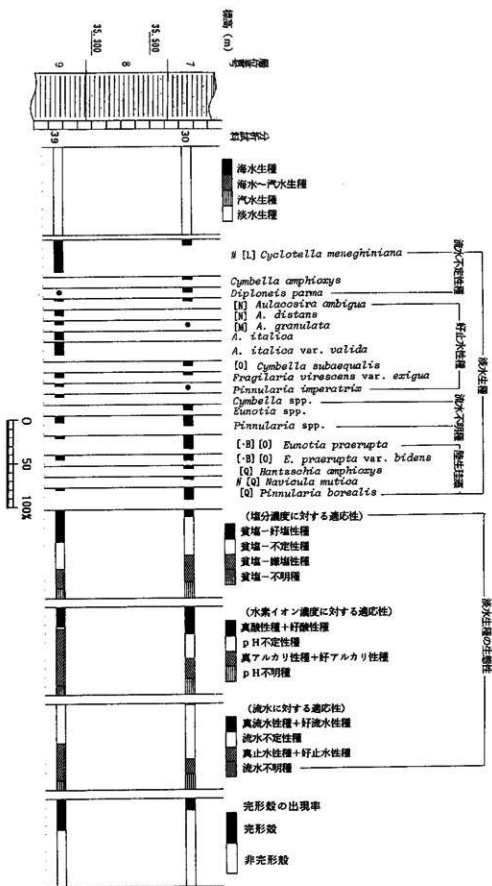


図3 D地区鉄礫土層断面の主要浮遊化石組成
各種類の産出率は、産出した個体の総数を基数として百分率で算出した。また、生態分類(海水・汽水・淡水性種)および完形殻に關しては産出個体の総数、淡水性種の適応性に關しては淡水性種の総数を基数とした比率で算出した。なお、●は1%未満を示す。種名に角括弧内にある記号は、[O]: 河口湿地付着性種(安藤, 1990)、[N]: 河口湾付着性種(安藤, 1990)、[M]: 河口湾付着性種(安藤, 1990)、[L]: 淡水性河川附着性種(安藤, 1990)、[Q]: 陸域附着性種(安藤, 1990)、#: 好汚濁性種(渡辺ほか, 1986)、[-B]: 好清水性種(渡辺ほか, 1986)、[B]: 陸生珪藻目群(伊藤・堀内, 1991)を表す。

5. 遺跡の基本層序と堆積環境

遺跡の層序を考えるにあたっては、既知のテフラ層との対比が重要である。そこで、立川ローム・大里ロームに特徴的な火山ガラスからなるテフラの検出を試みた。その結果、以下に示す2種類のテフラが検出された。

立川ローム最上部ガラス質火山灰層 (UG: 山崎, 1978)

特徴: 中間型および軽石型の火山ガラスが含まれる。

産状: 降灰層準は試料番号3~4付近であると考えられる。

給源・年代: 約1.3~1.4万年前に浅間山から噴出した板鼻黄色軽石層の細粒部であるといわれている (町田ほか, 1984)。

始良Tn火山灰 (AT: 町田, 新井, 1984)

特徴: パブル型火山ガラスが少量に含まれる。

産状: 降灰層準は試料番号17付近であると考えられる。

給源・年代: 約2.1~2.5万年前に九州の始良カルデラから噴出したとされる (町田・新井, 1991)。

これらのことから、1層最下部~2層最上部は、約1.3~1.4万年前、5層上部は、2.1~2.5万年前に堆積したものと推定される。また、UGは細石器文化層中に介在するとされており (町田ほか, 1984)、今回の結果はこれに調和している。重鉱物組成の結果を武蔵野面相当の台地上で行われた鉱物分析の結果 (鶴ヶ島町史編纂室, 1990; 細野・佐瀬, 1985など) と比較してみると、全体的にカンラン石および単斜輝石が少なく、とくにAT降灰以前でのカンラン石の割合が極端に少ない。埼玉県内のローム層序では、ATを境にしてカンラン石の割合が減少し、それを境として下部を立川ローム層、上部を大里ローム層として区分している (堀口, 1986) が、今回の結果ではこれが明確に現れていない。その理由としては、カンラン石や単斜輝石は変質に弱いことから、本遺跡のような地下水位の高い場所では地下水の影響によりこれらの鉱物が変質し、本

表5 花粉分析結果

種 類	試料番号	1	4	5
木本花粉				
カバノキ属	1	—	—	—
ハンノキ属	1	—	—	—
コナラ属・コナラ亜属	5	2	1	—
イボタノキ属	1	—	—	—
草本花粉				
イネ科	3	1	—	—
ナデシコ科	1	—	—	—
アリノトウグサ属	—	1	—	—
ヨモギ属	3	—	—	—
他のキク亜科	9	—	—	—
タンポポ科	1	—	—	—
シダ類孢子	1	6	—	—
合 計		26	10	1

来の組成が歪曲されていることが考えられる。一方、3層上部において単斜輝石がやや多いが、この傾向は南関東地方での標準土層区分のIV層中に一般的に見られる傾向である。したがって、層位的にもほぼ同時期に対比されるのであろう。

珪藻・陸生珪藻ともに多産することから、しばしば離水することもある湿地的環境下で堆積したことが推定される。また、9層は、最下流性河川指標種と淡水浮遊生種が多産し、陸生珪藻が少ないことから、塩類の集積し易い安定した池沼のような水域で堆積したものと推定される。

これらを基にすれば、遺跡周辺の環境変遷は、次ぎのように考えられる。本遺跡では周辺地域と異なり、武蔵野ローム層や立川ローム層の下部が存在しない。これは、大谷川の影響により風成層が堆積しなかったためと見られる。遺跡周辺が、現在の集落よりも一段低くなっているのはこのためと思われる。9~7層がこの時期に相当する土層であり、当初池沼的な水域環境であったものが、徐々に干上がっていく過程が珪藻化石群集組成から読み取れる。

遺跡周辺に風成層が堆積するようになったのは6層以降である。1層下部~2層上部にUG、5層にATを挟むことから、これらは大里ローム層~立川ローム層上部に相当すると思われる。この時期になる

表6 植物珪酸体分析結果

種 類 (Taxa)	試料番号	黒ボク土			焼土		
		1	4	5	2	3	6
イネ科葉部短細胞珪酸体							
イネ族イネ属		5	3	3	-	-	-
キビ族エノコログサ属		2	-	-	2	1	5
キビ族(その他)		5	2	1	39	11	29
タケ亜科ネザサ節		1	-	-	-	-	-
タケ亜科(その他)		326	289	291	169	57	155
ヨシ属		1	-	-	16	9	-
ウシクサ族コブナグサ属		1	-	1	13	4	6
ウシクサ族ススキ属		1	1	-	6	1	5
イチゴツナギ亜科(その他)		7	7	2	25	8	7
不明キビ型		113	32	9	382	164	191
不明ヒゲシバ型		39	9	1	45	26	27
不明ダンタ型		41	20	14	114	62	67

イネ科葉身細胞珪酸体							
イネ族イネ属		-	-	1	-	-	-
キビ族		-	-	1	10	19	4
タケ亜科ネザサ節		1	-	-	-	1	1
タケ亜科(その他)		12	13	4	45	41	26
ヨシ属		1	1	4	3	1	1
ウシクサ族		1	2	-	1	1	1
シバ属		-	1	3	-	-	-
不明		13	9	10	45	48	18

合 計							
イネ科葉部短細胞珪酸体		542	363	322	811	343	492
イネ科葉身細胞珪酸体		28	26	23	104	111	53
検 出 個 数		570	389	345	915	454	545

組 織 片							
イネ属短細胞列		1	-	3	-	-	-
キビ族短細胞列		-	-	-	-	1	-

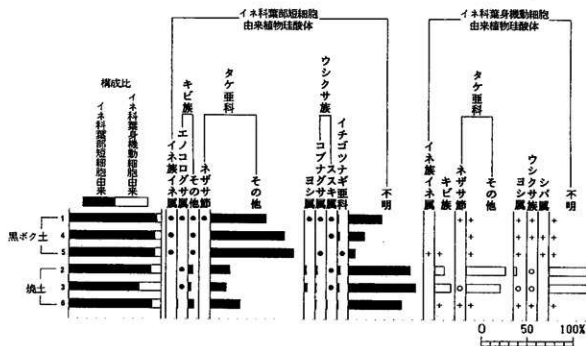


図4 植物珪酸体組成

植物珪酸体組成は、短細胞珪酸体・細胞細胞珪酸体ともにそれぞれの総数を基数として百分率で算出した。
なお○●は1%未満、+は細胞細胞珪酸体が100個体未満の試料において出現した種類を示す。

と周辺は陸化し、1層下部～2層上部において細石器文化が展開するようになったものと推測される。

6. 縄文時代早期の古植生と炉穴の燃料材

分析の結果、分析試料中に含まれる花粉化石の保存状態は悪かった。この要因として、好気的な環境における酸化分解などが考えられる。したがって、花粉化石からみた古植生の推定は困難である。

植物珪酸体分析結果では、当時周辺にはタケ亜科・キビ族・イチゴツナギ亜科などが生育していたと考えられる。分析結果ではタケ亜科が多く検出されたが、イネ科植物の中でもタケ亜科の植物珪酸体は、他のイネ科植物と比較して風化に強く、生産量が多いとされている(近藤, 1982; 杉山・藤原1986)。このことから、タケ亜科の検出は過大に評価される可能性がある。なお、栽培植物とされるイネ属が検出されるが、これは現地作から擾乱などにより混入したものであろう。

炉穴(F区FP-b)の焼土とされる試料の植物珪酸体は、焼土粒を含む埋積土と同様にタケ亜科が多く、焼後の灰中に多数認められる可能性がある組織片については少数しか認められない。植物珪酸体から燃料材を推定した例として、多摩ニュータウン遺跡の焼土に関する分析調査(佐瀬, 1982)や平賀遺跡群の炉址内焼土に関する分析調査(大越, 1985)がある。多摩ニュータウン遺跡の焼土の分析調査によれば、古墳時代には炉内燃料にススキなどのキビ亜科植物が選択的に利用されたと推定されている。また、平賀遺跡群の炉址内焼土の分析調査によれば、焼土中よりイネ科植物の葉

部組織片が多く検出される。縄文時代早期から奈良時代までは燃え付き易く火力の強いタケ亜科が使用されていたが、古墳時代から奈良時代にはススキ属・イネ属も多く検出され使用されたと推定されている。これらの調査結果を参考にすれば、焼土とされる試料にはキビ族・コブナグサ属・ススキ属・不明キビ型などが多く認められることから、タケ亜科やキビ族・不明キビ型を形成する植物(キビ族・ウシクサ族など)が燃料材に使用された可能性もあろう。しかし、これらの種類は覆土中にも多く認められていることや、組織片での検出も少ないことから断定することは難しい。

7. 総括

本遺跡周辺では、武蔵野ローム層以降の堆積が認められることが知られているが、本遺跡で風成層が認められるのは立川ローム層上部～大里ロームの時期からであり、それ以前は大谷川の影響をうけていたと考えられる。9層～7層の粘土層堆積時期がこれに相当すると考えられる。今回の珪藻分析により、当初地沼的な水成環境であった本遺跡周辺が徐々に干上がっていく堆積環境の変遷過程が推測された。

その後、本遺跡周辺には6層以降風成層が堆積するようになり、UGが降灰した前後には細石器文化が展開したと考えられる。

縄文時代早期の炉穴での植物珪酸体分析結果では、当時タケ亜科・キビ族・イチゴツナギ亜科などが遺跡周辺に生育していたと推測されたが、燃料材についてははっきりとはわからなかった。

引用文献

- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, p.73-88.
- 細野 衛・佐瀬 隆 (1985) 浦和市の関東ローム層一特に鉱物と植物珪酸体について. 浦和市史「調査報告書第17集自然編」, p.83-101.
- 堀口萬古 (1986) 埼玉県の地形と地質. 新編 埼玉県史 別編3 自然, p.7-74., 埼玉県.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用 Diatom, 6, p.23-45.
- 近藤健三 (1982) Plant opal 分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究. 昭和56年度科学研究費 (一般研究C) 研究成果報告書, 32p
- 近藤健三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, p.31-64.
- Krammer, K., and H. Lange-Bertalot. (1986・1988・1991) Bacillariophyceae, Suesswasserflora von Mitteleuropa 2(1・2・3):p.1-876, p.1-585, p.1-576.
- 小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境の解析とその意義—わが国への導入とその展望—, 植生史研究, 1, p.29-44.
- 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—始良 Tn 火山灰の発見とその意義—. 科学, 46, p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 (1984) テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—. 渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p.865-928.
- 町田 洋・新井房夫 (1991) 火山灰アトラス, p.1-276, 東京大学出版会.
- 大越昌子 (1985) プラント・オパール分析, 平賀遺跡群発掘調査報告書, p.803-815, 平賀遺跡群発掘調査会.
- 佐瀬 隆 (1982) 古墳時代住居址の炉に関する焼土について, —植物起源粒子の植物珪酸体から見て—, p.303-308, 多摩ニュータウン遺跡, 東京都埋蔵文化財センター調査報告書 (第2集).
- 杉山真二・藤原宏志 (1986) 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—. 考古学と自然科学, 19, p.69-84.
- 鶴ヶ島町史編纂室 (1990) 鶴ヶ島町史自然編 I 鶴ヶ島の地質, p.1-99., 鶴ヶ島町.
- 山崎晴雄 (1978) 立川断層とその第四紀後期の運動. 第四紀研究, 16, p.231-246.
- 渡辺仁治・山田要恵子・浅井一視 (1988) 珪藻群集による有機汚濁指数 (DAI po) の止水域への適用. 水質汚濁研究, 11, p.765-773.

b 柳戸・新山遺跡出土石器の化学分析

(株) 第四紀 地質研究所

井上 巖

石器及び原石の元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧:15KV、分析法:スプリント法、分析倍率:200倍、分析有効時間:100秒、分析指定元素10元素で行った。

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法(10元素全体で100%になる)で計算し、第1表化学分析表を作成した。

化学分析表に基づいてSiO₂-Al₂O₃、Fe₂O₃-MgO、K₂O-CaO等の各図を作成した。これらの図をもとに、石器及び原石を元素の面から分類した。

「1-1 SiO₂とAl₂O₃の相関について」

第1図SiO₂-Al₂O₃図には柳戸と新山遺跡の石器だけを記載した。

第4図には柳戸、新山遺跡の石器と原石を記載した。

第1図と第4図に示すようにI~VIの6グループと

“その他”に分類された。

柳戸と新山遺跡の石器は第1図に示すようにI、III、IV、VIの4グループと

“その他”に分れた。

Iグループ:新山遺跡の石器2個と柳戸遺跡の石器1個が共存する。SiO₂が7.4%以下と値が低いのが特徴。

IIIグループ:柳戸の石器3個だけで構成される。

IVグループ:柳戸と新山の石器で構成されるが4グループに細分される。

1グループには新山の石器4個が集中し、柳戸1個が混在する。2グループは柳戸の石器4個で構成される。3グループは新山の石器6個だけで構成される。4グループは新山の石2個と柳戸の石器2個が共存する。このように見てくるとIVグループのなかでも細分

化され、柳戸と新山遺跡の石器は異なるグループを作るのが特徴である。

VIグループ:新山と柳戸の石器各1個で構成される。

“その他”:柳戸20と30は明らかに各グループから離れ異質である。20はSiO₂が7.2%以下、30はSiO₂が7.7%以上と高い。

原石との対比の第4図では、IIIグループには鷹山の原石だけが混在する。

IV-1には鷹山と麦草峠の原石が混在する。IV-2にはなにも混在しない。

IV-3神津島、西餅屋、東餅屋、麦草峠、男女倉などが混在し、多種にわたる。IV-4には星葉峠の原石が混在する。このように比較的明確に各グループは特徴が認められた。

「1-2 SiO₂とFe₂O₃の相関について」

第2図SiO₂-Fe₂O₃図には柳戸と新山遺跡の石器、第5図SiO₂-Fe₂O₃図には原石と柳戸、新山遺跡の石器を記載した。

第5図に示すようにI~IVの4グループと“その他”に分類された。

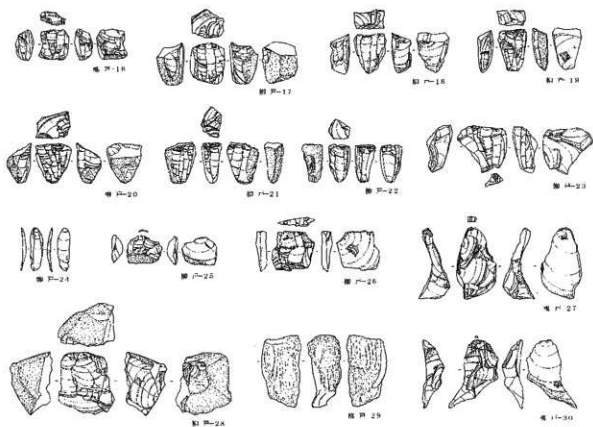
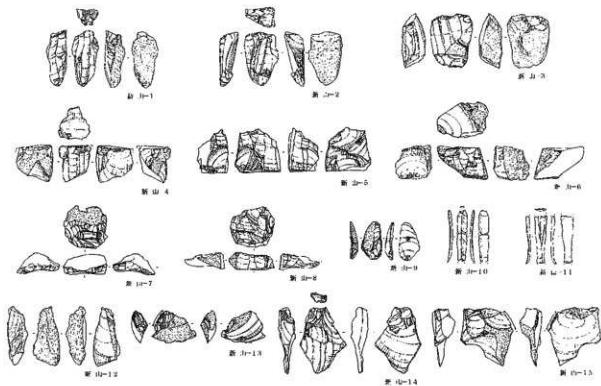
Iグループ:柳戸遺跡の石器が集中する。畑宿の原石が混在する。

IIグループ:畑宿の原石が集中する。

IIIグループ:新山の石器が集中し、柳戸の石器2個が混在する。男女倉、西餅屋、東餅屋、麦草峠、鷹山、神津島などと共存する。

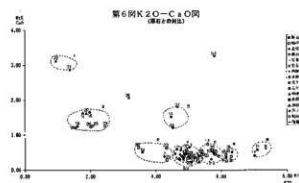
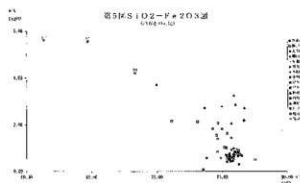
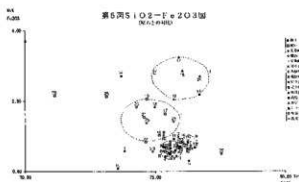
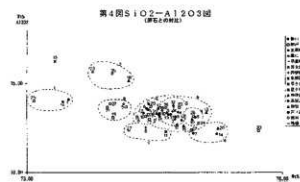
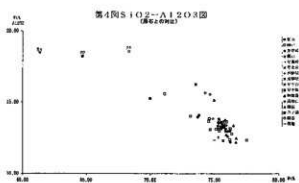
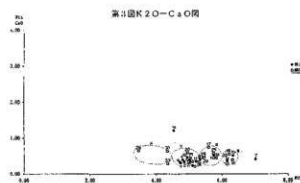
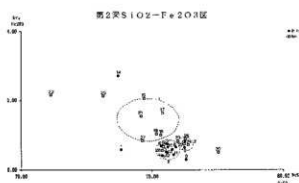
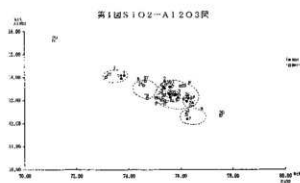
IVグループ:柳戸の石器が集中し、新山の石器が混在する。麦草峠、神津島などの原石と共存する。

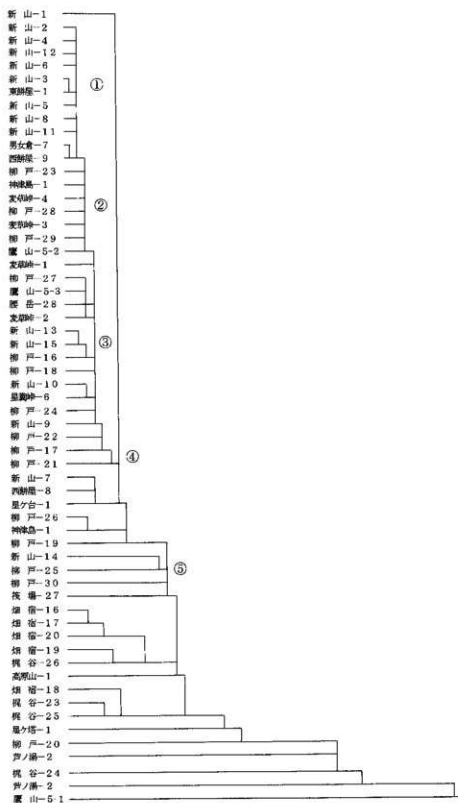
“その他”:新山-1、14、柳戸-20、25はSiO₂が7.5%以下で分布し、異質である。柳戸-3



第1表 化学分析表

試料番号	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	NiO	Total	備考
新山-1	6.09	0.00	14.09	73.83	4.74	0.30	0.09	0.28	0.58	0.00	100.00	
新山-2	5.08	0.00	13.83	75.39	4.85	0.33	0.04	0.06	0.42	0.00	100.00	
新山-3	4.74	0.00	13.30	75.54	5.03	0.34	0.05	0.18	0.52	0.30	100.00	
新山-4	5.08	0.00	13.53	75.38	4.80	0.39	0.02	0.29	0.41	0.10	100.00	
新山-5	4.83	0.00	13.26	75.58	5.10	0.23	0.00	0.00	0.75	0.26	100.01	
新山-6	4.70	0.00	13.59	75.35	4.72	0.32	0.27	0.27	0.69	0.09	100.00	
新山-7	2.85	0.00	12.20	76.26	7.02	0.41	0.05	0.17	0.82	0.22	100.00	
新山-8	4.11	0.00	13.12	75.91	5.33	0.41	0.15	0.21	0.66	0.10	100.00	
新山-9	4.35	0.00	13.10	76.30	5.01	0.38	0.00	0.44	0.30	0.14	100.02	
新山-10	3.26	0.00	12.97	76.24	5.74	0.33	0.03	0.45	0.65	0.12	99.99	
新山-11	4.25	0.00	13.26	75.82	5.20	0.35	0.11	0.56	0.44	0.00	99.99	
新山-12	4.46	0.00	13.59	75.58	4.94	0.46	0.09	0.39	0.50	0.00	100.01	
新山-13	3.47	0.00	13.24	75.77	6.15	0.36	0.08	0.27	0.59	0.07	100.00	
新山-14	3.00	0.01	13.96	73.72	4.53	1.21	0.46	0.35	2.71	0.05	100.00	
新山-15	3.20	0.00	13.14	75.60	6.33	0.51	0.21	0.34	0.66	0.00	99.99	
柳戸-16	3.49	0.00	13.14	75.33	6.31	0.39	0.02	0.29	1.01	0.00	99.98	
柳戸-17	3.12	0.00	12.99	75.40	5.59	0.74	0.37	0.15	1.64	0.00	100.00	
柳戸-18	3.89	0.00	13.12	75.16	5.82	0.45	0.02	0.44	1.03	0.07	100.00	
柳戸-19	2.89	0.00	13.09	74.70	6.22	0.55	0.21	0.04	2.06	0.23	99.99	
柳戸-20	4.91	0.00	15.59	71.14	4.95	0.59	0.27	0.24	2.16	0.15	100.00	
柳戸-21	4.38	0.00	13.67	74.58	5.03	0.44	0.15	0.17	1.55	0.03	100.00	
柳戸-22	3.68	0.00	12.38	76.22	6.15	0.43	0.10	0.30	0.75	0.00	100.01	
柳戸-23	4.63	0.00	13.64	75.99	4.34	0.29	0.21	0.00	0.83	0.07	100.00	
柳戸-24	4.03	0.00	12.77	76.37	5.29	0.33	0.07	0.13	0.73	0.28	100.00	
柳戸-25	3.66	0.00	14.02	73.14	5.73	0.58	0.14	0.42	2.13	0.18	100.00	
柳戸-26	5.15	0.00	13.16	76.26	3.47	0.65	0.14	0.27	0.89	0.00	99.99	
柳戸-27	4.88	0.00	13.85	74.64	4.98	0.34	0.26	0.08	0.84	0.12	99.99	
柳戸-28	4.34	0.00	13.24	75.38	5.42	0.46	0.29	0.31	0.57	0.00	100.01	
柳戸-29	4.25	0.00	13.69	75.43	5.46	0.45	0.05	0.00	0.67	0.00	100.00	
柳戸-30	4.13	0.00	12.34	77.54	4.33	0.63	0.19	0.11	0.51	0.22	100.00	
麦草峠-1	4.79	0.07	12.94	76.03	4.59	0.47	0.19	0.08	0.83	0.00	99.99	
麦草峠-2	5.36	0.00	13.35	75.29	4.26	0.39	0.24	0.17	0.71	0.24	100.01	
麦草峠-3	3.61	0.00	12.99	75.90	5.03	0.65	0.09	0.41	0.99	0.32	99.99	
麦草峠-4	4.43	0.00	13.40	75.96	4.76	0.57	0.07	0.00	0.71	0.11	100.01	
鷹山-5-1	3.30	0.48	18.49	61.35	5.80	3.27	0.97	0.72	5.61	0.00	99.99	
鷹山-5-2	3.96	0.00	13.47	75.65	5.70	0.32	0.09	0.37	0.43	0.00	99.99	
鷹山-5-3	4.82	0.00	13.85	74.90	4.88	0.39	0.10	0.47	0.57	0.00	99.98	
足貫峠-6	3.44	0.00	13.02	76.09	6.06	0.34	0.00	0.09	0.96	0.00	100.00	
男女倉-7	4.23	0.00	13.48	75.90	5.24	0.36	0.25	0.00	0.55	0.00	100.01	
西餅屋-8	2.72	0.00	12.54	75.33	7.35	0.61	0.00	0.41	1.04	0.00	100.00	
西餅屋-9	3.95	0.00	13.43	75.85	5.38	0.41	0.00	0.21	0.72	0.04	99.99	
東餅屋-10	4.69	0.00	13.30	75.60	4.87	0.46	0.19	0.17	0.57	0.16	100.01	
星ヶ台-11	2.68	0.00	12.30	75.72	7.10	0.59	0.00	0.45	0.93	0.23	100.00	
星ヶ台-12	3.17	0.00	16.25	73.56	5.78	0.48	0.04	0.49	0.08	0.16	100.01	
神津島-15	3.78	0.00	13.77	75.87	4.64	0.60	0.00	0.26	0.74	0.34	100.00	
神津島-13	5.03	0.00	13.37	76.52	3.59	0.53	0.22	0.00	0.69	0.05	100.00	
高原山-14	2.80	0.00	12.17	76.72	4.47	1.53	0.12	0.00	2.19	0.00	100.00	
畑宿-16	4.32	0.02	12.63	76.07	1.98	1.67	0.28	0.00	2.86	0.18	100.01	
畑宿-17	3.86	0.01	12.71	75.94	1.77	1.64	0.46	0.06	3.25	0.30	100.00	
畑宿-18	4.66	0.06	15.16	75.00	1.55	1.22	0.26	0.24	1.84	0.00	99.99	
畑宿-19	5.52	0.00	13.36	75.74	1.61	1.26	0.21	0.26	2.06	0.00	100.02	
畑宿-20	4.09	0.00	12.48	76.74	1.88	1.63	0.47	0.00	2.71	0.00	100.00	
戸ノ湯-21	4.72	0.83	15.28	70.01	1.38	2.87	0.59	0.35	3.70	0.28	100.01	
戸ノ湯-22	4.59	1.10	18.24	64.72	0.94	3.11	0.31	0.22	5.55	1.23	100.01	
梶谷-23	3.88	0.00	15.65	74.30	2.45	1.25	0.09	0.34	1.83	0.22	100.01	
梶谷-24	2.04	0.09	18.57	68.36	3.18	2.07	0.41	0.41	4.22	0.63	100.00	
梶谷-25	4.61	0.00	15.55	74.68	2.07	1.26	0.29	0.00	1.39	0.14	99.99	
梶谷-26	5.73	0.00	13.62	75.72	2.01	1.24	0.11	0.08	1.43	0.05	99.99	
夜場-27	2.64	0.00	12.34	75.00	4.67	1.80	0.56	0.15	2.77	0.07	100.00	
腰岳-28	4.48	0.00	13.59	74.91	5.09	0.48	0.05	0.39	0.74	0.27	100.00	





0はSiO₂が77%以上と高く、異質である。

以上の結果から明らかな様に、Iグループには柳戸遺跡の石器が集中し、畑宿の原石と混在する。このグループはFe₂O₃の値が高く、異質である。

IIIグループには新山遺跡の石器が集中し、柳戸遺跡の石器と共存する。IVグループには柳戸遺跡の石器が集中し、新山遺跡の石器と共存する。このように見てくると柳戸遺跡の石器と新山遺跡の石器は明瞭に分れていることがわかる。新山遺跡の石器は男女倉、麦草峠、西餅屋、東餅屋などと同じグループを形成する傾向が認められる。

「1-3 K₂OとCaOの相関について」

第3図K₂O-CaO図には柳戸と新山遺跡の石器、第6図K₂O-CaO図には両遺跡の石器と原石が記載してある。第6図に示すように、I~Ⅷの8グループと「その他」に分類された。

Iグループ：芦ノ湯の原石2個。

IIグループ：畑宿と梶谷の原石が集中する。

IIIグループ：新山1-4の石器と高原山、筏場の原石が混在する。

IVグループ：柳戸遺跡の石器3個と神津島、麦草峠の原石が共存する。

Vグループ：新山遺跡の石器が集中し、柳戸遺跡の石器が共存する。男女倉、東餅屋、鷹山、麦草峠、神津島の原石と共存する。

VIグループ：柳戸遺跡の石器が集中し、西餅屋、星ヶ台、鷹山と共存する。

VIIグループ：柳戸遺跡の石器と新山遺跡の石器、星ヶ峠の原石が混在する。

VIIIグループ：新山遺跡の石器、西餅屋、星ヶ台の原

石が混在する。

「その他」：鷹山5-1、梶谷2-4の2個の原石はどのグループにも属さず、異質である。

以上の結果から明らかな様に、柳戸遺跡の石器と新山遺跡の石器は異なるグループに集中する傾向が強い。原石類は地域によってグループ化する傾向が認められる。

「1-4 クラスタ分析について」

第7図SiO₂-Al₂O₃-Fe₂O₃-K₂O系統樹図に示すように、柳戸と新山遺跡の石器は1~5の5グループに分れる傾向が認められる。

1グループには新山遺跡の石器が集中し、西餅屋の原石が同じグループに属する。2グループには柳戸遺跡の石器が集中し、西餅屋、麦草峠、神津島の原石が混在する。3グループは新山遺跡の石器が集中し、柳戸遺跡の石器が共存し、鷹山、麦草峠、星ヶ峠が混在する。4グループには柳戸遺跡の石器が集中し、新山遺跡の石器が混在する。5グループには柳戸遺跡の石器が集中し、新山遺跡の石器が混在する。この5グループに属する石器類は第1図~第6図のなかでは「その他」として取り扱われたもので、集中度が低く、分散して図中に記載されるもので、異質である。

2 まとめ

1) 化学分析結果では、柳戸遺跡の石器と新山遺跡の石器は明瞭に分れる傾向が認められた。柳戸遺跡の石器は信州系の原石や神津島等とは異なる組成を示している。これとは対照的に、新山遺跡の石器は信州系の原石と組成的に近い関係にある。

